
Seed **発芽の物語**

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seed 発芽の物語

【Nコード】

N1755V

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

シンオウ地方のジムバッジを七つ所有するノブオは、アナトリア地方からやってきた新米トレーナーのアスルと出会う。ひよんなことから二人は共に旅をすることになった。アスルはトレーナーとしての成長のために、ノブオは内に秘める目的のために。

プロローグ(前書き)

S e e d

英単語の「
種や種子を意味する。

プロローグ

晴天、炎天の下。おれのギャロップがそこら一帯の石畳の上を駆けまわる。

いくら夏のコトブキシティとはいえここまで暑くなるのは異常であって、故にギャロップは攻勢に転じれないでいる。

石畳の表面温度も高い。底が薄くなった靴からも分かるのに、なぜこの熱で敵対するキマワリはぶっ倒れてくれないんだ。まわりの人間だって、これが決勝戦だからよく応援できるくらい弱っているのに。

「いいぞキマワリ、焦らずじっくり狙え！」

対戦相手の快活そうな短パン小僧が声高らかに指示をする。それから間もなく、何かの衛星砲よろしく黄色の太い光条が上空からギャロップめがけて降り注ぐ。湧き上がる歓声。いや、悲鳴か？

しかし高速で不規則に駆け巡るおれのギャロップにはかすりもしない。元から熱せられた石畳が光条によりさらに熱せられ、これとは別の破壊力ではじけ飛んでいく。安全な場所から悲鳴が数人分の気が散るから黙ってくれよ。

光条の半径は一メートル弱といったところか。これを含めて九の焦げ跡が　そこまで思考を巡らせ、おれはこれを見逃さなかった。「反転、反撃しろ！」

黄色の光条から逃げ回るギャロップにはこの好機は映ってはいない。身体を観察すれば分かる。

ギャロップの急転換、キマワリに向けての突撃と自身の炎上。一気にカタをつけないといけないのはこいつもよく分かっている。動きがランダムではなく一直線のものになっているのはそのためだ。「当てる、ソーラービームッ！」

相手のトレーナーが素早く指示をする。そんな事はキマワリだって分かっているだろう。だが

「どうした、どうして撃たなあッ!?」

もう弾切れなんだよ。見るよ、そいつもう荒く息してるじゃねえか。

自分のポケモンが同じ技をどれだけ使えるかはきちんと把握しなくてはならない。これを怠っていないにしても、残弾数は把握しなくてはならない。

それに、キマワリ種特有の特性「サンパワー」のデメリットを考慮した作戦とは言い難い。

事前にポワルンにほんばれを使用させ、ただでさえ暑いコトブキの一地帯　つまりはここ、ポケモンセンター「セントラル」前の広場だ　をクソ暑くさせてキマワリに交代するまではいい。

日差しがかなり強い天候にて発動する特性「サンパワー」による良性回路干渉因子の分泌により、ソーラービームの破壊力を高めるのも悪くはない。問題は「それしか相手の打つ手がなかった」ことだ。

烈火に身を包んでキマワリに突撃したギャロップは、キマワリの体を吹き飛ばしていく。バトルフィールドを囲う観客の歓声。うるさい、気が散る。

ギャロップは突撃　フレアドライブという名の、高威力かつ反動の大きさからダメージを受ける諸刃の剣　の反動によってふらつき、その体を横たえてしまう。仕方がない、まぐれとはいえ一度キマワリのソーラービームを頭に喰らっているのだから。

しかし、まだまだいけるぞとでも言いたげに、荒々しい鳴き声を小さいながら漏らしている。

一方、身体の一部を炎上させつつ吹き飛んだキマワリには、もはや戦闘を続けるだけの余力が残されていないらしい。当然だ、おれのギャロップのフレアドライブをもろに喰らっておいて立ちあがれる草タイプのポケモンなんているはずがない。

短パン小僧は、既に自己治療かなにかで燃え上がっていた身体の消火を終えていたキマワリを戻す。その表情は悔しそうに歪んでいる。

るのが手に取るように分かった。

この場合だとタイプ相性を顧みれば威力は落ちるものの、サンパワーにクソ暑い日差しが加われればソーラービームの連射は夢ではない。

威力、弾速共にハイレベルなこの技の欠点は連射が効かないことにある。これを解消する条件が異常な日差しの強さであり、さらにサンパワーが自らの体力を削りながら良性回路干渉因子を分泌するギャロップがもう一発喰らっていれば、そこで一巻の終わりと言えただろう。もっとも、おれにはもう一匹のポケモンが残っていて、こいつでもキマワリを倒すのは簡単だから、そこまで大げさに言うほどでもない。

命中精度を上げるためにソーラービームを花の顔面からではなく、何らかの訓練の過程の末に上空からぶつ放すとは、このキマワリ単体で言えばなかなか良いポケモンだといえる。

これのもつ力を引き出してやるのが良いポケモントレーナーであることはいわずもがな、である。しかし、この相手のトレーナーでは力量不足だと言える。何故なら

「ごめんなあキマワリい、なるべく早くポケセンに連れてってやるからなあ」

顔をどうにか穏やかなものに戻しつつ、左手に握るモンスターボールの赤いトラクタービームをキマワリに打ち込みながらそんな甘いことを言っているからだ。

甘すぎる。敗北の責の九割方がこの短パン小僧にあるとしても、それでも厳しい態度を取らなくてはならない。そうでなければポケモンは安堵し、トレーナーを舐めくさり、あらゆる面で弛緩するようになってしまう。

……だが、これでいい。トレーナーとして大成するための道を歩くには、そんな助言をくれてやる必要はない。

おれは自力で立ちあがろうとしているギャロップをモンスターボ

ールに戻しながら、バトルフィールドの中央に歩み出る。石畳の上には計九ヶ所の焦げ跡。その一つ一つの大きさから、あのキマワリの優秀さを改めて感じ取る。

「この勝負は楽しかった……良いポケモンを育てているな」

「どうしたよ、そんなにやけて。普通に笑えばいいよ。ま、同じ夢を目指す者同士、頑張っていくべ」

おれよりも少し背の低い短パン小僧は左手を差し伸べる。なかなか愛嬌のある顔だった。

にやけている、か。無理もないだろう、自らの夢への道を妨害する可能性がこれで一つ減ったことを確信したのだから。

「ああ、お前はその甘いやり方で上を目指せばいい」

「甘い？ それってなんだ、舐めてるのか？」

「いいや。大歓迎だ、そういうのは」

おれは左手で相手の手をとる。その瞬間、観客達の歓声の中にひととき大きな、エコーがかかって増幅されていると分かる声がかかるのを聞く。相手の顔に無邪気な笑顔が浮かぶ。こいつ馬鹿じゃねえのか。

「ただいま、コトブキシテイ杯ジムバッジセブン部門優勝者が決定しましたあ！ その名は……ミヤモト・ノブオオツ！！」

うるさいと思いつつ、ドラムロールの一つもないのはどういう了見だと、矛盾した突っ込みをかます。勿論、口には出さずに。

コトブキシテイ杯という題目のポケモンバトル大会に出場した理由は、おれがどれだけ実力をつけたかを確認するためのものだ。

カントーのオーキドという名のポケモン研究者が、ポケモンの技に関連する新発見をしておよそ二年。おれは新発見より少し後に、あることを成すと決めた。

知識面においてポケモンバトルでのアドバンテージを握ることだ。

そのために二年もミオシティの図書館に入り浸っていた。

元よりおれのトレーナーとしての技量とパートナーの実力は釣り合っただけだが、これでは不十分だ。知識面で劣っていれば、いつかはそこをつく相手が現れるだろう。

コトブキシティ杯の、ジムバッジを七つ所有しているトレーナーが参加資格を有するジムバッジゼブン部門。なかなか強敵は多かったが、とりあえずは勝っている。

大勝利とは言えないが、及第点とは言えるだろう。現に、先の決戦ではマニニューラを残して勝ったのだから。

二年も図書館づけになっていたのもう一つ理由がある。落ち着きを得るために本を読みたかったのだ。

本を読めば落ち着いた心を手に入れられるわけでもないが、二年前より前のおれは今思い起こすだけでも恥ずかしく、そして殺してやりたいと思うほどに悪びれた人間だった。

深く反省するための時間が欲しかった。おれは自分のポケモンに酷い仕打ちをしてしまって、それでもポケモン達はおれの事情を踏まえてついてきてくれている。

あの時をきっかけにやっと気付けたんだ。自分を満たすためにポケモンを酷使するのがどれだけいけないことかって。

既に太陽は西に傾き、空には星がぼつぼつと見え始めている。影が東に薄く細長く伸びていて、もっと先へ伸びていくぞとおれの影が囁いている気がした。

座る者が東を向くように置かれた、簡素な木製のベンチに腰掛けてからのどのくらいの時間が経っただろう。

あの大会が終わったのが二時、質素なトロフィーを宅配便におしつけて、セントラルでとっている部屋で昼寝をして。それから散歩に出てテレビ塔の近くにあるベンチに腰掛けている。

上を見上げれば、塔が現在の時刻をデジタル掲示板で示している。

18:49と、黄色の電光は告げていた。

そろそろセントラルであてがわれた部屋に戻ろう。明日は早くここを発たなければ。八つ目のジムバッジを得るためにナギサシティまで行かなければいけないのだから。

「……いよいよ大詰めのはじまりか。早いとこ寝て、調子を整えねえと」

おれは腰のベルトにつけている小さなサイズのモンスターボールの一つを手に取る。ギャロップが収められているボールだ。

このボールを手に取る度、おれは途轍もない罪悪感にさいなまれる。いや、それはおれが持つどのボールを持つてもそうだ。

こいつらには本当にひどいことをしてしまった。おれのわがままに付き合ってくれたのは嬉しいけど、昔のおれはこいつらに甘え過ぎていた。

それにしても少しばかりじめじめしてやがる。こつこつという湿った空気がノモセだけで十分だったのに。

これは口に出さないでおこう。もしもここにノモセシティの出身者がいれば、おれはそいつに喧嘩を売ることになる。

だが、本当に暑いものは暑い。寒冷な気候であるとされるシンオウ地方だが、季節には勝てないらしい。

北部なら涼しいか寒いかのどちらかだろうが、この地帯だと冷気が回ってこないようだ。

街のビルの明かりや街灯が点き、ビルに内包される飲食店の看板がライトアップされ、いかにも夜の街であるようにコトブキシティの市街地が立ち振る舞っている。

そこを車やバイクのエンジン音や、人々の笑い声や時々怒鳴り声などの喧騒が埋め尽くしていく。いかにも都会って感じた。

「ヘーイ、タクシーっ！」

どこか平和を感じさせる喧騒の中で浮いている声が聞こえた。

その声はおれの前の方から聞こえている。

やや高い声だけを聞けば、それが女のものであるらしいことは分かったし、黄色いスポーツカーに向けて両手を挙げつつタクシーと連呼している変な格好をした人間を見れば、確かに女だった。

頭には白い布を巻いていて、服は……少し暗くてよく分からないが、絨毯の模様をそのままトレースしたような、ゆったりとしたものだ。下も同じような柄の、ゆったりとしたロングスカート。季節を顧みれば間違った服装だと断言できる。

「あれー、なんでドアが開かないの？」

それはタクシーではないからだ。

「……なんか、車の人に笑われてる？」

「そりゃあそうだろ、その車はタクシーじゃねえし」

あまりにも滑稽な光景だから笑いを隠しきれないながらも、おれは近づいて教えてやることにする。

女は目を見開いて振り返りながら小さな悲鳴を上げる。そこでおれは面倒な事実気付いた。

ああ、この女 いや、少女と言うべきか は遠い地方の出身者らしい。ろくに肌を露出していないが、まともに見せている顔だけを見れば分かった。

大きな丸い目に高い鼻、形のよい口。活発な印象を与える輪郭や少女が醸し出す雰囲気、やや濃いながらもそこそこかわいいなという印象を抱いた。

「黄色い車ってタクシーじゃないの？」

「どう見たって少し値段が高いスポーツカーだろ。大体にしてタクシーなら、客を助手席に座らせるか？」

そこでようやく少女は納得がいったらしい。黄色い車に頭を下げ、しかし軽快なクラクションを短く鳴らしたドライバーは車を北の方へと走らせて行ってしまった。

それを見送った少女は小さくため息をつく。おれはその残念そうな吐息を見逃さなかった。

「タクシーに乗ってどこへ行こうとしていたんだ？」

「セントラルってポケモンセンター。私は今日、そこでお泊りする予定なんだ」

偶然の一致と言うには母数が少ない確率だ。そうかあなたもですか、セントラルは大きいですね。なんて言葉が浮かぶ。

「おれもそこに用があるんだ。でも、タクシーなんて呼ばなくても歩けば二十分程度で着くの」

「恥ずかしい話だけど、この街に来たのは初めてなの。あまりにも大きくて広いから、迷っちゃって。それに私、方向音痴だし」

見れば、左手に何か地図らしき紙を握っているのが分かる。くしやくしやになっってしまったそれは、彼女にとって意味を成さないものだったのだ。

「ここから北に歩けばいいんだ、簡単さ」

方向音痴に北と言ってもどこか分からないに違いないから、おれは右手で少女の小さな左手を取る。

「え？」

「道案内だよ。そろそろ暗くなるし、あまりケースが無いとはいえ、女の子の一人歩きは物騒だからな」

「ありがとう。でも、もつと人を信用した方がいいと思うわ」

薄暗がりの中でも明るい笑顔と分かる表情を浮かべながら少女は言う。信用ねえ……

きつとこの少女は人を疑う事を知らないのだろう。それは幸せなことであるし、同時に不幸せなことでもある。

「私もあなたを信用しているもの。セントラルまでよろしくね」

「あ、ああ……」

まっすぐなまなざしが痛い。こういう手合いは苦手だ。

「そうだ、自己紹介が遅れたわ。私の名前はアスル。アナトリア地方の出身よ」

「アナトリアって……かなり遠いなんてものじゃないよな。いや、名前しか知らないけど。おれの名前はノブオだ」

「うんうん、ノブオね。それでね、二年前にシンオウにやってきた

の。言葉も文化も違うから、慣れるのに凄く時間がかかった。少なくとも二年間はこちらの地方のことについて学んでいる事になる。その七割は言語についてなのだろうと勝手に予測を立ててみる。

「アスルのこっちの言葉は、片言でもないしイントネーションもばつちりだし、凄いな」

「そう？　ありがとう」

「でも、どうしてこっちに来たんだ？　ああほら、何のために言葉や文化を学んでシンオウにやってきたのかって」

歩いてセントラルに着くまでは十分と少しの時間がかかる。しばらくとはいえ、誰かという時間を無言で過ごすのはきつい。

「それはね、アナトリアではポケモンについて学べないからよ」

「はあ？」

「力を持つものにはそれ相応の資格がなければならない。そういう標語みたいなものがあるんだけど、アナトリアではシンオウとかカントーとかのように、多くの人がポケモンを持ってないの」

アスルの言葉を聞いたおれは、もしもこのコトブキの殆どの人間がポケモンを所有していない架空の世界を想像してみた。だめだ、なんか気持ち悪い。

「アナトリアでは……ほら、ジムバッジをくれる施設があるでしょう？？」

「ポケモンジムか」

「そうそう、それぞれ。ジムもないし、基礎的なことを教えてくれるトレーナーズスクールもないの」

仮想の世界がいよいよもって異世界の様相を見せてきた。

「……と言うとね、みんな驚くわ。本当にそんな場所があるのって」
「それでアスルはわざわざシンオウまで来て、ポケモンの事情に踏みこみたかったわけか……」

そのために言葉や色んな事柄を学ぶ　凄く執念だと感心せざるを得ない。

「だって数少ない人だけがポケモンと触れ合えてるってずるいと思わない？ だから、アナトリアにも同じような、ポケモンに関連するシステムを作りたいなって思ったんだ」

「おっ、凄い夢だな……」

「そのためにはまず、私がポケモンと触れ合わなくちゃいけないのは分かっているわ。本音を言うと、ポケモンと楽しくやりたいから旅をしたいんだけどね。それで、少し前にワカバタウンから旅を始めたの」

手は貸せないが応援はする。そんなことを返していると、おれの頭にある疑問が浮かび上がった。アスルはもしかしたら、もしかすると……

「そついえばさ」

「なあに？」

「アスルの家つてお金持ちだったりする？」

「うーん、よく分からないけど、私の住んでたアンキュラって街のなかではそれなりに裕福だったみたい」

それなりどころじゃねえ。よくよく考えてみる、親元離れた子どもを一人遠くの地方に飛ばすつてのでも金はかかるし、親離れするにも仕送りだなんだで金がかかる。それにその服、高級絨毯の模様をトレースした感じじゃないか。ええ？

「でも、私はそつという家のことをあまり知らないんだ」

おれが適当に相槌を打つと、右手から何か争っているらしい物音が聞こえた。

何かがぶつかる音と、誰かの怒声。裏路地の先でトラブルが起きたようだ。

訝しがりながら様子を見ると、路地裏の切れ間の左から一匹のポケモンが飛び出て来た。いや、吹き飛ばされたつてのが正しい。

続いて一つの人影が吹き飛んだポケモンと同じルートを歩いて現れ、そして消えた。

暗くて服装も顔立ちもよく分からないが、あの野郎はポケモンに暴力を振るっているらしい。

「ちよつと待つてて」

「ん？」

「あの人に文句言つてやるわ。ポケモンはサンドバッグじゃないつてね」

アスルは狭い路地裏を抜けるべく、自分の服を両手でつまんで歩きだす。

「ここはおれに任せてくれ」

「え？」

「こついうのに女の子を巻き込むわけにはいかないからな」

アスルを裏路地の入口からどかして、いつものコトブキとは違う空気を感じ取りながら先を進んで行く。アスルが不満そうな顔を浮かべていたが、まあ仕方がない。

裏路地は十字路になっている。なるほど、これならポケモンも人影も現れて消えるわけだ。

それに、十字路を右に曲がれば人影が自分よりも小さなものに怒鳴りながら蹴りをかまし続けているのが分かる。

暗いからよく分からないが、この人影はどうやら男らしい。年齢はおれと同じくらいか。深紅色の布地に白いチャックが入っているシャツと、暗がりと同化した黒のスラックスという出で立ちのようだ。

黒い靴でポケモンを蹴るのに夢中でおれのことには気付いていないらしい。蹴られているのはピカチュウだ。

「てめえが！ あそこで！ 下手をうたなきや！ 勝てたんだよッ！」

どれだけ蹴りをかましたのか、ピカチュウは抵抗するそぶりさえ見せない。

この光景に見覚えがある。これは、こいつは、こいつらは、あの頃のおれ達とそっくりじゃねえか！

「やめるッ！」

少年のシルエットがびくりと震え、しかし俊敏な動きでもっておれに詰め寄ってくる。

「なに？」

「それをやめると言っている！」

「あんたにや関係ねえ、すっ込んでろ！」

瞬間、おれの目の前が真っ白になって、別の映像が見える。

エイパムの鼓膜を破る勢いで怒鳴る。ビツパを顔面がつぶれる勢いで殴る。ポニータを背骨を折る勢いで鉄パイプで打つ。ムツケルの羽根を掴んで思い切り地面に叩きつける。ブイゼルの頭を砕く勢いで踏む。ニューラの腕を折る勢いで蹴る。

そうだ。これは、これはおれがやったことだ。おれが激昂して、自分のポケモンにやった仕打ちだ。

「これ以上見苦しいものを見せるんじゃないッ！！！」

いつの間にかおれは少年の襟首を両手で絞め上げていた。

手は少年の喉の震えを感じ取り、急いで両手を解放する。

「ひっ……」

首を絞められてか少年は目に涙を浮かべ、そして乱暴にピカチュウを拾い上げて路地裏を去ってしまった。

いつの間におれの手は奴の襟首に伸びたんだろう。まさか本当に殺してやりたいと思ったのか？ あ頃のおれを殺したいと強く思うのと同じように？

アスルが待つ場所に帰ろう。あの野郎は全然大したことなかったぜ、襟首を持ち上げたら泣いてとんずらこきやがった。冗談めかしてそんな話をしてやろう。

そう思っていたのに、おれが見たアスルの表情は笑顔などの類ではなかった。実際はその逆の、怯えを見せている。

「な、なんだよ。おれが何かしたか？」

「だってノブオ、とても怖い顔をしてる」

言われて初めて気がついた。誰だって何かを殺したいと思えば、人を怯えさせるのに不足のない表情を浮かべられる。

「いいや、角度の問題だろ」

にっこ笑顔を浮かべてやる。

不自然なものになったのはおれが一番よく分かっている。でも、この場をとり繕うには何をしたらいいんだ？ 姑息だとしても、作り笑いの一つをやるのは常套手段だろ？

セントラルとそれの前に位置する広場が見えた。修復作業は既に終わったのか、広場のポケモンバトル大会による被害や損傷が消えてしまっている。

セントラルは三つの建物からなる大きなポケモンセンターだ。おれやアスルはポケモンセンターとして機能する中央棟に用がある。

西棟と東棟は大型のショッピングセンターとして機能しているが、全くと言っていいほどおれには関係がない。

おれ達の他に人はあまりいない。広場でポケモンバトルをする者も、危ない喧嘩をする者もない。

それもそうだ。外はじめじめして暑いつつのに、快適な屋内にこもらない方がおかしいよな。

「ついた！ ノブオのおかげよ、ありがとう！」

アスルは嬉しそうな声を上げ、握っていたおれの手を両手で包んできた。

「そりゃどうもな」

「そういえば、ここってポケモンバトルの大会をやった場所なのよね」

両手を離し、ゆっくりと辺りを見回しながらアスルは呟く。

「確か、今日はジムバッジを七つ持っている人の大会だったのよね？」

「そうそう。で、おれはその優勝者」

「努めてなんでもないことのように言ってみる。するとアスルの目と口が大きく開いた。」

「ええ、本当!？」

「本当だつて。トロフィーは別のところに送ったから無いんだけど……表彰状を用意してないんだよ、大会の運営側がさ」

「ノブオって凄いのね。だって、バッジを七つも持っていると言えはかなりできるトレーナーなのに、そのなかでのトップなんでしょ？」

まあなと答えようとして口を開けなかった。アスルの様子がおかしくなつたからだ。

身体の動きが一瞬止まり、それから何かを考え込むようなしぐさをして。その間、おれはアスルは悪いことが出来ないだろうなと予想をつけていた、大きく首を縦に振る。

「どうした、なにかあつたか？」

「ねえノブオ。あした、七時なつたらここに来てくれる？」

「別に構わないけど、何か用事があるのか？今は言えないとか？」

冗談交じりで尋ねてみると、アスルは真剣な表情を浮かべながらもう一度大きく首を縦に振った。

「ごめんね、変なこと言っちゃつて。……あした、また会いましょうね」

小さな声でアスルは残し、先にセントラルへと駆け出していく。

もしもアスルが外道がやりそうなことを考えていたとして、おれにはそれを責める理由などない。おれだって他人から見れば酷いと思う考えを腹に抱いているからだ。

しかし……アスルは何を言おうとしたのだろうか。アナトリアのトレーナー。頭には白い布、上下ともゆつたりとした大きな服を着た、露出を控える女の子。

あれからどれだけ時間が経っても、アスルはおれの頭の中から消えなかった。その他大勢の人間として処理できない。なんだか面倒なことになりそうだ。

プロローグ（後書き）

どうも、作者のゆうです。Seed 発芽の物語 をお読み頂き、ありがとうございます。

このお話はハートフル農業物語でもなんでもありません。こういう雰囲気に進むポケモントレーナーのお話です。それも、奇抜な展開などを控えた、落ち着いた読んで読めて、それでいて面白いなと思えるようなお話ですね。

プロローグはこれで終わり、次話からお話の本筋に乗っていきます。お楽しみください。

第一話 出立 ノブオとアスルの二人旅の始まり

最後に時計を見たのは、アナログ式の小さな壁掛け時計を見た時だ。

六時五十分。セントラル前広場に歩いてついた時間を顧みると、今は七時五分前といったところだろう。

昨夜、アナトリア出身のポケモントレーナーであるアスルという名の少女と待ち合わせをする事になってしまった。

確か彼女は「明日の七時」と言っていたが、まさか夜の七時なのだろうかと思いを働かせてしまふ。あつちから話をもちかけてきたんだ、おれより先にいて当然だろうに。

おれは肩に提げている小さな旅行用バッグを見つめる。この中には着替えやら野宿の準備やらといったものが詰められているので、外見以上に重いのだ。だからおれはこれをそつと降ろすことにする。近くに立っていれば盗まれる心配はない。

そこまで考えたおれの頭の中にあの言葉が蘇る。

ありがとう。でも、もっと人を信用した方がいいと思うわ

アスルはきつと、どこかに荷物を置いて放置しても誰かに盗まれるなんて想像もしないに違いない。

空はもう青色を見せている。雲の一片もない快晴。早くから容赦なく陽光が頭を焼いていくのが分かる。気温はどのくらいだろう、25度以上はマークしているはずだ。

だとするとアスルはもうあんな恰好で外に出るはずがない。一番の身体的特徴と言えば、あのゆったりしすぎた厚い服装だが、あれが唯一のアイデンティティだと彼女は考えてはいないだろう。他の服だって持ち歩いているはずだ。

おれだって割と薄い白のズボンや白のシャツを着ているんだぞ。

白色って、熱を溜めこまないらしいからな。そこでおれは頭をコツンと小突かれたような衝撃を覚える。

どうしておれはアスルを心配することばかりを考えているのだろう。好意があるとかそんなつもりはないし、大体にして人付き合いも多くは持たないように心がけている。

おれが目指しているのはポケモントレーナーとしての大成と、声を大にしては言いにくい目的であって、誰かを気にかける余裕は持ち合わせてはいないってのに……

「ごめんねー、私から待ち合わせようって言ったんだけどー！」
セントラル中央棟の正面入口の自動ドアから、昨日と同じような服装のアスルが小走りでこちらにやってくる。左手には淡い青のスーツケースをこころさせ、頭に軽く巻いた白い布をなびかせていた。

「いや、おれも少し前にやって来たばかりだ」

これは嘘ではない。おれがここに来たのは二分ほど前だから、別にとても長い間待たされたわけではない。

「私、寝坊しちゃって。それで急いで来たんだけど……ね、お願いがあるんだ」

「そのための打ち合わせだったよな。なんだ？」

アスルのかわいらしい顔に真剣さが宿る。大きな丸い目には確かな意思が、高い鼻や整った口には覚悟が見えた。そんな気がした。

「……ノブオと一緒に旅をしたいな」

再び頭に衝撃。今度はバットで頭を吹き飛ばされたような衝撃だ。
「あ？」

「だってノブオはバッジを七つ持っているんでしょ？ それってとても強いってことだから、一緒についていけばトレーナーとして強くなれるかなって」

ふざけて言っている様子ではなかった。アスルは大真面目に言っているのだ。

「無理だ。おれの旅の支障になるし、アスルの旅の支障にだってなるよ」

「私は全然邪魔にならないわよ。ああでも、ノブオの邪魔にはなる

のね？」

「……まあ、そういうことだ」

言われ慣れた経験のない言葉を向けられてか、おれはきちんと自分が発言したかどうかも怪しいくらいに気の抜けた返事をしてしまふ。

だめだ、アスルのことがどうしても気になって不安で仕方がない。

「そういうことなんだが……むむむ」

「ん？ どうしたの、どこか痛い？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

おれが支障だと感じた理由は、スムーズにナギサシティへの到達が出来ないからだ。

だが待て、焦って到達したからといってどうした。それがどういう結果をもたらす？ おれの夢は、達成するのに時間がかかる。目的地到達が数日遅れたくらいで何も変わりはない。

「……さっきのは取り消した。おれはナギサシティに行きたいから、そこを目指すルートを歩くが、それでいいなら」

おれが最後まで言わない内に、嬉しそうな大声を上げてアスルは右手を空高く突き上げていた。

感情表現が激しいのは良いことだが、周りの注目を浴びるまねをするのはやめてくれ。ほらみる、そこら辺歩いている通行人がくすくす笑ってやがるぞ。

「よし、それじゃ早くいきましょ。善は急げっていうじゃない」

「急がば回れとも言っけどな。ま、回り道をする必要はないからちよつと違うな。とりあえずコトブキの東に出る。その後でルートの確認だ」

障害は言い過ぎだが、おれの旅路にアスルがどうしても必要なわけではない。

昨日考えていたこと。おぼろげながらも見えてきた夢の近道。そのため、アスルには強くなってもらわないと駄目だ。

おれの存在が彼女をトレーナーとして強くするのだとしたら、旅

の同行なんてわざわざ許可するほどでもない。何でこんな簡単なことに気付かなかったんだ。

セントラルを出発したおれとアスルは、コトブキシティを東に抜けるべく太陽が昇る方角へと歩き続けていた。既に市街地は抜けて住宅が並び立つ郊外の方へと出てきている。

旅を始めたばかりの頃におれはこの辺りを歩いた覚えがある。あの時とは時間が違うからか、並び立つモダンな雰囲気の家からは人の気配がするのに違和感を感じていたが。

アスファルト舗装された道路とある程度の幅が確保された歩道の果てが、地平線のあたりに見えてくる。あそこからは人工的な道はない。これならあと少しで203番道路へと抜けられる。

これまで歩いている途中、おれはアスルに自分の持つ知識をレクチャーすることにした。教えたは実戦的なことではない。ポケモンがどのようにして技を行使するかということを簡単に喋りながら歩いていたのだが

「んーと、ポケモンは回路動力源を持っていて、動力源を使って回路を構築して技を使うんでしょ？ それってどういう意味なの？」
「さつきから言っているように、ポケモンが技を使う裏には、実はそういう凄い仕組みがあったってこと。多くのトレーナーはこれを知らないし、知ろうともしないぞ。誰がクソ難しそうな論文を読むんだよって話になるから」

そっかー、と納得するように言葉を伸ばすアスル。同じことを三度も言うのは疲れる。

「それで、トレーナーの多くは技がどのようにして作用しているかって知らないんだ。知っているからどうしたってわけじゃないが…

…」

「ならどうしてノブオはそんなのを覚えたの？」

「便利かなと思った。多くの人知らないものを知っているっていうのも気分が良い」

「そっかー。でも、覚えていて損はないわよね」

損はないどころか、とても有益な情報だと思っただがなあ。アナトリアでは、多くの人はポケモンを持ってないんだっただろう？ それでアスルはこっちにやって来たんじゃないか。この地方では当たり前、例えば子供がポケモンとともに旅をするだとか、そんなシステムを築きたいと言っていたじゃないか。喉まで迫ったその言葉を飲み込む。ここで言うべきことではない。

「ぜひ覚えてくれよ。いざって時の助けになるかもしれないから」「うん分かった。それで、これからどういう道に行くの？」

おれの頭の中では大体のビジョンは見えている。これをうまく説明するのは地図が必要だな。

右手を左肩に提げる旅行用バッグのジッパーに伸ばしてじいっと開いて、中をごそごそやって目当てのものを指でつまむ。

「タウンマップは知ってるか？」

「ポケセンで無料配布されているものだよね。それに、どこの家にも一つはあるっていうやつでしょ？」

「そうそう、それぞれ。今持っているのがそうなんだが」

ジッパーをつまんでバッグを閉じ、おれは広げたタウンマップをつまんでアスルの前に見せる。

「おれ達がいるのはコトブキシティだ。ここから東に出ると203番道路に出る」

「うん」

「これをまっすぐ行くとクログネシティに出る。今日は一日中歩いてそこまでたどり着くことにしよう」

アスルはちょっと驚いた様子を見せ、少し力の抜けた頷きを返す。きつと、一日中歩くという部分に反応したのだ。

そうだな、この暑い天気の中を一目見ただけで熱を感じそうな服装をした女の子が、休憩も無しに歩き続けるのは不可能だ。おれだつて出来ない。

「大丈夫だつて。アスルがどうしてもつて時には立ち止まって休むから」

「ありがとう。ノブオは優しいんだね」

「そんなのじゃないさ。連れが倒れたらおれが困るんだ」

そうとも言い切れないことにおれは気付く。優しいんだね　この短い言葉が、どうもおれの胸につつかえて取れない。

「　とにかく行こう。そうだ、絶対に無理はしないでくれ」

「分かったわ。……もうしばらくはコトブキには戻れないのね」

どこか物悲しそうな声色でアスルは言う。何か心配なことでもあるのかと尋ねると、アスルは一度頷いてから口を開いた。

「私と同じ駆け出しのトレーナーとセントラルで出会ったの。ペラッってポケモン、かわいかったなあ」

「へえ。そのトレーナーの名前は？」

「彼女は……メルなんとかだつて。名前は忘れちゃったけど、元気そうな女の子だった」

ふーんと相槌を打つ。アスルがそこで話を切ったから、おれも何も言わない。

暑い中で喋り続けるのはガールズトークをしている軽装の女の子だけで十分だ。横に見える住宅の数が減り、草木の緑が見え始める。203番道路に足を踏み入れたおれは、楽しそうに先を歩くアスルの背を見つめながら歩く。

こいつにはどうしても、トレーナーとして強くなって欲しい。口に出さずに復唱し、おれは前を向く。

疲れた。一人旅なら自分でペースを考えて行動できるが、二人旅となるとそうはいかないから余計に疲れる。足がくたくただ。というよりは身体が鉛になった気分だ。

女の子には体力の低い人が多いけど、アスルはこの暑い天候の下を例の暑苦しい恰好で歩くのだから、よく足を止めてしまっていた。絨毯模様の厚くゆったりとした服は、もともと少なかったである。アスルの体力を容赦なく奪っていく。

アスルの希望で一時間に一度の休憩をとっても、彼女の顔色は良くならなかった。おれも気を配ったつもりだったが、一時間に十分程度の休みでは旅に慣れてない人間が疲れをとるのは難しいようだった。昔のおれもそうだったから、文句を言うつもりはない。

おれが顔色の悪いアスルに大丈夫かと尋ねると、決まって大丈夫だままだいけると返ってきた。どう見たって大丈夫じゃないのに。

大体にして、アスルが異常に疲れてしまうのは、どう見たってその服装のせいなのだ。とはいえ、おれが脱げと言うのははばかられる。もしかしたら、アナトリアでの服装は切っても切り離せないものなのかもしれない。そうやって決めつけることで、おれはこのもやもやを投げ飛ばした。

疲れた体を白いシーツが敷かれたベッドの上に投げ出して身を任せる。クロガネシティにあるポケモンセンターの宿泊施設の一室で、おれは仰向けになって横になる。うつ伏せよりは仰向けの方が好きだ。

既に時刻は夜の八時を回っている。アスルは別の部屋でシャワーでも浴びているだろう。くたくたで疲れ切った様子だったが、そのくらいはしておけとおれが言っておいたから、たぶん済ませてはいらぬと思うのだけだ。

おれはもう浴びたけど、もう何もする気になれない。アスルの様子を見に行こうとか、食堂の方について何かを食べようとか、それよりかは寝たいのだ。

深呼吸をしながら静かに目を瞑る。バイバイ、疲労はとっとと消えてくれ。

そういえば、ここのジムは岩タイプで揃えているんだっか。たしか、ヒョウタとかいう眼鏡をかけた青年がジムリーダーをやっていたはず。

はずじゃなくて、実際にそうだ。

アスルの付き添いをしてあいつの顔を見るのは正直言って気まずい。あまり良い顔をしておれを見ることはないだろう。

にしても岩タイプか……アスルはまだバツジをもっていないから、そうそう嫌らしい攻撃を受けることはないはずだ。

そのかわり、総じて物理防御能力は高い。アスルがどんなポケモンを持っているか聞いておけばよかった……

眠りに落ちる前にそれを強く後悔したからか、おれが目覚めてから初めてアスルと顔を合わせた時の第一声は、お前は何の種のポケモンを持っているんだっけ、という問いだった。

これを口にしてからおれは後悔する。ここは食堂で、この時間では周りに人が多いからがやがやして、そのせいで話がしづらいのだ。

「え、もう一回言っつて?」

「アスルはどんなポケモンを持っているんだっつて言っつてるんだ!」

今度は大声で言っつてやる。これならきちんと聞こえるだろう。

「コダック」

「ん、聞こえねえ」

「コダック!」

アスルに怒っているつもりはなくても、今日着ている絨毯模様ア
ナトリアの民族衣装がおれを威嚇しているように見えた。

怯んだのを悟られないように平静を装い、おれは大きく頷いてお
く。

答えは聞いたから、話の続きは後でいい。薄味な豆のスープをス
プーンですすり、おれは目を瞑って頷いた。うん、割と美味い。

しかし、ポケモンセンターはどこでも清掃が行き届いている。床
はいつ見ても綺麗だし、壁や天井の壁紙は爽やかな白だ。

ここが食堂で、ここだけでも清潔感を保ちたいというだけかもし
れないけど、それでも徹底した清掃には目を見張るものがある。綺
麗なのはいいことだ。

食事を終えたおれは一度部屋に戻り、荷物のチエックを済ませて
ポケモンセンターのエントランスホールに出る。食堂から宿泊施設
に戻る時、アスルとはエントランスホールで待ち合わせることにし
ていた。

旅に慣れていないとしても、荷物の整理くらい自分でうまくやれ
るだろうからそれほど時間はかからないはずだ。おれは右手に軽く
握る部屋のキーを返却するために、受付の前の短い列に並ぶ。

おれから見れば、この街には誰かを惹きつける場所はあまり存在
しない。あるとすればクログガネ炭鉱と炭鉱博物館くらいなものだが、
トレーナーとして一番の重要施設はクログガネのポケモンジムだ。お
れの前に並ぶ五人の子供達の行き先はどこなのだろうか。

ふと、おれの名を呼ぶ声が後ろから聞こえる。同名の人間を呼ん
でいるケースを考えてゆっくり振り返ると、きれいに磨かれた床の
上に立っているアスルが、おれを見て手を振っているのに気付いた。
「ここで部屋の鍵を返すの？」

こっちに近寄りながら尋ねるアスルに、おれはそうだとはつきり
した声で話す。食堂に比べると人気は少ないので、自分でも驚くほ
どに声が響き渡った。

「そうだ、さつき私の手持ちのポケモンがどうしたこうしたってお話をしたよね。なんで？」

「今日はここにあるクロガネジムに挑戦するだろ。相手が岩タイプでもてなしてくれるから、アスルはどんなポケモンを用意しているか聞いておきたかった」

「岩タイプって水タイプの攻撃に弱いんでしょ？ 私のポケモンはコダック一匹しかいないけど、勝てるかな？」

アスルは服の内側に取り付けているモンスターボールを手に取る。なるほど、このアナトリアの民族衣装は特別仕様か。モンスターボールを小さくしたあとは服の内側に吸着させるらしい。

「有利ではあるが厳しいかもしれない。そのコダックに実戦経験を積ませたか？」

「ううん、あまり無いわ」

「だとすると厳しいかもしれない。ん、先に鍵を返そう」

先に並んでいた子供達がいなくなったのを見て、おれは受付にいる若い女性スタッフに部屋のカギを返す。

薄い化粧をしているらしく、そのひかえめな印象は割とよかった。薄い化粧と、すっぴんでも美人と呼ばれていそうな穏やかな顔立ちとの相性はいい。

「で、厳しいかもしれないってことは、勝てないかもってこと？」

アスルの大きな目が、ポケセンの出口に向かうおれの顔を覗き込んでくる。やめろ、驚くじゃねえか。

「そうだな。勝てない」

「ちよつ、そうやって断言しないでよお！」

アスルはこちらを見ながらも、視界に入っていない自動ドアを抜ける。何でこんなことにセンスがあるんだろう。

「仕方がないだろ、アスルのコダックはろくに戦ったこともないんだろ？」

「……みずでつぼうの狙撃ならたくさん練習したわよ。ねえ？」

アスルの目線が自分の体に向く。水タイプの特殊攻撃技「みずで

つぼづ」による狙撃。シャープシュート。

「そこまで言うならちよつと試してみないか」

「えっ？」

「ジムバツジ無しで初挑戦ってなら、脅威になるのはズガイドスくらいのもんだ。しつかり距離をとってみずてつぼづを命中させればどうということはない。だけど、練習と実戦は違う。言いたいことが分かるか」

「んー、うん。なんとなく」

「なんとなくじゃ駄目だ。ちよいついてきてくれ」

五分も経たずにおれ達はこの街の北に接続する207番道路の始まりの近くにやってきた。

近くに見える大きな建物といえばクロガネ炭鉱博物館なのだが、アスルがあれを興味津々といった様子で眺めていたのには驚いた。あまり女の子受けするものじゃないと思ったんだが、何か惹かれるところがあったのだろう。

男の子受けするとはいえ、おれのように興味を持たない奴だっている。炭鉱だなんだよりも遊園地を建てちまった方が人が来るんじゃないか、いや、炭鉱が終わりでもない限りそれはないか。

「ねえノブオ、ここでなにをやるの？」

そよ風に頭に巻いた白の薄い布をなびかせるアスル。おれは彼女を見つめながらモンスターボールを吸いつけるベルトに手を伸ばし、そこから一つのボールを手取る。

赤と白のツートンカラーのボールは、小さなスイッチを押すとそのサイズを大きくする。おれはアスルに示すように、右手に軽く握るボールを小さく揺らした。

「この中にはおれのギャロップがいる。一発でもいい、こいつにみずでつぼづを当ててみる」

ギャロップをボールから出すと、アスルが目を開いてこちらを見ている。はあ、強そうだなあなんて思っているのだろうか。

「……一発？　一発と言わず二発三発と当てに行くわよ、コダック！」
服の中に手を突っ込んだアスルは、勢いよくそこから手を引き抜いてモンスターボールを取り出して地面にバウンドさせるように放り投げる。

跳ね上がったボールからは光があふれ、それにまぎれて黄色の体のポケモン　強そうには見えないポケモン番付のランカーであるコダック種だ　が現れる。コダック種は両手を頭に当てていることが多く、その仕草はアスルのコダックも例外ではなかった。

まぬげがやるような戦う意思のない姿勢だが、コダック種の強みはあの外見から攻撃を仕掛けてくることだ。おれはギャロップに、敵が放つ攻撃を全て避けると指示を出す。

短く頷き返した後、ギャロップの炎上する身体が歪んで見えてくる。

これは陽炎の効果でもなんでもなく、かげぶんしんという名の回避率上昇を図る変化技の一種なのだが、アスルはあつけにとられた様子で目と口をゆっくりと開いて注視している。

コダックだけではなく、アスル自身の実戦経験も浅いらしい。

「な、なにあれおかしいな、夢でも見てるのかな……きやつ！」

「夢じゃない。さ、コダックにみずでつぼうの指示を出せ」

おれは地面に落ちていている小石をアスルの身体に軽く投げつけてやる。そうしてやって初めて彼女はギャロップの変化を捉えたらしい。想像以上に拙い。これでジム戦をやるといったのだからぞつとずる。

「なによ、そんなぐにゃぐにゃした幻を見せたって意味ないんだから！　コダック！　みずでつぼうを……右から二番目の敵に放つて！」

でたらめな指示だ。しかし、コダックだって混乱しているわけだから指示に従わざるを得ない。悪循環だ。

コダックの平たいくちばしが僅かに開き、その隙間から水の塊が

小気味良い音と共に飛び出すのが見えた。

高速で飛翔する水の弾丸は静止するギャロップを捉え、しかし額を撃たれたギャロップは悲鳴の一つも上げない。ぐにやりと撃たれたギャロップの像が歪み、霧散する。

「えっうそ、幻!? でも、当てればぶわって広がって消えるみたいね!」

しかしアスルのコダツクのみずでっぼうは特筆に値するかもしれない。

コダツク的能力は十分に開発されていないが、これである弾速は凄い。

レベルの低いコダツクのみずでっぼうなんて発射を見てから回避が余裕だと甘く見ていたが、アスルの宣伝通り、この攻撃には目を見張るものがある。

「よしコダツク、みずでっぼうを連射よ!」

だが、動かない的と動的を狙うのは別の話だ。

「走れ。かげぶんしんをかけ続けるのを忘れるな」

ギャロップは指示の半分で駆け出す。その脚力の強さは決られ、高く放られた土の塊が物語っている。

俊足を活かして幅の広い道路を駆け巡るギャロップ。その周囲には塵気楼のように多くのギャロップの幻影がまわりついていて、正直言っておれもどれが本物のギャロップか分からないでいる。

そんな状況でも、アスルとコダツクは何を迷うでもなく高弾速のみずでっぼうを放ち続ける方針を立てたようだ。が、その射線にはギャロップの幻影すら捉えていない。何度撃つても結果は同じだった。

「うーっ! コダツク、ちゃんと狙ってよお!」

駄目だアスル、トレーナーが冷静さを欠いてはバトルに勝つのは困難を極める。

自分のポケモンが技を放てる限度を把握し、現在のポケモンの状況も把握できるようになればいいのだが、それは難しいにしても冷

静さを失うのはまずい。

「…………え、コダック、どうしたの？ どうして撃てないの、まだ限界じゃあ…………」

コダックもアスルも困った様子を浮かべている。おれはギャロップに停止を命じ、素早くボールから赤いトラクタービームを放出、収納をする。

「アスルがコダックを困らせたからだ。通常、みずでっぼうは平均して連続25回は放てる技なんだが…………アスルのコダックは連続して何回放てる？」

「…………あの時の特訓では、15回くらいだったかな」

平均を大きく下回るこの数字は、恐らくはこのコダックが得意とする高弾速のみずでっぼうが影響を及ぼしているのだろう。それは良いとして、このバトルではコダックは十発もみずでっぼうを放っていない。これの原因ははつきり分かっている。

「このバトルでコダックは何回みずでっぼうを撃った？」

「えっと、あれ、分からない…………」

「冷静さを欠いてしまうと状況の把握が出来なくなる。これは敗北に直結するぞ。あとは大事なことを一つ教えておく」

しゃがみこんでコダックの頭に軽く手を乗せるアスルが不安そうな表情を浮かべながらこちらを見上げる。

「ポケモンは責めない方がいい。いや、アスルに責があるうがなからうが、負けたときは少し責めてもいい。けどな、バトルの最中にポケモンの心を乱す言動は控えておけ」

その結果がこれである。アスルは小さくごめんねと呟き、コダックをモンスターボールに仕舞う。

「あとは予測射撃を覚えさせた方がいい。これについてはおれが特訓につき合うよ」

「予測射撃？」

「ああ。きつとコダックは静物をみずでっぼうで撃つ要領でギャロップに攻撃を仕掛けたんだと思う。予測するのは、次に相手がこの

地点に来るだろうからそこに攻撃を放つてことさ」

なにそれ難しそう　アスルは落ち込んだ調子で返す。

別にアスルがやるのではないのだから、思いつめた表情をするこ
とはないじゃないか。おれがそう呼びかけると、アスルは首を横に
振った。

「強くなるのってそんなに難しいんだって、やっと分かったかも」

「ん？」

「コダツクは私の最初のポケモンだから、ちょっと辛いんだ。仲間
を増やしたって辛いものは辛いけど、ポケモンを強くするのって予
想以上にきついんだね」

きつい？　きついってどういう

「だってノブオはポケモンに敵しくあたって強くしてきたんでしょ
？　私に出来るかな、そういうの」

ああ、なるほど。そういうことが。

「昨日の路地裏の野郎ほど強くやらなくていいよ。あそこまで行っ
たら頭がおかしいからな」

アスルは大きく頷き、おれは笑っていた。たぶんこれは、自嘲だ。

第三話 クロガネジム アナトリアのトレーナー、ジムリーダー戦に臨む

それから、この日の午前中の時間は、全てアスルと彼女のコダツクの特訓につき込まれていた。

アスルのコダツクの特筆すべき点は、平均して放てる回数より少ない回数しか放てないみずでっぼうだった。高弾速で放てるのはそれだけで脅威だ。

ただ、コダツクはこれを放つのに無理をしているらしい。そうでなければ、最大15発しか放てないみずでっぼうを説明できない。

それにコダツクは敵の動きを見て攻撃を当てる予測射撃が出来ていない。みずでっぼうは秒間何発も撃てる技ではないので、一発一発を当てに行かなくてはいけない。

もちろん初弾は牽制と割り切って撃つのも悪くはないし、三発程度を誘導に使って確実に決めるのも悪くはない。

しかし、それをやろうとするならば、簡単な予測射撃くらいは出来なければ実現は不可能だ。

そのための特訓だし、方法は単純明快である。

おれの手持ちのビーダルに207番道路の脇で拾った長い木の棒を持たせて、道路の端から端を走らせる。アスルのコダツクは全速力で走るビーダルのもつ木の棒か、ビーダルの体にみずでっぼうを命中させる。

この特訓をやり始めた頃は、コダツクの放つみずでっぼうはビーダルの周囲の地面に着弾、ただただ地面を濡らして少量の土くれを巻き上げるにすぎなかった。

15発を撃つたらコダツクの回復を待ち、それから特訓を再開する。単調なサイクルの特訓だが、それ故に効果は高いと思えた。実際、必要最低限の休息を取りながら特訓を続けたコダツクは目に見える成長を遂げた。

あまり命中はしていないが、全く当てられなかった今朝の頃よりは遙かにマシになっている。

「凄いよコダック、よく頑張ったわね！」

何度目かと数えるのも嫌になるくらいの休憩をした時、アスルは首をかしげて地面に落ち付いているコダックに笑顔を浮かべて呼びかけていた。

既に太陽は西に傾き、空が赤く染まりつつある。おれは慣れているから別にどうとも思わなかったが、アスルは昼飯を食わずにこの特訓につき合っていた。

おれと同じく、おれのポケモンも一日何も飲まず食わずで動ける程度の忍耐力を持ち合わせているが、コダックも同じくらい忍耐強いらしい。首をかしげて腕を頭に。ぼうっとしているようで、こいつはかなり出来るコダックのようだ。

「よし、次は木の棒を狙ってみようか！」

「いいや、今日はここまでにしよう。これ以上の特訓はあまり意味がない」

どうして？ としやがみこんでコダックの頭を撫でていたアスルは首をかしげる。なんだよ、そんなものまねはやらなくていいって。「同じのを相手にしても、今度はそいつに対しての専門性だけが上がっていったって、対応力が無くなっていくんだ」

「へえ……そうなんだ」

「何かに特化したポケモンを育成することも出来るけど、専門性を上げるってのは特化型とは違うからな。変な癖がついたら困るしなまあ、これだけ出来るようになったから良いんじゃないか？」

おれは木の棒を道路の脇の林に戻しに行ったビーダルの背中を見る。かなり走り回ったからか、少し曲がった背中から疲労が透けて見える気がした。あとできちんと休憩をとらせなくては。

棒を林の茂みに戻したビーダルをボールに戻す。赤い捕獲光がきちんと収納したのを見て、それからおれはアスルの方に向き直る。既に彼女はコダックをボールに戻して服の内側にボールをくっつけ

たらしい。

「……そうだ、私はトレーナーとしてどうだったかな」

ポケセンの方へと向かいつつ、アスルは自分にもおれにも問いかけるようにして囁いた。

「まあまあ良かったと思う。みずでっぼうの発射タイミングをはかってやるのも、きちんとしたトレーナーの仕事だ」

アスルだったただただ黙ってコダツクの姿を見ていたわけではない。特訓2セットの内に一度はアスルの指示でコダツクはみずでっぼうを撃っていた。

トレーナーの仕事はただただポケモンに指示を下せばいいわけでもないし、特訓のメニューを考案するだけでもない。ある種のオペレータとしての役割も、立派なトレーナーの仕事だ。

戦闘状態に入ったポケモンは、敵との戦闘に全神経を集中させる。これがベストなやり方だし、同時にとある状況下では窮地を招いてしまう。

ポケモンをタイマンで戦わせるシングルバトルなら度外視している要素だが、これから先は二対二のダブルバトルに臨むことがあるかもしれない。そうになると、トレーナーには広い視野が要求されるのだ。

「ノブオに言ってもらえて嬉しいわ。うん、明日はきっと勝ってみせる」

「一度で勝とうと思わない方が良くと思うけどな。挫折するのはトレーナーとポケモンが経験して、初めて糧になるものだし」

「だけど、これは駄目だなんて思ったのはノブオのお陰よ。私もコダツクも、精密射撃の自信があったもの。それだけじゃ駄目だって分かって、でもどうにかなりそうになって、ほっとしてる」

見ていて気持ちの良い笑顔を浮かべるアスル。つられておれの口角がぐいっと上がるのを感じた。

「明日はおれも応援するよ。だからアスルは、自分とコダツクを信じてジム戦に臨めばいい」

「ありがとう。それじゃ、よろしくね」

アスルは立ち止まり、右手をおれに向けて差し出す。右腕はベージュ色の、色とりどりの絨毯模様の民族衣装に包まれている。

アナトリアのトレーナー、か。

頷き、おれはアスルの手をとって軽く握る。頭に巻いた白い布がそよ風に小さくなびいている。アスルはいつまでも嬉しそうに笑っていた。

その笑いが消えたのは、つぎの日の朝だった。

肩に旅行用バッグを担いで外に出たおれは、右隣で表情を岩のように固くしているアスルと共にクロガネポケモンジムの前に立っている。とても大きな建物で、岩をイメージしてか様々な鉱物が見せる鈍い色で壁が塗られていた。

ポケモンジムは、トレーナーがジムリーダーに挑み、勝利もしくは認められることによってバッジを手に入れる施設だ。アスルはこういう認知をしていたが、それでは不十分だ。

ここはトレーナーがよりよく自分のポケモンを鍛えることが出来る施設も兼ね備えている。そのためのポケモンジムとも呼べる。

「……なあ」

「うん!？」

極度の緊張をほぐしてやろうかと思っただが、どうもうまくいかなかったらしい。いつも通りの暑苦しい民族衣装に頭の白い布。それでも緊張はやってくるのか。

「もうすこし落ちつけて、緊張したって意味がない」

「でも、ここのジムリーダーって強いんでしょ? 勝てなかつたらどうしよう」

「大丈夫だ。きのう、アスルとコダックは特訓を頑張っただろ。それに、勝てなくても認めてもらえればバッジを貰えるケースもある」

カクカクのアニメのようにアスルはぎこちない動きで首を縦に振る。

まあアレか、実戦経験もろくになしでジムリーダーと戦うつてのがまずあり得ないことだ。仕方がないとさえいえば仕方がない。

ポケセンが運営する小規模なポケモン大会は存在する。きのう、アスルはバッジ一枚を所有するトレーナーと戦い、敗れたのは記憶に新しい。

相手のトレーナーは電気技を使えるコリンクを登録、戦闘に出していた。相手が悪いと割りきれそうなものだが、アスルにとってアスは相当シヨックだったに違いない。だからこうして不安に震えているのかもしれない。

「……いつまでもがちがちに固まったって仕方がないだろ」
「でも、コダツクが傷ついちゃう……」

昨日の戦闘は、コダツクが身につけた予測射撃がコリンクの額にぶち当たったものの、それで倒しきれたわけではなく、コリンクのかみなりのキバがコダツクの頭に突き立ったのだ。

コダツクは身体を大きく痙攣させて仰向けに倒れ、戦闘不能になってしまった。この事もアスルにとっては相当なシヨックだったに違いない。彼女にとってポケモンはとても大事な存在なのだろうか。

頭では分かっている。だけど、このままではアスルのためにはならない。

「思いだせよ、アスルはどうしてここにいる？」

「えっ？」

「おれに聞かせてくれたよな、アスルの夢を。アナトリアにシンオウやカントーにあるポケモンの制度を作りたいんだろ？ 酷なようだけどさ、トレーナーとしてアスルが踏むのはこの一歩なんだよ。バッジがなきゃそんな夢に終わる。ただの夢に……」

おれだってすっかりした事を言っているとは思ってはいない。ただ、生易しい言葉ではアスルのかちこちに固まった頭や身体をほぐ

せはしないだろうと考えただけだ。

ただ、アスルがどれだけレベルの高い志を抱いていたとして、やはり彼女は人間なのだ。おれのきつい物言いで志が折れるかもしれない。でも、誰かが言ってやらねば。

「……うん。コダツク、行くよ」

短く、いつもより低い声でアスルは囁く。どうやら意思を挫いてはいないらしいし、勝ちに行こうという姿勢を見せている。おれは頷き、先を歩くアスルの後ろについていった。

クロガネジムの外見は、まさに鉱石をイメージして作られたという表現がしっくりくるものだが、内部構造はまともなものだった。

Tの字を逆さまにした形のエントランスホール。その中央にぼつりと円形の受付ブースがあり、左右に広がる道はトレーナーがポケモンを鍛えるための施設へと繋がっている。

右は低レベル帯、左は高レベル帯と分けられているのが、壁に貼り付けられた簡素なパネルや床の模様を使った案内表示を見れば分かった。

受付のスタッフは、三十路を過ぎたかと思われる男性だった。クールビズというやつなのか、おれが着ているような白いシャツに灰色のスラックスという出で立ちだ。

おれはアスルに受付ブースに行くように促すと、アスルは頷いてゆっくりと前に歩いていく。

受付のスタッフは、きつとアスルの緊張した面持ちを見たのだろう。気さくな人がやるようにフレンドリーに笑い、口を開いた。

「いらつしゃい、そんな緊張しているってことは、ヒョウタさんと戦いたいのかな？」

「……そう。うん、そうです」

「それじゃあトレーナーカードを見せて。フラッタの使用準備もあるから」

アスルは右手に取っ手を持つスーツケースの中から黒いカードを

ースを取り出す。

ケースから取り出さずにトレーナーカードを見れるように出来ているらしく、スタッフは数秒眺めてアスルに返却した。

「ノンバッジってことは、ここが君の初挑戦ってわけだ」

「はい」

「そうそう緊張しなさんな。君のパートナーにも伝播するよ」

やはりフレンドリーにスタッフは言い、オフィスでよく見る内線電話を操作してから受話器をとる。

「挑戦者一名です。ノンバッジなので、フラッタ最大レベルでお願いします……ええ、よろしくお願いしますよ」

短い事務連絡だった。電話の相手はヒョウタなのだろうか。

「……それじゃ、後ろの扉を開けて行つといで。ところで、君は付き添いかい？」

「おれ？ ……まあ、そういうもんだけど。そういうのは駄目だった決まりがあつたか？」

「いいや。そうか、遠い地方出身の恋人ねえ」

なにを勘違いしているんだ、にやついてんじゃねえよ。

しかしよかつた、アスルが足早にまっすぐ行つた先のドアを開けて消えてくれていて。

「あれはおれの好みじゃない。たまたまあれがノンバッジで、おれが七つバッジを持っていた。だからあれがおれについてきている。それだけだ」

第四話 激戦 アスルとコダツクの全力全開

クロガネジムで一番土地の面積をとっているのは、間違いなくこのバトルフィールドだと断言できる。

ここはジムリーダーが正式に挑戦者と戦うための場所だ。故に、床が土の普通のフィールドや屋外特有の変化に富む地形などとは趣の異なる、かなり特殊な場所となっている。

そのことについては、おれは自分の経験談として既にアスルには教えていた。

ここのジムリーダー戦専用フィールドは、ガタガタした土の床と子供一人なら余裕で隠れる程度の大きさの岩が所々に散りばめられている。

照明は、いかに巨大なポケモンであれ手を伸ばしても届かないほどに高い位置にある天井に、等間隔に三つほど強力な電球が備えられている。

この場所にはコトブキでよく見る、それなりの高さのビルがすっぽり入りそうな気もする。

ここまで馬鹿の一つ覚えのように天井を高くしたのは、挑戦者側に自由を与えるためだと解釈を改めることにした。

ベージュ色に絨毯模様の大きな服を着て、白く薄い布をその上にふわりと預けるアスルは、いつでもコダツクを外に出せるように右手にモンスターボールを握る。

彼女が立っているのはバトルフィールドとトレーナーの立ち位置を仕切る白い柵の内側であり、そこから子供が徒競走をする程度の距離の先に同じ白い柵がある。その向こうにいるのは、作業服に赤いヘルメットという出で立ちの青年だ。

この青年こそが、ここのジムリーダーであるヒョウタだ。彼もまた右手にボールを握っている。なかなか整った輪郭に優しそうな

印象を与える口角の上がつた唇に目が行くが、四角フレームの眼鏡の奥にある瞳に、容赦しようという思惑を伺えない。

気まずい。ジムリーダーの中でも特にこいつと同じ場所にいるのは気まずい。

この試合、早く終わらねえかな。

いや、手抜きをしてわざとやられてバッジを渡す？ そんなことはあり得ない。

この世のどこに手抜きをして挑戦者を迎え撃とうとするジムリーダーがいるというのか。

もつと言えば、挑戦者の持つジムバッジの枚数に応じて自分のポケモンを「弱体化」させて戦わなくてはならない義務もある。手抜きをしようとして出来るものではない。

フラッタは、近年になってそのブラックボックスが幾分か解明された、ポケモンを弱体化させる装置を指す。

もつとも、おれのようなポケモントレーナーが知り得る情報はそれだけだ。フラッタがジムのどこにあるのかとか、どの程度のサイズなのか、起動させるのにどれだけの電力が要するのか、などの情報の公開はされていない。

このこともアスルに教えていた。ポケモントレーナーが一匹のポケモンを自分の方針に合わせて育てることにどれだけ労力を費やすかは、昨日の一件である程度は把握できていたのだろう。フラッタの存在意義についてはすぐに分かったらしい。

ジムリーダーは様々なレベルの挑戦者を迎え撃つ義務がある。

しかし、彼らのレベルをバッジ所有数で分けるとして、それをしてジムリーダーが個別にポケモンを用意するなど不可能に近い。

ポケモンの実力のキープ、自らの戦闘方針の教え込みなど、管理すべき項目が多すぎるのだ。

そこでフラッタの登場である。これがポケモンを「弱体化」させることで、ジムリーダーが用意するポケモンの数は多くて十三匹程

度にはなる。

これのお陰でどれだけ手間をかけずに済むか、ということのアスルは真っ先に口にした。

アスルとヒョウタの戦いを、おれはアスルから見て右側にある観覧ブースにて眺めている。何かの競技場のように、階段と談の上に設置される簡単な白く長いベンチがそこには用意されている。

おれはアスルに近い側に座り、そしてもう一人がこのブースの真ん中のあたりで立っていた。黒と白の縦縞の制服を着た初老の審判だ。白黒はつきりさせますぜってか、面白いな。

「はいはい、じゃあそろそろ始めますよ。挑戦者はアスルちゃんね。一匹しかポケモンがいねんだそうなの」

あ？ この審判、今なんて言った？ フランクすぎやしねえか？
「つーわけで挑戦を受けるヒョウタさんや、あんたの出せるポケモンは一匹とさせて頂きますよ」

「分かってますって。規定で定められている事柄は大体把握していますから」

軽い調子でヒョウタが審判に返す。どうやらこの二人の関係は良いらしい。真面目そうな青年とフランクなおっさん。変な組み合わせだな。

「……よ、よろしく願いますっ！」

「こちらこそよろしく。どうやら、準備は出来ているみたいだね？」
ヒョウタの優しい声色の問いかけに、アスルは右手に持っていたモンスターボールを胸の高さに掲げる。すっとボールに添えた左手には力がこもっていた。

「……」

「さあ、君たちがどれだけできているか見せてもらおうよ……ズガイドスッ！」

激昂したような、そんな激しい調子でヒョウタはボールを放り投げる。

一瞬、アスルの体がびくりと跳ね上がるのを見逃さなかった。ヒョウタの一声に驚いてか、それともズガイドス種の一見恐ろしい外見に気圧されたのかは分からない。

ズガイドス種の特徴は、濃い灰色の体色と前頭部、及び後背部から臀部にかけての青色の体色をもち、その境目がギザギザであることと言えるだろうが、特筆すべきは大型に発達した頭部である。

棘が生え、見るからにして硬質そうな頭部から繰り出される攻撃は、たとえフラッタで弱体化されていようと油断出来るものではない。

「っ……コダツク、いくよっ！」

自らを奮い立たせるようにアスルは大声を張り上げ、モンスターボールを力一杯にフィールドに投げ込む。

放り投げられたボールから白い閃光が溢れ、そこからコダツクが飛び出す。相変わらず頭に手をおいたやる気のない構えだが、そこ以外の体の部位に目をやれば臨戦態勢だと言わんばかりに力が入っているのがよく分かる。

「はいはい、試合始めるからねえ」

審判の何気ない、しかし大きなその言葉をきっかけにズガイドスはコダツクに向けて全速力で駆けだしていく。

一メートルにも満たない小さな体躯からは想像もつかないような、しかしその凶暴そうな様相を見せるズガイドスの大きな足音が心臓に手を触れられているような気分させる。アスル、早いとこそいつをぶっ飛ばしてくれよ。

「みずでっばう、用意！」

ズガイドスは一直線にコダツクに向けて突っ込んで行く。二匹の距離は二十数メートルといったところだが、すぐに詰められるだろう。

しかしそれは、コダツクの高弾速のみずでっばうをぶちかますチャンスでもある。相対速度を顧みれば一直線に突っ走る、しかもフラッタによって身体能力を削ぎ落されたズガイドスに回避できるわ

けない。

「発射！」

アスルの簡単な指示と同時にコダツクがみずでつぼうを放つ。握りこぶし程度の大きさの水塊の弾体は今までに見たことがないくらいの弾速で飛翔し、その反動でコダツクの足の後ろに土の小さな山が出来あがった。

額にみずでつぼうを食らったズガイドスは悲鳴を上げ

「今だっ！」

ヒヨウタの鋭い調子の指示を合図に、ズガイドスの瞳が灰色になり、ついでに鬼のような形相を見せる。

にらみつけるという補助技 変化技とも呼ばれる だ。これは対象の物理防御能力を削ぎ落す効果を持つ。

原理として、技の持つ不思議な力がポケモンの持つ回路動力源に作用するとオーキド博士が述べたのを本で読んだ。要はフラッタと同じことが起きているのだ。

ヒヨウタは確実に仕留めるためにわざと攻撃を喰らわせたに違いない。開幕の遠距離からこの技を指示するのは無意味だ。さらに、能力を削ぎ落されたズガイドスが一撃でコダツクを倒せるとも考えていなかったのだろう。

コダツクの横に広い目が縦にも広がる。表情がこわばっている。目には見えないが、にらみつけるの効果は表れているはずだ。

「続けてずつき！」

「第二射、発射！」

先よりも張り上げる調子でヒヨウタとアスルが指示を出す。

しかし、コダツクのレスポンスが少し遅れたらしく、距離を詰められたコダツクはズガイドスのずつきを食らってしまう。

すくいあげるようなずつきだった。コダツクの体は勢いよく上に飛ばされ、背中で土を削って着地をする。くそっ、一撃で終わりか？

「おー、こりゃあヒヨウタさんの勝ちかなあ」
審判のおっさんが呟く。たしかに、あのコダツクがあんなものを

食らってしまったえば、戦闘の継続はほぼ不可能に近い

「コダック、地面に向けてみずでっぼうをなぎ払って隠れて！」

はずだった。コダックは素早く起き上がり、指示の通りにみずでっぼうを撃つ。

すると、土くれと水しぶきが一瞬の間だけ幕を張っていく。位置関係上、おれからヒョウタ側の方に位置をとっている人間とズガイドスは、この幕のせいでコダックの姿が見えなくなった。

幕が消え失せると同時にコダックも消え失せる。いや、アスルの側に設置されている二つの岩に隠れているのか？ 二つの岩とアスルを線で結べば、綺麗な三角形が出来上がる位置関係の出来上がりだ。

ヒョウタは敵の姿を見つけられず、アスルはどこにコダックが隠れたかを把握していた。状況は停滞を迎える。

「良い指示を出すトレーナーだ。それに、君のコダックもなかなかのものだね、いい根性を据えている」

「はあっ、はあっ……」

アスルの額には、いいや顔全体に嫌な汗が浮かんでいる。タイプ相性の上では有利をとっているのに、現状不利に近い状況が彼女を焦らせているのかもしれない。

コダックがうまく姿を消したことで状況は停滞する。この戦いがどう転がるかは誰も予測がつかないだろう。

ヒョウタは能力を削ぎ落されたズガイドスに下手な指示を出すことはできないし、アスルもまた好機を掴まなければズガイドスとヒョウタを下すことが出来ない。

これはトレーナーの腕の見せ所だ。ヒョウタが何かしらの方法で二つの岩の内どちらの影にコダックが潜んでいるかを見抜くか、それともアスルが何かしらの行動を起こすか。

たっぷりと五秒は流れた。が、二人はお互いのポケモンに指示を

出そうとしない。

沈黙の中に読み合いが続いている。おれだってアスルの立場に立たされたら、最良の判断を下す自信はない。

「……」

アスルの目線が、彼女から見て左の岩に向く。そのまなざしは不安に満ちている。

すぐにおれは悟った。

これはアスルのハツタリだ。

見間違いの場所にコダツクがいると思わせて、ヒョウタにズガイドスに攻撃指示を下させる。

そうして距離をとったところでみずでっぼうによる攻撃を仕掛ける。考えとしては悪くないどころか、とてもいいものだと思う。

しかし、おれはアスルが悪事を、ひいては人をだませないことを勘づいていた。短い間だが、これまで過ごしてきた中でアスルが善良な人間であるのは分かっていたし、故に狡猾な面を持ち合わせていないことも分かっている。

アスルの目が泳いでいる。眼鏡をかけたヒョウタの視力がどのくらいのものかは分からないが、ジムリーダーともあるう人物がアスルの全身からにじみ出る不審な雰囲気を見抜けないわけがない。

「どうやら、君はポケモンのことが本当に好きなようだね」

「……」

「でも、私情はこういうのに持ちこまない方がいいよ」

なに、まさか

「ズガイドス、右の岩に思いつきりずつきだ！」

おいおい、嘘だろ!?

思った通り、ヒョウタがズガイドスに攻撃を指示した岩にはコダツクは隠れていなかった。

ズガイドスのずつきで岩が砕け散った瞬間、

「今よ、第三射発射っ!!!」

アスルの指示でコダツクがもう一つの岩から飛び出し、ズガイド

スに向けてみずでつぼうを放つ。

背中を向けていたズガイドスに回避や防御をとれるはずもなく、水塊を背中でもろに受けてしまう。

着弾の水しぶきの音とともに痛々しい悲鳴を上げて、ズガイドスはふらりと地面に倒れこんでしまった。

「なっ……」

「んーっ！ やった！ やったよコダック、私達、ちゃんとやれた！」

喜びながら飛びまわるアスル。コダックも同じように（頭を手にのせてはいるが）小さく跳躍を続ける。

「ほっほお……この勝負、挑戦者のアスルちゃんの勝ちですわ。ヒョウタさんや、バッジを渡してやんなさい」

「ええ、言われなくても分かってますよ」

審判とヒョウタのやり取り。やっぱりこの二人は仲が良いみたいだ。

その後ヒョウタはズガイドスをボールに戻してから一度こちらのブースにやって来て、ここからアスルの立つトレーナーの場所に向かう。観覧ブースは連絡通路の役割も兼ねている。

コダックを戻して無邪気な笑顔をおれに向けるアスル。おれも笑みを返す。自分が勝ったわけじゃないが、アスルが勝ってくれたのは嬉しい。

嬉しさ余って右足を軸に一回転をしたアスルの前にヒョウタが立った。

「はい、これがコールバッジだ。おめでとう、君の勝利だ」

ヒョウタは作業着の胸ポケットから、一枚の輝く板をアスルに手渡す。コールバッジ。意匠としては、モンスターボールに近いものがある。

「あ、ありがとう！」

「君は良いトレーナーだし、君のコダックも良いポケモンだね。こ

れからに期待しているよ」

ヒヨウタは笑顔で、具合の良さそうに言った。

その時、おれはある種の爽快感を得る。思わず手を打って頷いてしまう。

ジムリーダーに求められるのは、純粹なトレーナーとしての強さやポケモンの能力の高さだけではないのだ。

トレーナーに道を示してあげること、ジムリーダーには求められているのかもしれない。アスルの演技はヘタクソだったが、その姿勢は良かったと心の中で頷いたヒヨウタは、わざとアスルの演技に引っかけたやつたのかもしれない。

推測だらけの確証のない考えだが、確信を持つことが一つだけある。それはヒヨウタが浮かべる嬉しそうな表情だ。

おれがヒヨウタに挑んだ時、彼はあんな表情を見せただろうか？
いや、蔑んだ眼差しだった。間違いなく。

「ノブオー！ 私、コダックと一緒に勝ったよ！」

駆け足で観覧ブースにやってくるアスル。おれは立ちあがって軽く拍手をして出迎える。

「アスルもコダックも、よくやったよ」

えへへ、とアスルは無邪気に笑い続ける。そうだ、それで

幾分か穏やかになっていた雰囲気、頭が割れるようなサイレンの音でがらりと変わる。

不穏な、何が起こるか予見できない、体の中がざわつくような嫌な感じだ。

「緊急事態発生。炭鉱に侵入者多数。破壊活動を行っています！
繰り返します、炭鉱に侵入者多数。破壊活動を行っていますっ！！」

慌てた女性の声が、サイレンを流していたスピーカーからこの部屋全体に響き渡る。

おれはヒヨウタの様子を伺う。焦っているのか激昂しているのか、とにかく不穏な顔つきが別人のように映った。

「ジンヨウさん、ここを頼みますよ。君たちは安全な場所に避難してくれるね?」

努めて穏やかに声を出そうとしているのがよく分かる。ジンヨウと呼ばれた審判はどこからともなくモンスターボールを二つ取り出してヒヨウタに見せ、そしてアスルは口を震えさせる。

「ヒヨウタさんはどうするんですか?」

「炭鉱で暴れている奴を懲らしめてやるのさ」

「なら、私も一緒に」

馬鹿かお前! その言葉が衝動的に口をついて出てしまう。ストリートにアスルに突き立ったおれの言葉で、アスルは目をぱちくりさせてこちらを見つめる。

「えっ?」

「コダックは傷を負ってるし、お前じゃ足を引っ張る!」

その事実はおれにも当てはまる。いかにジムリーダーの本気と相対できる資格を持っていたからとして、炭鉱という環境では足を引っ張りがねない。

「……すまない。君達は安全な場所に避難するんだよ!」

それだけを残してヒヨウタはこの部屋を走り去っていく。

おれに出来ることは、ジンヨウと呼ばれた審判のおっさんに一礼をして、アスルの手をとって急いでここから出ていくことだけだ。

第五話 奮戦 シンオウのトレーナー、心を軋ませる

おれはアスルの手を引いてクログネシティを離れることにした。アスルには一度クログネジムの前で立ち止まってから、これからの行動予定を簡潔に伝えている。

この街の南方に位置するクログネ炭鉱に侵入者がいる。彼らの目的は破壊活動だが、少数の人間とポケモンがそんな行動を起こそうとするだろうか。

それは違う。きつと、この街を包囲できるほどの戦力を侵入者達は有しているはずだ。となれば、この街から脱出した方が言い込まっている。

アスルはおれの言葉にうなずき、荒く息をつきながら隣に並んで走ってくれる。そう、アスルに危険が及ばないようにしなければならぬ。

右に曲がれば炭鉱、左に曲がれば博物館に行きつく十字路で一度足を休めた。

南方からは何かが崩れ落ちる音や誰かの悲鳴が小さく響いて聞こえている。時折、遠くで花火が打ち上がったような、空で火薬が爆発する音も。

おれの右手にアスルは左手を結んでいるが、震えているのを感じ取ったおれはアスルの様子を見るために振り返った。

今にも泣きだしそうな顔をしていて、濃い印象のある彼女の顔は赤く染まっている。

「私をもつと強かったら……」

「なに？」

「炭鉱で暴れてるって人達を懲らしめるのに！ どうして、どうして悪い人から逃げなきゃ……」

なるほど、アスルは正義の心も持ち合わせているらしい。悪を見

逃すことが出来ないのは、もしかしたらアナトリアにいた頃から変わらぬのかも知れない。だが

「そんなことは考えるな！」

「だって、そうしたら炭鉱の人たちが」

「普通の人間がそんなことをして活躍できるのはなゲームやマンガやアニメの世界だけなんだよ！ 現実を見る、警備部隊がいるはずの炭鉱からはヤバい音がぶっ続いて聞こえている！ おれ達は近づけない！」

これをおれは正論だと考える。

しかし、本当はもつと別のところに理由があった。アスルを危険な目に遭わせたくない、というのがそれにあたる。アスルという存在は、おれが夢をかなえるための近道でもあるから。

おれが炭鉱に出向き、詳細不明の侵入者ども 暴力組織とでも呼べばいいのか？ をポケモンの力でもってねじ伏せることが出来るかも知れない。

しかし、二つの大きなリスクが生じてしまう。一つはおれが返り討ちにあうことで、もう一つはアスルをより一層危険な状況に晒すことだ。

炭鉱を襲っている連中をひねりつぶすことでも夢に大きな一歩を踏み出せるかも知れない。しかし、その一歩を踏み出すためには大きなリスクを払わなくてはならず、分の悪い取引となる。

おれはあいつらを見返さなきゃいけない。誰かがおれを見下すことなど許しはしないと決めたおれが死ねば何にならない。

「……ノブオ？」

「あ？」

「……ごめんなさい。だから、そんなに怒った顔をしないで」

しり上がりの語尾。元からおれの顔は優しそうには見えないが、アスルを怯えさせて得ることなんて何も無い。

「元からこんな顔だよ。ほら行くぞ、ほとぼりが冷めるまで207

番道路にしよう」

アスルは頷き返し、おれ達は再び走り出す。

太陽の熱で熱せられたコンクリートで固められた地面を蹴る度、おれのなかに打算以外の動機が鼓動を打つ。このままでいいのか、暴動を止めなくともよいのか。

かぶりを振る。そうしたら迷いが晴れるかと思っただのに、どろどろしたものが身体の底から湧き上がってくる。

やはりおれはあんな奴らの子供なのか。

自分が良ければそれでいいって思っているのか。

こんな状況で、ある程度の力を持つおれが手を貸さないのはおかしいんじゃないのか。

もしかしたらおれは、自分が思っている以上に悪い奴なんじゃないか。

「えっ、なにあれ!？」

アスルの引きつった声が、不快で否定的な考えを吹き飛ばしてくれたが、異常な光景を見てしまう。

老若男女を問わない多くの人間がクログアナ炭鉱博物館を遠巻きに取り囲んでいる。もしかするとこいつら数はこの街の人口の半分に及ぶかもしれない。

何をやっている？ 炭鉱が襲撃された知らせは地元住民にも届いて

いるはずだ、ヒーローシヨなんて見てる場合じゃ そこまで

考えて、おれは拡声器越しに増幅された声を聞く。

「もう一度言う！ 我々バリバリ団に楯突こうとする者があれば、躊躇いなく炭鉱に仕掛けた爆弾を起爆させる！」

少し割れた声に博物館を取り囲んでいる人間達が怯む。その向こうでは何かが爆発したり崩れたりする音が聞こえ始めた。

「炭鉱を襲っている人達の仲間が博物館にもいるの!？」

「……らしいな。ここからじゃよく見えないけど、まずい所に居合わせちまった」

おれはベルトからギャロップを収めているモンスターボールを取り出し、ボールを来た道の方に投げ、密かにギャロップを外に出す。「ノブオ、あいつらをやつつけるの？」

「違う。人垣が邪魔で何も見えねえからギャロップの上に乗って状況判断をする。奴らに手を出せば炭鉱が危ないのは本当らしいが、分からないことが多い」

おれはゆっくりギャロップの背にまたがる。ギャロップ種の体は常に炎上しているが、この炎がトレーナーや親しい存在を燃やすことはない。

背を高くしたおれは、バリバリ団を名乗る七人のラフな格好の間によつて博物館の外壁がぶち壊されているのを見た。

一人の人間につきポケモンを三匹出して破壊活動をさせている。バリバリ団を名乗る彼らは、バクオングやアゲハント、カイリユーやミロカロスといったポケモンを使役している。地方にとらわれずにポケモンを手に行っているらしい。

その中で一人だけ動かない奴がいる。顔を見せないようにサングラスを着用し、灰色のタキシード身を包んだ、他の六人とは服装も雰囲気も違う男だ。

右手に拡声機を持ち、左手にいかにもな形をした起爆スイッチを握っている。どうせスイッチをポチつとやるんだろが。紳士然としようとしてるのはふりでしかないってのが見え見えなんだよ。

「ねえ、みんな怒ってる……」

アスルが囁く通り、博物館を取り囲んでいる大勢の人間達の肩が震えているのが分かる。強く拳を握り締める者や歯ぎしりをたてる者もいた。

おれはギャロップの背から降りてそれをボールに仕舞いつつ、博物館から離れるために歩きだす。すると、誰かがおれの右肩を掴んできた。

「ちよつとノブオ、どこに行くのっ」

「やっぱりアスルか。」

「ねえ、あの人達を止められないの？」

「難しい。が、考えはある」

左手でおれの肩を掴むアスルの顔に笑顔が戻ってくる。泣きそうになったり険しい表情を浮かべていた時間は短かったのに、やけにこの笑顔が懐かしく思えた。

「アスルはここでじっとしていてくれ。絶対に動くなよ」

「うん。ねえ、やっぱりノブオも止めたいって思っていたんだね」

「おれはヒーローじゃないさ。そんな高尚な志なんて持ち合わせていない」

アスルが下を向く。そつかさうだよ、さつきあんなことを言った人が　そう思っているに違いない。

「ここで奴らの好きにさせてみる。アスルを危ない目に遭わせたくないんだよ」

それに起爆装置さえどうにかしまえばあとはこの街の住人がどうにかしてくれるさ。これは言わないが、アスルはおれを見上げて一度頷く。笑顔つきのさわやかな動きだった。

博物館から西に目測距離500メートルといった場所まで歩く。

そこに行きつくまでに、バリバリ団を名乗る暴力集団は博物館の外壁も内側もぶち壊してしまつたに違いない。嘆きの声がここまで聞こえてくる。

もはや状況は手遅れと言えそうだが、それは紳士然としたリーダー格の男が起爆装置を押してしまえばやってくる状況だ。これから行動を起こしても無駄じゃない。

おれは腰のベルトからギャロップとマニョーラ、そしてビーダルを納めているモンスターボールを手にする。チャンスは一度しかないが、失敗するかもしれないという不安はなかった。

「おれのポケモンだ、こんなの朝飯前だろ？」

右手の指の間にはさんだ三つのボールが微かに震える。肯定していると思うことにした。

「いいかギャロップ、人垣から三つ飛ぶ前のところで指示を出すから聞けよ」

一つのボールが震える。

「その後でマニニューラとビーダルを外に出す。灰色のタキシードの野郎がわざとらしい起爆スイッチを持つてるから、れいとうパンチといあいざりでぶつ壊せ」

言いきる前にギャロップを外に出し背に乗る。手に持つ二つのボールも確かに震えていた。

「頼むぞ」

短い呼び掛けにギャロップは控えめに高い鳴き声を上げる。大きくしていつでも解放が可能な二つのモンスターボールも激しく震えた。

ポケモンに乗るという行為はそのポケモンに何かの道具を備え付けることを前提とすることが少なくない。

おれのギャロップはそんな道具をつけていないから、こいつが激しく動くと振り落とされそうになる。

両腿でしっかりとギャロップの背を挟み、どうにか地面に落ちないように踏ん張って前を見る。タイミングを図って指示を出さねば、ギャロップが一般人の頭を踏みつけて殺してしまう。

「っ……今だ、とびはねろっ！」

上下に激しく揺れ動く視界でもって距離を図り、安全圏でギャロップに指示を出す。

とびはねる。この技は結構な高度を跳躍して敵を踏みつけるものだ。

しかし今回はギャロップも分かっているのか、力の向くベクトルはほぼ真上を向いている。攻撃のためではなく、高度を稼ぐためにギャロップが跳躍している間に、おれは二つのモンスターボールを人間が少し小さく見える地面にいるタキシードの野郎に向けて投げつけた。あ、博物館の天井が壊されてる。

おれの投球と重力が組み合わさった勢いでボールは勢いよく落下

し、ろくに警戒も出来ていなかったタキシードの男が頭に一つのモンスターボールの直撃を食らうのが見えた。なんつー爆撃だ。

「ぐあつ、貴様ああっ！！ スイッチ押されたいのかああっ！！」
十数メートルの高度から落下を始めるおれとギャロップに拡声機を向けて叫んでやがる。そんな余裕なんてないだろお前。

「それが貴様の選択か！ 喜べよ、貴様らの大事な炭鉱はドカ」
ギャロップの着地で尻と股間を中心に全身に激痛が回ったのと、何かがぴきつと凍てつくような音が響いたのはほぼ同じタイミングだった。

「このマニョーラ、先のモンスターボールのつはああっ！？」

がっ。乱暴に何かを叩き割るような音が直後に響く。よし、あいつらきちんと仕事してくれたか。

博物館から何かが壊れたりする乱暴な音が途絶えた。タキシードの野郎が変な声を拡声機で増幅させているのだから仕方がないか。

「この腐れポケモン共がああっ！！ 爆破スイッチをぶち壊しやが……あ？」

ノイズが短く走ってから拡声器越しの音は聞こえなくなった。

その前から多くの足音からなるどどど、としか形容できない音はしていた。この街の住民たちを縛り付けていた爆破スイッチという名の鎖が解けたのだ。

頭を割るかと思うほどの怒号と微かに聞こえる悲鳴。尻と股間の痛みをこらえる俺の周りにはもう誰もいない。みんな博物館に大集合だ。やったなスタッフさんよ博物館は大盛況じゃねえか。建物は壊滅的だけどな。

おれはゆっくりギャロップの背中から降り、こちらに戻ってきたマニョーラとビーダル先にモンスターボールに仕舞う。

両膝をついてギャロップもボールに戻し、ゆっくり仰向けになりながらボールを小さくしてベルトに吸着させる。

B級ホラー映画の怪物が出すような声を出しながら両手を股間と

尻にあてがう。くそっ、もうこんな無茶はしたくはねえ。

そうだ、そういえばアスルはどうした？ 動くなとは言ったが、言うこと聞いて待機していてくれてるだろうか。博物館の周りの暴動に首を突っ込んでなきやいいんだけ

「凄いや、悪い人達をやっつけ……」

ああそうだね痛そうだねギャロップにまたがって一緒に跳びはねたもんねそりや痛いよね私だってきつと痛がると思うわ。そんなことを思ってたんじゃないかこいつ。変なものを見るような目をしやがって。

「言ってるいいか？」

「え？」

「いまな、尻と股間がいてえんだ、向こうは危ないからしばらくここにいてくれ」

クログネシティの重要施設二つを襲撃したバリバリ団。結論から言えば、こいつらは壊滅した。

タキシードを着ていた奴 炭鉱と博物館を襲った二つのグループのリーダー格の奴らだった は逃走したが、他の団員は殆どが捕まった。

バリバリ団とは何者なのか。ラフな格好をしていた奴らの殆どは金に困っていて、襲撃を成功させたら多額の報酬がもらえると知られてほいほいついてしまったのだという。

アマチュアの傭兵なんてのは大概死ぬ。プロフェッショナルのそれでさえ死ぬだろうに、バリバリ団とやらの幹部はを分かっているのか そんなことをぶつぶつ言っているのは、クログネジムのジムリーダーであるヒヨウタだ。

あれから英雄扱いをされたおれは、おれとアスルにポケセンでも

う一泊させると主張して部屋にこもっていた。

おれはおれのために動いたのであって、誰かに感謝されるためじゃない。この街の住民に顔を見られたが最後、すげーだのありがとうだの、要らない言葉をふっかけてくるに違いない。

だが、おれの拒否権を突き破る方法は存在する。おれよりも立場が上の奴が来いと言えればいいのだ。

呼び出された場所はクロガネジムの前。そこには呼び出し人のヒヨウタが立っていた。心の中で舌打ちをする。

軽い挨拶を交わし、ヒヨウタの案内を受けて、おれはジムの中にあるヒヨウタにあてがわれた部屋の中の中にいた。

壁かけ時計を見る。長針と短針を見る限り、時刻は夜の八時ちょうどのようなのだ。

ジムリーダーともなると自由は制限されるらしい。

「警察の事情聴取やら何やらを受けて大変だったし、もう本当に疲れたよ。自分の勤めとはいえ色々大変なことをやった。明日からは博物館の復旧もあるし、ああいう手合いはもう勘弁だね」

若いジムリーダーは眼鏡を外して簡素な木製のテーブルの上にそつとのせた。赤いヘルメットは既にどこかに仕舞われていており、露わになった素顔はとても険しい。

まさか、三年前のおれとのジムリーダー戦を引きずってるわけじゃないだろうな。やめてくれよ、おれはもうあんなのじゃねえぞ。

「大変ですね。でもおれは整体師でもマッサージ師でもない。肩が凝ったから揉んでくれと言われても満足させられませんよ」

テーブルの向かいにあるふかふかの椅子に座るジムリーダーにかける言葉はこんなものでいいのか？ おれも同じ種類の椅子に座っているが、いいのか？

「君面白いなあ。いやいやいいよ、疲れは寝ればとれるからね」

笑うジムリーダー。しかしあの時のことと部屋の殺風景な印象からして、その笑いはとても浮いて見えた。

一つの大きな部屋の隅に簡素なベッドと、部屋の中心のあたりに

は部屋の主とおれが座る椅子とその間にあるテーブルが置かれている。

壁掛け時計、クローゼット、タンス。それだけだ。娯楽に関するものは一切置かれちゃいない。テレビの一台もないってのはどういうことだ。

おれが不思議そうな顔を浮かべているのを見てか、ヒョウタは浮かべていた笑みを静かに取り払う。

「君に二つ言わなきゃいけないことがある」

言うが早いか、若いジムリーダーはおれに背中を折った。礼の姿勢。これが意味する所は一つしかない。

「ありがとう。君と君のポケモンの活躍がなかったら、あの時僕は死んでいたかもしれない。本当に感謝している」

「頭を上げて下さい、おれはそんな大層なことをしたつもりは……」
自分のことしか考えなかった行動だ、なのにどうして感謝されなきゃならない。

「あとはもう一つ。君はもう、そんな大層なことをして欲しくないね」

すつと背筋を伸ばしてからヒョウタは言う。眼鏡を外した彼の表情からは有無を言わせまいとする圧を感じる。

「といたしますと？」

「もしもこういうことがこれから先にあったとして、そういうことに首を突っ込むなど言っているんだ。いいね？」

「ご心配なく。おれだって好きで手を出したわけじゃないのですから」

おれの言葉はヒョウタの目を丸く、そして口を小さくさせた。

「ご忠告どうもありがとうございます。大丈夫ですよ、自分から死に行く真似はしません」

立ちあがりつつ口を開く。もうおれに用はないだろう。

「……君は、まだポケモンに辛くあたっているのかい？」

おれがこの部屋を出ようとすると、ヒョウタは鋭い口調で問いを

投げかけてきた。まだって、まだあのことを引きずってるのかよ。
「生ぬるいやり方は嫌いなんだ。あの時からおれは変わってな、いや、自重はするようになったが」

言いきって自分の口調がいつも通りになっていることに驚いた。
沸々と湧きあがる苛立ち、焦り。これのせいかな？

「君の名前は覚えてるよ。ノブオ君だよ、博物館を襲っていたバリバリ団を倒すきっかけを作ったのがノブオという名前のトレーナーだと聞いて、すぐにぴんと来たよ」

「そうかい、ジムリーダー様に名前を覚えてもらって嬉しいね」

「そりゃ覚えるよ。ズガイドスが倒したビツパを君は容赦なく痛めつけていたよね。踏んだり蹴ったり殴ったりして。頭大丈夫かなって心配したよ」

まさか敵意のこもった目つきでこんな心づかいをしてもらうとは思わなかった。

「おれはもうあの時とは違う」

「そうかい？ 口だけならどうとでも言えるさ」

どうやらヒョウタはおれが相当気に食わないようだ。おれはあんなの親の敵じゃねえんだぞ……

たっぷりと十秒は流れたと思う。

ヒョウタはおれをまるで重罪人でも見るかのように見つめてくるから、おれもにらみ返してやる。

おれがビーダルになる前のビツパに暴行を加えたのは反省している。そのために二年もミオでこもってたんだぞ。

誰かを殺したりなんてしていねえ。そうでもねえってのにこいつはどうしておれを

「もう三年も前の話だからとやかくは言わないよ。そうだ、今日の挑戦者のあの子は君のなんなんだい？」

「連れだ」

「……そうかい」

何を納得したかは分からないが、おれの耳は確かにその四文字を聞き捉えた。

「話はもう終わりだよな」

「終わりだけど、最後に一つ。良い旅を」

意外な言葉だった。もしかしたら、ヒョウタはおれを認めてくれたのかもしれない。

そうではないにしろ、焼け石に水だとしても気持ちよくこの部屋を出て行かせようとしてくれた心づかいには感謝しよう。

「ありがとう。明日から忙しくなるとか言っていたよな。頑張れよ」

第六話 衰弱 アナトリアのトレーナー、倒れる

恐れていたことが現実になった。アスルが熱を出して倒れてしまい、動こうにも動けない。

何かおかしいなというのは今朝から分かっていた。今日の天気は曇りで夜にかけて雨が降るというテレビの天気予報の内容をそっくりそのまま伝えた時、頭を軽くふらつかせながら応答していた。

ちよつと調子が悪いんだ、と苦笑いを浮かべていた時からそれが嘘だったと気付くべきだった。くそつ、無理をするなってあれほど言っていたのに……

「ごめんね、はあ、ここまで酷くなるとは思わなくて……」
心を見透かされた気がして、それを振り払う。アスルはエスパーでもなんでもない。

「いいよ、アスルは自分の心配だけしていてくれ。後のことはおれがどうにかする」

申し訳なさそうに、しかし口を開く気力もないのか、アスルはただ黙ってうつむいて小さく首を縦に動かしただけだった。

空は鈍い色をした雲に覆われている。腕時計 ある程度の衝撃と水圧には耐えられるというのが特徴で、どこのフレンドリイシヨップでも販売されている を見れば、時刻は午後二時を過ぎたばかりだった。

アスルが病人とはいえ、幅の広い道路の真ん中で寝かせて処置をするのははばかられる。この天気だから人の往来は少ないが、好奇の目に晒すのはまずい。考えすぎかもしれないが、女の子に恥をかかせるわけにはいかねえ。

アスルの青いスーツケースを右手に持ち、アスルの身体をおれの背中に乗せて道路の端まで移動する。おれのバッグに錠剤の総合感冒薬があったはずだ。そいつを飲ませよう。

「はあ、ごめんね、重いでしょ……」

「んなことねえって。ただ、道路の真ん中じゃ簡単な処置も出来ねえからちよつと辛抱してくれ」

おれ自身に言っている気がした。ごめんなアスル、正直言って重い。体力がねえってことで勘弁してくれ。

整理された道路の端はうっそうと木や草が生い茂った森だ。日光がささない場所はどうも苦手だ、あまり近寄りたくはない。

おれは背負っていたアスルをそつと降ろして座らせ、肩と手に提げていた荷物も降ろした。

周りに人はいない。これで誤解からの通報という事態にはならないだろう。

「ちよつと待つてるよ、風邪薬を出すから。錠剤は飲めるよな？」

おれのバッグを探りながら横目でアスルの様子を伺う。力無く頷くのが分かった。

右手にビンがあたる。手にとって見てみると、握っていたものこそが探していたものだった。セントラルで買っていてよかった。

ビンの中の白い錠剤を三つ取り出してアスルに手渡す。飲む際に水が要らないものであることを告げると、アスルはゆっくりとそれらを口に運んだ。

これで少しは具合がよくなればいいんだけど。いや、よくなってもらわないと困る。

さて、これからどうする。アスルはただの風邪だろうが、こじらせるともまずいのは火を見るよりも明らかだ。

右に曲がってテンガン山に至る道と206番道路至る道に分岐する所まで歩き、そこから東に進路をとって208番道路に足を踏み入れてヨスガシテイへ行く。駄目だ、テンガン山にある洞窟を抜け、208番道路に至るだけの余力がない。

ここから北にある206番道路の上に伸びるサイクリングロード

をどうにか徒歩で移動してハクタイシティに到達する　これも駄目だ、病人を伴って移動できるルートじゃねえ。

くそ、詰んだか？　いや、待て。いつだったかおれはポケセン以外の場所でも寝泊りをしなかったか？　ちょうど、こういう不便な場所で構える民間の宿泊施設の戸を叩いて？

おれのバッグの中にあるはずのタウンマップを手に取るべく、両手をバッグの中に入った。

……あつた。長い間使ってきてくしゃくしゃになりかけ、おれの書き込みのせいで普通のそれとは印象の違うタウンマップだ。

クロガネシティを示すブロックに右の人差し指を添え、ゆつくりと上になぞっていく。

おれの指は地図上の207番道路を北上し、右に曲がる207番道路とそのまま北上すると206番道路に突入するトの字の場所で止まる。

ここに鉛筆で小さな丸が描かれている。そうだ、ここにあるのは……

「ギャロップ、仕事だ」

アスルから離れた場所にギャロップが入っているボールを投げる。背中から光を感じながらアスルに告げる言葉を考え、口を開く。

「悪いが、ギャロップの背中に乗ってくれないか？」

疲れ切った顔を上げるアスル。沈黙を続けるのは続きを言えという意思表示なのだろうか。

「ここから北に行くと言った宿屋があるんだ。ちょっとぼろいけどな」

「……燃えているけど、大丈夫？」

「大丈夫だ。こいつの炎にまかれて死んだ奴なんて聞いたことがない」

アスルに向けて右手を伸ばし、もう片方の手でギャロップの額に触れる。

「この子を背中に乗せて歩いてくれ。間違っても激しく走ったりして振り落とすなよ」

わーってるよ、心配しないで任せてくれ　ギャロップの高い鳴き声が、おれにはそう言っているように聞こえた。

左手首につけている腕時計は、15時25分を示している。

空は既に黒みを帯びた灰色の雲に覆われている。景色だって暗く見えてきた。そろそろ目的の宿屋に着くはずだが、状況のせいかわけに焦ってしまう。頼むぞ、まだ雨は降らないでくれ。

薬の効用とギャロップの高い体温からか、アスルの様子は少しは良くなったように見える。身体をギャロップの背に預けてうとうとしているのを見ると、焦る気持ちがつつと消えていく気がした。

「アスルは寝ちまったからな、気をつけて歩いてくれよ」

念のために釘を刺しておく。いつもより小さくいいと鳴き声を上げたギャロップの動きの幅が小さくなった。

しかしどうもビジュアル的には危ない場面なんだよな。ギャロップが小さくしているとはいえ、炎に巻かれているわけだから……魔女狩りを彷彿とさせる奴もいるかもしれないねえな。

「ようやくトの字の分岐が見えてきたな……」

厳密にはトの字ではなく十字路なのだが、あの宿屋に続く道はナンバリングされた道と比べると小径であると認めざるを得ない。近づかないとよく分からないのだ。

「……ん、ごめん、寝てた」

ギャロップの背からいかにも寝起きといった様子の声が聞こえる。「そのまま寝ていていいって。ギャロップだって起こさないように頑張ってたんだ」

「それじゃ、お言葉に甘えて……そうだ、宿屋にはいつ着くの？」
もう十字路にはたどり着いている。ギャロップの額に手をやり左に曲がるように言い、それからアスルに向けて口を開く。

「十分も経てば着くよ。ただ、外見はポケセンのようにきれいな場所じゃない」

「え？」

「六十過ぎたお婆さんが十歳ちょっとの孫娘と一緒に細々とやっているんだ。清掃は行きとどいてはいるんだけど、建物が古くてな」
「ああ、そうなの」

「それでもいいところだった。一応浴場もあって……入浴剤入れたお湯なんだけどさ。温泉じゃないってのがネックかもしれないけど、そこそこのいいものだったし」

不安要素を無くしてやるのもおれの役目だ　なんとなくそう思った。

ナンバリングされた道路とは違い、道路整理が成されていない。小径であることと、周りがうつそうと生い茂った雑草や幹の太い木が隙間なく並んでいる景観が、この道に陰気な印象を与えている。

この狭い道の途中には、木製の簡単な看板が（やっぱり湿っているのだが）「ペンション　森の宿　この先2km」というように立てられている。おれはこれを見かけるたびにアスルに逐次看板の情報を教えた。

本当は誰かがこの道を先に通っていることも教えてやるべきなのかもしれない。

足跡が人間一人分多いことから説明がつけられたが、おれたちには関係ないだろう。アスルだつてうるさくされたら治るものも治らないだろうし。

森の宿とはよく言ったものだと思う。天候のせいもあるが、周りの暗い景色を見るとどうも陰鬱な印象を受けてしまう。建物のぼろさを見ればこの印象はどんどん加速してしていく。

宿屋とは思えないほどに小さな建物。所々黒ずんでいる白い外壁には苔も生えている。仰々しい門などはなく、建物自体はここでひっそりと暮らしている人間のちよつと大きな家という印象を受ける造りだ。

アスルは自分でしっかりと立てるくらいには回復していたようだ。ギャロップの背から降りたのを見てから、おれはモンスターボール

から赤い回収光をギャロップにうちこんで仕舞う。

きちんと仕舞ったのを確認し、ボールを小さくしてからベルトに吸着させると、おれが運んでいた青いスーツケースにアスルが手を伸ばしながら何か言うのが聞こえた。

「へえ、大きい家だね。でも、何か汚れているけど……大丈夫？」

「中はそれなりにきれいだっただはずだ。記憶が正しければ、食事つきでもとても安かった気がする。街のホテルと比べりやかなり安い」
「ああ、うん、大丈夫。自分の分は自分で出せるわ」

一応、前にアルバイトで稼いでいたお金で財布は潤っていた。アスルが出せないと言ってもある程度なら腹を切れたが、良かったと思ってしまう。

白い大きなドアを開ける。やや軋んだ音をたて、ドアについているベルがからんからんと来客を知らせた。

奥の方から細く高い声ではいいはいはい、と聞こえる。ここの主のお婆さん　白の割烹着を着ていて、顔にしわをもつオーナーだ
がやってきたのはしばらくたってからだった。

「お客さんかい？　あらら、どうしたのその子！　すぐに中にお上がんなさいよ！」

一人で立てるまでに回復はしていたが、やはり顔色は優れていないアスルの様子を見て、オーナーは彼女の手を引いて中に連れ込んで行く。

二人に続いて玄関で靴を脱ぎ、シンオウ地方以外では珍しい（らしい）二重の扉　冬の寒気を招かないための措置らしい　を抜けていく。玄関に靴はいくつかあるが、それが先客がいる証になるかどうかは分からなかった。

広めのエントランスホール兼食堂。模様などが一切ないカーペットの上に木で出来ている円形のテーブル。半径は一メートルと少しか。

ここには幅広のソファアが二つある。とてもふわふわしていそうな、地味に高級感が漂う代物だ。

白いブラウスと紺色の布地に黄と赤のロングスカートという私たちの、身体の線が線の細いオーナーは、アスルにその内の一つに横になるよう勧める。

「さ、ここで横になりなさいな」

「えっ、ありがとございます……」

「いま毛布を持ってきてあげるからね、その後で木の実スープを用意するからね」

まさかここまでやるとは思わなかった。

この部屋は客室がある二階へと至る階段と、一階にあるスタッフのプライベートな空間に通じているはずだ。オーナーがこの部屋にあるドアを開けて消えたということは、自分の部屋にでも行ったのか？

とんとん、と天井から小さな音がする。やはり先客がいるらしい。道路を歩いていたが、雨を避けるためにここに寄った。そんなところだろうか。

「ねえ、ノブオ」

「どうした？」

「さっきと比べたらだいぶ楽になったわ。ノブオに貰ったお薬もよく効いたみたいだし」

「そうか、そりゃあよかった」

「でもそのおかげで、服が汗でびしょびしょで……」

後で部屋をあてがってもらうさ、そこで着替えればいい。おれはそう返して、そしてアスルに関して初めて知ることに目を開いてしまった。

アスルは眠たそうに頭にかかるく巻いた白い布をとる。すると、後ろに少し伸びている金髪が露わになった。

ああそうか、そっぴやアスルは遠い地方の人間だったな。時々それを忘れるから困る。

第七話 森の宿 ゆるやかに流れる時間

アスルの後ろに少し伸びた金髪を初めて見たおれはため息をついた。きれいだなと思つてしまつたのだ。

髪も軽く巻いた白い布の中に仕舞つていたのだろう。ストレートヘアーながらも、押し固められた髪が見せる独特の印象を放っている。

「ノブオ、どうかした？」

「なんでもない。そうだ、今のうちに財布を出しといてくれ」

おれはアスルの持ち物である薄い青色のスーツケースを、ソファの上で横になる持ち主の近くに置いた。

アスルが普段と比べて力のない動作でスーツケースを開けている間、おれは彼女に背を向けてもう一つのソファに座り、辺りを見回してみた。

このエントランスホールと食事場所を兼ねた空間には大きな窓が二つある。そこから外を見れば雨が降っているのが見えた。よかつた、あと少し遅れていたら雨に打たれて憂鬱な気持ちになつていかもしれねえ。レイニーブルーってやつか。

ポケモンを模つた木彫りの小さな人形が、窓枠の下にある棚に陳列されている。

（当然だが、自動人形でもない限りは）一寸も動かない人形は、馬鹿げてはいるがこのペンションに時間が流れていない錯覚を覚えさせた。

おれは並べられた人形のひとつに手を伸ばし、掴み上げる。ピカチュウを模つた木彫りの人形は細かいところまでよく作られていた。ちゃんと尻尾の形で性別を判断出来る。尻尾が割れているのでメスの個体だ。

隣にあるコダックの人形も同じ。その隣も、そのまた隣の人形も、精巧な作りをしてじっと黙っていた。

さつきから気にはなっていた。上からはほとんど足音らしきものがずつと鳴っている。いつたいなんなんだ？

「はいはい、ごめんね待たせちゃったね」

白いブラウスと紺色の布地に黄と赤のチェック柄を持つロングスカートを着た、身体の線が細いお婆さんのオーナーが分厚い毛布を持ってやってきた。

毛布をアスルの体の上に乗せた時、アスルがテーブルの上に用意していた財布に気付いたらしい。

「あらお嬢さん、ここに泊まりに来てくれたの？」

「はい。そのノブオに、もう夜も遅いけど、ちょうどいい宿屋があるんだって教えてもらって」

「あらら、彼氏さん？」

そんなのじゃないです。おれが断りを入れて、それから一日泊まる分だけのお金を手に持つ。街の安いホテルよりも金額は抑えられる。

「テーブルの上にあがっている財布は彼女の、アスルっていうんですけどね、持ち物なんですよ」

「うん。ねえ、私の代わりに財布からお金を出してくれない？」

頷き、アスルの財布 幅も厚みもある、何らかの革を使った高級感に溢れている 手に取り、そこから必要な金額を取り出す。

「今晚は二人泊まれるでしょうか」

「もちろん。ちよつと待っててね、いま鍵を渡すから」

そう言つとお婆さんはもう一度奥の方へ引つ込んで行ってしまった。

「あのお婆さん凄いな。一人でこのペンションを切り盛りしているってそうそうないと思うわ」

アスルが顔だけ上げて言う。口では同意しながら、前にここに泊まった時にはいた孫娘の姿が見えないことに戸惑いを覚えていた。

長い黒髪がよく印象に残っている。オーナーの若い頃にそっくり

なのだとオーナー自身が言っていたあの容貌は、かわいらしいよりは活発な印象があった。ちょうど、アスルと似た感じ。

小さな体でオーナーの仕事をよく手伝っていた。接客態度は子供じみていながらもそれなりに良好で、ゆくゆくは跡を継ぐのだろうと想像させる、そんな良い子だった。

もしかすると、ポケモンと共に旅に出ているのかもしれない。そこまで考えて、これが一番納得できる答えだと踏む。確認はとらないようにしよう。地雷を踏んで泣きを見るのはおれだけじゃない。「はいはい、これがあなた達の部屋の鍵ね。タグについてるシールの番号と対応しているわ」

しわがれた小さな手にもつ二つの鍵をおれに手渡したオーナーは、あとでアスルの部屋に木の実スプを持っていくと言って三度奥に引っ込んで行った。

オーナーの後ろ姿を見届けたアスルはゆっくりと起き上がり、自分の頭を覆っていた白い布と毛布をまとめて右脇に抱える。

二階に行くのだなと察しをつけ、アスルの青いスーツケースのなかに財布を入れ、これと共に自分の荷物を持ち上げる。

「ありがとう。やっぱりノブオって優しいんだね」

「優しいとかそんなのじゃないって、病人の連れがいる人間の義務ってところか」

謙遜しないでいいんだよーなんて言いながらアスルはおれの後ろについて階段を上がってくる。分かってないな。

先にアスルの部屋の戸を開錠し、アスルと一緒に部屋の中に入っていく。

青いスーツケースを部屋の中に置き、アスルが毛布に包まれベッドの上で横になったのを見てから、おれは自分にあてがわれた部屋に入る。

部屋のレイアウトはどこも同じらしい。小さなブラウン管のテレビ、ふかふかそうにベッドメイクされたシングルベッド。

レイアウトだけは街のビジネスホテルのシングルルームを意識している、そんな感じがする。ここにはないのはシャワー室くらいのものだろうか。

浴場（入浴剤を入れていますが、温泉ではありません。という注意書きつき。わざわざそんなものを用意するあたり、オーナーの人柄がよく分かる）なら二階の廊下を玄関とは反対側に行った先にあるあとで行ってみようか。

それよりも食堂にあったポケモンの木彫りの人形を見てみたい。オーナーがいれば、あれらについての話も聞いておきたい。

本来なら外に出てポケモン達に適度な運動をさせてやりたいが、生憎の雨である。

こういう時はいつも、ポケセンの設備がいかに充実しているかを思い知らされる。二階にあるポケモンバトル用の空間なら外部環境を無視して動けるから、お陰でいつも盛況している

「おっ、こんちはー！」

浴場の側から若い女の声が聞こえる。先の二階の足音はきつと彼女のものだったに違いない。

声がる方に向き直ると、そこには今時の若者のファッションに身を包んだ少女がいる。青空を想起させる青色の半袖のワンピースにホットパンツ。肌の露出が多い、アスルとは対極の側にいる印象がある少女だ。

顔立ちは中々良い。女の子向けの雑誌によくいる読者モデルとかいうものに抜擢されそう（実際読んだことはないが）な感じを受ける。

顔のどのパーツを見ても目をそむけたくなる形がないし、それらがきちんとバランスよく配置されているのだ。

「きみも宿泊者？」

「そうっすよー。これからお風呂ですか？ それとも外に？ いやでも雨降っちゃってますよねー」

人当たりの良い調子はアスルと似ているが、ベクトルは違う方向

を向いているようだ。初対面の人間相手にこうも打ち解ける様子を見せて大丈夫か？

「ああ、下にあるポケモンの人形を見たいなと思って」

「お兄さんって意外と少女趣味があるんですねー」

少女趣味い？ いやなるほど、確かにそう捉えられてもおかしくはないか。

「ポケモンが好きただけだ」

「やだもう、ちょっとからかってみただけじゃないですかー、そんなに怒らないでくださいよお」

いたずらっぽく笑うこの子に友達はいるのだろうか。おれが言えた事じゃねえんだけど。

「そうだ、そういえば付き添いの人がいきましたよね。あの人って彼女さんだったりします？」

「そんなのじゃないな。おれとあいつは異性として好き合ってるから一緒にいるとか、そういう間柄じゃない」

「へえー珍しいですねえ。それで、お兄さんは」

「ノブオだ、よろしく」

一瞬、この子の表情が曇ったような気がした。おれの顔に何かついているだろうか。

いや、さっきのは幻覚かもしれない。メルツェルは人がよさそうに笑っている。

「あたしはメルツェルっていいいます」

あれ、この子はこの地方の住民の顔つきに見えるが、アスルのように遠い地方からやってきたのか？

「もちろんトレーナーとしての名前です。本名じゃないですよお」

「やっぱりか。そういや、メルツェルのように登録名をつける奴が最近多いんだよな、紛らわしいったらありやしねえ」

「えー、登録名をつける権利にケチつけるんですかあ？」

軽い調子で抗議をするメルツェル。そんなつもりはなかった、気を悪くしたなら謝る。ベストの答え方ではないが、そう口を開い

たおれは階段を下りる。

「じゃあ付き合っちゃおうかな。ちょうど暇してましたからねー」
メルツエルは鼻歌なんて歌いながらおれの後ろをついてきて、柵から人形を手にとってアスルが横になっていたソファアに腰を下ろした。

「ところで、ノブオさんって……」

「ん？」

「いえ、なんでもないですよ」
はつきりしねえな、何だってんだ？

おれも人形を手にとってもう一つのソファアに腰を下ろす。おつ、ギャロップの人形が凄い。身体から燃え上がる炎まできちんとそれらしく作ってる。

木でできた小さなギャロップを感動をもって眺めていると、またとんとんと足音がする。音がする方を向くと、そこにはペラップの人形を持ったメルツエルがいた。

視線を下にやる。きれいな脚の先には、足首のあたりにレースがついた白い靴下に包まれた小さな足がある。これがさっきから踵を地面につけて足の先だけを上下運動させているのだ。とんとんとんとん。お前だったのかよ。

「なあ、止めてくれないか」

「え？」

何を咎められているか分からないといった様子でメルツエルがこちらを向く。おれは目線で彼女に教えてやる。

「あつごめん。ついつい癖でやつちまうんですよねー」

「いや、そこまで嫌だったわけじゃないが、助かる」

頭をかいて苦笑いを浮かべるメルツエルを見て、憎めない女の子だなと強く思う。

それに、咎めの言葉を受けて落ち込んだ様子を見せない。メルツエルの予想以上の明るさにおれは安心していた。

「そついいばせ」

「どうしましたー？」

「なんでメルツエルって名乗ろうと思ったわけ？」

それはですねー、と言葉を伸ばすメルツエルは手に持った木彫りのペラツプの人形を逆さまにしてゆっくりと左右に振る。

ペラツプは色とりどりの体毛を持つ鳥ポケモンだが、黒い顔ととさかが八分音符の形をしている。尾羽に至ってはメトロノームの棒に似た形をした、音楽好きには受けそうなポケモンだ。

「それはなんなんだ？」

「分からないんですかー？ ほら、このペラツプの人形ってよく出てくるじゃないですか。だから本物のように、尻尾がメトロノームのように見えるでしょ？」

「見えないこともないけどさ、メトロノームがメルツエルって名前と関係があるのか？ メの字しか合ってねえぞ」

「昔々にメトロノームを作ったといわれる人の名前がメルツエルさんっていうんですよ。それに、遠い地方の人ってかっこいい名前が多いじゃないですかー」

メトロノームとメルツエル。なるほど、そういうわけか。リズムをとるのが好きなこの少女ならば、メトロノームにちなんだ名前を思いついても不思議ではない。

「でも、メルツエルはメトロノームの特許をとっただけなんだって」
上からアスルの声がする。薄い桜色をした、布地こそ薄いものの肌の露出を抑えた普段着だ。ふわふわしている長袖の服と足首のあたりまで裾がありそうなパンツ。いつも民族衣装を着ているアスルらしい格好だ。

「メトロノームの原型を作ったのはウインケルっていう人なの。メルツエルはウインケルのアイデアを横取りしたって聞いた あっ！」
階段を降りるアスルはメルツエルを見て両手で口を押さえる。メルツエルも驚いた声を出したあたり、二人には面識があるのか？

「メルツエルじゃない！」

「アスルじゃん！ えー、どうしてこの人と一緒に？」

「それはね、ごほっ」

「えっ、大丈夫？ 風邪ひいてるの？」

そうなのと返しながらアスルはおれの右隣に座ってきた。途中から割り込んできたが、会話は筒抜けだったのだろうか？

「部屋で休んでいればよかっただろ？ 何かあったのか？」

「お婆さんに階段を上からせるわけにはいかないと思って。ほら、木の実スープを運んであげるって言っていたじゃない」

確かにオーナーは言っていたが、お前の気遣いは向こうに悪いだろう。

「セントラルで知り合って以来だよ、元気だった？」

「うんうん、元気でやってるよ。でも、メルツエルさんが特許をとっただけだとかそんなの知らなかった」

「メルツエルさんだっっている改良とかはしていたと思うわ」

アスルは申し訳なさそうに微笑む。メルツエルと、彼女が名前を借りた人物に対するフォロワーだ。

「いいって、あたしだって初めて知って勉強になったんだから」。

屈託のない笑顔でメルツエルが返すのを見て、改めてメルツエルが明るい人間であることを思い知らされる。こいつ何言っても怒らないんじゃないか？

にしてもこの二人は仲が良いんだな。女同士ってあまり良い関係になりにくいらしいんだけどなあ。

その後しばらくして、アスルはオーナーからカップ一杯の木の实スープを手渡された。

オーナー曰く、使った木の実ラム種だという。

ポケモンの全ての状態異常を取り除く作用があるために高価なものとして知られているが、アスルはそのことを知らないようだ。教えたとこで彼女に窮屈な思いをさせるのは分かっているから言わ

ないでおいた。

スープの中のラムの実が効果を発揮したのか、夜になるとアスルは幾分か元気を取り戻したようである。メルツェルにせつかくだからと言われたアスルは一緒に浴場の方へ行った。

雨も上がっているし、二人が行って少し時間を開けておれも浴場に入ろう。それまではポケモンの人形を眺めていようかななんて考えたおれは、階段を降りながらある事に気がついた。

浴場は男女の仕切りがついている。十分なブロッキングを果たすかと言えばそうでもないが、おれにはわざわざ覗きをやる連中の心理は測りかねる。

今度はビーダルの木彫りの人形を手にとってソファアに座って眺める。まるまると太った身体と大きく見開いている目。顔の大きくふわっとした体毛や大きな尻尾などもよく出来ている。

ビーダルは弱いから使いものにならないと言って、多くのバツジを持つポケモントレーナーの多くはこれを手持ちに入れるケースが少ない。おれから言わせてもらえば、ビーダルはきちんと使ってやれば弱くはないと胸を張って主張できるのだが。

「あらら、それ気に入ってくれたの？」

オーナーが後ろから声をかけてきた。お疲れ様ですと返しながら振り返り、おれは気になっていたので尋ねる。

「これとかあれとか、ポケモンの木彫りの人形は全部オーナーが作ったものですか？」

「そうそう。中にはミチコの作ったものもあるけど」

寂しそうな声色と表情。ミチコはオーナーの孫娘の名前のはずだ。「前にここに泊まりに来たことがあります。良いお孫さんですよね、ミチコちゃん」

「あらありがとうございます。でもね、ポケモンと触れ合いたいって言って旅に出ちゃってね。最後にあなたが持つてるビーダルの人形が、ここで作った最後の人形になるわ」

恐らくはオーナーの方が人形制作のスキルは上だろう。けどお

れにはどちらの方が優れているというのは、あの人形達を見ての判別はできなかった。見る目がないだけかもしれないが。

「よく出来ていますよね。そうだ、そろそろお風呂を使わせていただきます」

「あらら、そうなの？ そうだ、一つだけ聞いていいかしら」

「なんででしょう」

「あの子はもう大丈夫？ ラムの実のスープが効いてくれたらいいんだけど」

「だいぶ体の調子は戻ったみたいですよ。もう一人のお客さんと一緒に風呂に入っているみたいですよ」

「あらら、よかったわ。お友達は大事にくださいね」

にっと笑ってしわの多い顔にしわを増やすオーナー。おれも笑って返し、人形を元の位置に戻す。

「年寄の冷水と思われるかもしれないけど」

「え？」

いきなりトーンの低い声を発したオーナーに驚く。何を話すつもりだ？

「三年前だったかしらね。お客さんから、クログネジムを強引に攻略したって有名なポケモントレーナーがいたってお話を聞いたの。

なんでもその男の子は怖い顔をしているらしくてね。細い目にいつも緊張を湛えているみたいなお口だとか、なんとか」

「ええ」

「その子は手持ちのポケモンに罵詈雑言を投げかけ、敗れたポケモンを暴行し、鬼のような形相で指示を出したらしいの。どういふ方針か分からないけど、少なくともまともなトレーナー像からは離れているわね、そう思わない？」

「違わないですよ。だが、そのポケモントレーナーは確固たる意志を持ってそうやったのだ。」

「そのポケモントレーナーの名前はミヤモト・ノブオ。三日前にコトブキシティのセントラルの前にある広場で開かれた大会で、ジム

バッジを七つ持っている人を対象にした部門で優勝した人も同じ名前。あなたが後で宿帳に記帳した名前も同じ」

オーナーはここで言葉を切る。次はあなたが口を開きなさいと、しわの多い顔が語っているような気がした。

「おれは……」

「あなたはあのノブオなの？」

黙ってうなづく。口を開こうにも、唇が重い。

やっぱりとも言いたげにオーナーはため息をつき、

「今も三年前と同じように、おかしな態度でポケモンと向き合っているの？」

「もうポケモンに乱暴なことはしてませんよ。言ったところで信じてもらえるとは思っていませんが」

オーナーはまっすぐにおれを見つめてくる。視線をそらさせない見えない力がある。

「どうしておれがミヤモト・ノブオだって分かったんですか」

「昨日来たお客さんが……確か、アキラとかいったかしらね。セントラルの大会で優勝したトレーナーの名前がミヤモト・ノブオだっ
てことを教えてくれたの。さらにお客さんが、ノブオは見慣れない
女の子を連れてくるって教えてくれてね」

なるほど、アスルは外見全てが特徴だらけの女の子だから、もしもオーナーがとも鈍感だったとしても分かるってわけだ。

にしてもアキラだと？ まさか、あいつが最近ここに来たっての
か？ おれをあんな目に遭わせたあいつが？

「ところで、聞いてみたいことがあるのだけど。どうしたら公共の
場でポケモンに乱暴出来るのかしら？」

「簡単ですよ。そうしてもおかしくない事情があれば、誰だって同
じことをします」

「よく分からないわね。それって答えになってる？ ……それは言
いたくないの？」

オーナーの声の調子から分かかっていて尋ねられているような気が

した。確認のための質問。おれはそつと頷いた。

「……そう。たぶん、ロクなことがなかったんでしょう？ 無理をして話させることじゃないから」

「助かります」

頭を下げ、おれは二階へ行くこととする。そろそろお風呂の方に行こうと考えたのだ。

アキラのことは聞かなかったことにしよう。吐き気がする。

「そうそう、一つ忠告しておくわ」

「なんです？」

「二年も活動を停止していたから大丈夫だと思うけど、あなたの名前はとても蔑まれていたわ」

「……つまり？」

「新聞もインターネットもないこんな場所に住む私でもあなたのことを知ってしまった。なら、街に住んでいたり旅をしている人達もつとあなたの情報を掴む機会があるわ」

なるほど、そういうことが。

「私は、あなたが悪評のついたミヤモト・ノブオじゃないって思ってるわ。ポケモンに優しく出来ない人が他人に優しく出来るはずがないもの。アスルちゃんと一緒にいて、あの子が風邪をひいてもあなたはきちんと面倒を見た。そうでしょう？」

「そう見えます？」

「もちろんよ。アスルちゃんはあなたを嫌っている様子じゃなかったし、だからああ、反省したんだなって分かったわ」

オーナーは笑う。とても人がよさそうに。

「ささやかながら応援するわ。アスルちゃんともうまくやっていくんだよ」

笑い返して会釈をする。

おれのことをきちんと分かってくれる人がいる。そのことがどれだけ助けになるか、今になってようやく分かった。

二階の廊下にあがると同時に、浴場の方から一つ大きな声が聞こえた。アスルとメルツエルが浴場の更衣室で喋っているのだろう。やけに大きな声だ。いや、メルツエルが大きい声を出しているだけか。

一度部屋に戻って入浴の準備をし、男湯の更衣室に入ろうとして、「うわーっアスルって脱ぐと凄い！」

「きゃっ！ ちょっとメルツエルなにするのっ！」

「うわっうわー！ これは男は黙ってないよこれ、だってとてもすげばっ！」

メルツエルの馬鹿でかい声がやられ声でしめくくられるのと、何かが大きな音を立てて倒れる音がよく聞こえた。

「……おれ達は静かに入ろうぜ」

ベルトから六つのモンスターボールを手につ。小さくなった紅白の球は同意してくれるかのように震えていた。

第八話 捕獲 アナトリアのトレーナー、思いを胸にボールを投げる

「私、そろそろ二匹目のポケモンをゲットしたいんだけど、アドバイスお願いっ！」

おれは寝袋のジツパを開けながら、開かない目をどうにか開けようとする。

寝起きにアスルの大声ときたもんだ。おれの鼓膜をぶち破りたいのか。

「おい、朝起きたらなんて挨拶をするか言ってみろよ」

「おはようノブオ！ それで、アドバイスをお願いしたいんだけど、だめ？」

もしかしたら、昨日のおれの言葉を必要以上に重く受けとめているんじゃないだろうな。

お前のポケモンはコダック一匹だろ？ だったらこの先きついから、近いうちに野生ポケモンの一匹でも捕まえた方が良くぞ 確かにそんなことは言った。アスルのためを考えて言ったださ。

思い立ったが吉日なんて言うけどよ、行動力が高すぎてついていけないよ。

「……メルツエルに頼んでみたらどうだ」

「だってメルツエルがノブオに頼んでみたらーとか、あたしじゃアドバイスなんてできないーとか言うのよ！」

そっぴや、メルツエルが持つてるバツジの枚数はアスルと同じ一個だったか。だからとはいえ力になれないってことはないだろうよ。「分かった、分かったからもっと声を小さくしてくれよ。耳が痛い」アスルが少し目を開いて視線を下にやる。眉尻が下がって落ち込んでるのがよく分かる。ちよつと言い過ぎたか？

にしたって爪が食い込むほどに拳を握りしめなくなっただっていいだろうがよ。朝っぱらから緊張しすぎじゃないか？

「空きのモンスターボールはあるか？」

首を縦に振るアスル。声を小さくしるとは言ったが、口に力を入れて横一文字を結ばなくなったっていいだろうよ。野生ポケモンの捕獲はそんなきつい事じゃねえんだから。

今日思いついたことかもしれないが、そんなに余裕がなくて切迫したつてもものじゃないって。それに、それよりもっと大事なことがある。

「なら、野宿の片づけをしよう。ここを汚してテンガン山のイメージを悪くしたらアレだしな」

ペンション「森の宿」を出発したおれ達は、折角だからお供させてえなんていうメルツェルを旅のメンバーに入れてヨスガシティを目指していた。

おれは肩に旅行用バッグをかけているが、アスルとメルツェルはそれぞれ青と黒のキャリアー付きスーツケースをころころ歩いてる。

女の子が二人揃えば会話は弾むようだ。

アナトリアの民族衣装である、頭髪を隠す程度に軽く巻いた白い布をなびかせ、ベージュ色の大きな布地に色とりどりの絨毯模様が縫われている服と、同じような意匠のロングスカートを穿くアスル。アスルが身体のラインをぼかす服をよく着るのに対し、メルツェルはホットパンツに灰色がかった白色のＴシャツといった割と自己主張の強い服装だ。

服の趣味には違いがあるが、二人は楽しそうに話をしていて。二人しておれの存在を忘れてるんじゃないかと思ってしまう程に。

ただ、メルツェルの調子がおかしいなと思うところはあった。

アスルとメルツェルの話題がおれについてのものになった時、アスルはおれをセントラルの大会で優勝した人間だと説明してくれた。

その後でおれが改めて名乗ったんだ、フルネームで。するとメルツェルの顔色に陰りが見えて、でもやっぱりそれは幻だと思わせるかのようになりを潜めていった。

あの評判の悪いトレーナーと同じ名前。だけど、あんな人と一緒にするのは失礼にあたるわ……そんなことを思っていたに違いない。もしかするとメルツェルはヨスガシティで情報収集をするかもしれない。

おれがあこのミヤモト・ノブオなのかどうかを確かめるために。評判の悪い奴といたって何の得にもならないのは火を見るよりも明らかだ。

ヨスガシティに向かうためには、207番道路からテンガン山の洞窟に向かい、そこを抜けて208番道路に出でずっと歩いていけばいい。

ただ、森の宿からヨスガシティまでは一日中歩いてでも到達できる距離ではない。外で夜を過ごし、朝日を迎えなければならぬのは言わずもがなだ。

おれは洞窟を抜けた後の開けた場所で野宿をすることを提案し、実際におとずれて安全を確保した後に寝袋と焚き火の用意を始めた。洞窟を抜けた後の場所は開けているが、同時に高所でもある。何かの事故があつて崖から転落して死ぬつてのは非常にまずい。

ここに詳しい人間がボランティアで拵えたのか、危ないところは木製の柵が不完全ながらも防護の役目を果たしていた。

これならば安全だと踏んだ俺はここで一夜を明かすことを提案し、二人の賛同を得た。

アスルはこれが初めての野宿だと言ったが、寝袋一つはちゃんと用意していたし扱いもきちんとしていた。

メルツェルも自分で自分のことをしっかりとやれている。二人が

予想以上に出来るので安心した。

おれ達三人は焚き火を囲って寝袋の中に眠って一夜を過ごし（テントなんてお上品なものはない）、後片付けを済ませてから歩き旅を再開する。

下からは川がごうごうと流れる音がひっきりなしに聞こえる。とりあえずは下の草原を目指すことにして、おれは前を歩く二人の会話を耳を傾ける。

「ねえアスルー」

「なあに？」

「どうしたらそんな身体になれるのー？」

あくび交じりにとんでもねえこと尋ねやがったぞこいつ。

「それは分からないわ。だって、何か特別な器具を使ったとかいうのでもないし」

「うーん、やっぱり親の遺伝かあ。いいなあ羨ましいなあー」

ため息をつくメルツェルにアスルは困った笑顔を向ける。この手の話題は得意じゃないのかもしれない。

「そうだ、もつと簡単に考えれば得意じゃないんだって断言できるじゃないか。」

雲の一片の欠片もない空からは容赦なく太陽光がおれ達を熱しているのに、アスルは今日に至るまで全身の線が隠れるアナトリアの民族衣装を着ていた。

決してメルツェルは貧しい体つきをしているってわけじゃない。人は自分がないものを求める。きっとそうなのだろう。

「そういえば、アスルはどこで野生ポケモンを捕獲するつもりだろうか。このあたりの捕獲スポットについては知らないだろうから、教えてあげよう。」

「話の途中で悪いんだけど、アスルは空きのモンスターボールを持っているか？」

朝の会話の続きなのだとすぐに分かったか、すぐにアスルはこち

らを向いて頷いた。

落ち込んでいるのだろうか。どうもいつもの彼女らしくない。表情が死んでいるように見える。

「それじゃあ、草原に出たらコダックを出してくれ。手には空きのボールを持っててくれよ」

アスルは躊躇いがちに頷きを返す。なんだよ、変なことを言ったか？

眼下にあるごうごうと流れる川を見て表情がこわばったのだろうか。それとも、何か別なものに震えているのか？ おれはエスパーじゃない。推測は立てられても確定は出来ない。

「ここを道なりに行くと階段があつて、そこから草原に出られる。そこの隅の方に馬鹿みたいにかい草むらがあるから、そこでポケモンを捕獲するぞ」

「わかつた。でも……」

「でも、どうした？」

「ううん、なんでもない」

その顔ならなんでもあるだろうが。何か悩みを抱えているんじゃないかあるまいな、そのためのおれだろうがよ。何かあつたら言ってくれよ。

架けられた橋を渡り、険しい渓谷を突破するために作られた山道を歩いたおれ達は、ようやく草原に接続する長い階段の前にやってきた。

おれの白いスニーカーが土と砂に汚れて色を変えていた。アスルのベージュ色をした細身の靴も、メルツェルの黒い革靴も同じように汚れてしまっている。出発する前にある程度きれいにしてきた意味がなくなっちゃった。

まあ、こんな事を言っても無駄か。旅をする上で一番汚れるのは

靴と足元なのだと相場が決まっている。

「あつ、ノブオさんが綺麗にしてくれた靴が汚れちゃってる！」
メルツエルはおれの目線をたどってこれに気付いたらしい。

彼女はおれを申し訳なさそうに見つめ、アスルはようやく自分の靴が少々汚れているのに気付いたようだ。

「そんなに気にする事じゃない」

昨日、メルツエルは部屋の物を片づけるのが苦手だとこぼし、そこから話が発展しておれがきれい好きだと自分で吐露してしまった。でも、本当にそんなことは気にしなくなっただけいいのに。そうしたところで無駄なのだか

「ですよー。さつ、先に進みますかー」

そうだ、こいつ自分が傷つくってことがないんだ。メルツエルのポジティブシンカーっぷりは森の宿で話をして分かっていたはずなんだけど。

「ちよつと待って！」

アスルの短い叫びがおれに一步を踏みださせない。が、メルツエルは既に三段階段を下りていた。行動力の高さに脱帽してしまう。

「アスルー、どうしたの？」

「ごめん、ちよつと怖くなっちゃって」

かすかにアスルの肩と背中が震えている。メルツエルはこれに気付いていないのか、笑顔でアスルを見ている。ふむ、冗談の一つでも言っただらば、アスルもリラックスできるだろう。

「どうした？ こんなさつきまでの高所じゃないだろ？」

「うっん、違うの」

「違う？ 違うってどういうことだよ」

アスルは右手に持ったモンスターボールを大きくして、無言でおれに突きつける。中にはコダックが入っているものはずだ。

「あ？」

「いまから私、その草原の」

踵を返したアスルは視線を問う風に広大な草原に向ける。いや、

彼女の視線は草原を囲う鬱蒼とした森に隣接して広がる背の長い草で形成された草むらに向けられていた。

「そこで生活しているポケモンを捕まえようとしているわ」

「そうだな。それが？」

一つ間を開けて、アスルはゆっくり頷いておれを見つめてきた。もしかして、睨まれてる？

確かに、仲間にする予定のポケモンを痛めつけて弱らせるのはためらってしまうところがあるだろう。それに、野生のポケモンのコミュニケーションをも壊してしまう。

これはおれが旅を始めてから知ったが、アスルは二年間ものあいだに言葉やポケモンについて学んでいたはずだから、きっと知っているのかもしれない。

「ポケモンを捕まえるってことは、その子を仲間のポケモン達から奪ってしまうことと同じなのよ？」

「……」

「考えようによっては、自分が戦わせたいからって勝手な都合でポケモンを捕まえる私達は、違法ポケモンハンターと変わりがないわ」なるほど、倫理的に考えて野生ポケモンを捕獲するってのはどういうことだっけ事が言いたいのか。

アスルの言うことは間違っていない。しかし、これを多くの人間の前で聞かせてやるとどうなるだろうか。

アナトリアという、ポケモンに明るくない（というのはアスルとの会話で分かったが）人々が暮らす地方からやってきた新米のトレーナーごときにそんなことを言われたくはない、と考える奴が多いだろう。

それにアスルの発言は、これまでのトレーナーをはじめとする人間とポケモンの関係に亀裂を走らせてしまうかもしれない。だいたいにして、私達は違法ポケモンハンターと同じ、なんて言ってしまったのがまずい。

正直、おれにはアスルを怒らせないなだめ方が思いつかない。珍

しく仏頂面を浮かべたアスルに、なんて声をかけてやればいい？

「んー、そつかもしれないよね」

この場に似合わないくらい、とても軽い調子でメルツエルが切り出した。

メルツエルが口を開いたからか、それとも彼女が笑顔交じりに自分のもとにやってくるからか、アスルは戸惑いを露わにメルツエルの方を向く。

メルツエルは軽くウインクを飛ばし、右手を胸の高さに持つてきながら人差し指をぴんと立てた。

「でもさ、こう考えられない？ ポケモンに辛い思いをさせるなら捕獲なんてやらない方がいいんじゃないかって考えるんじゃないかって埋め合わせをしてあげるってどういうか」

「埋め合わせ？ それってどういうこと？」

「だから、うーん……アスルはポケモンを捕まえたら、捕まえたポケモンが可哀相だつて言いたいんでしょ？」

黙ってアスルは頷き返す。おれは肩にかけている荷物を地面に下ろしておく。女の子同士の会話に水を差さない、それでいて好きなだけ喋ってくれよという絶好のアピールのつもりだ。

「なら、そのポケモンが元いた環境に劣らない場所をアスルが創つてあげればいいじゃないかなー」

「場所を創るって？」

「そのまんまの意味よ。あたしのパートナーは小さい頃から一緒にいるペラップしかいないけど、そう考えるようにしてる」

「でもそんなの、私には出来ない」

「んー、じゃあさ。アスルのコダックはどうやって手持ちに入れたの？」

「それは、ブリーダーの人に融通してもらって……」

そこでアスルは言葉を止める。ここで詳しい話をして意味がないと踏んだのだろう。

「コダックだつてブリーダーさんとおる程度の交流はあつただろう」

し、アスルはそれを引き裂いたってことになる。でも、コダックはアスルが嫌いな態度を見せた？」

「ううん。そんな様子は見たことがないわ」

「だったらアスルはポケモンをリラックスさせてあげられる気持ちを持っていないんだよ。大丈夫。きつと新しく捕まえるポケモンだって、アスルがいい子だって分かってくれるって！」

アスルはじわじわと口元を緩ませ、張りつめていた表情を笑顔に変えていく。なるほど、いい呼び掛けじゃねえか。

「あたしも一緒にそこでポケモンを捕まえるわ。でも、野生のポケモンにボールを投げるのはまだやってない。今は親の受け売りね。ごめんね、ちょっとオチがひどくて。えへへ」

「ううん、ありがとう。メルツエルのおかげでちょっと楽になった」
右手を伸ばして微笑むアスル。メルツエルはすぐにアスルの手をとって、二人はお互いの手を軽く握り合った。

「なんだよ、おれよりメルツエルの方がよっぽど頼りになるんじゃないか。そんなことを考えつつ、おれは地面に降ろしていた荷物を肩にかけなおしつつ二人に呼び掛ける。

「よし、お話は終わりみたいだな。階段を下りて用事を済ませちまおう」

階段を降りて草原に出たおれ達は、草むらへと続く境界の近くに立っている。おれは草むらから数メートル離れた場所に立ち、メルツエルは左に、アスルは右に陣取って草むらに立ち入ろうとしていた。

アスルとメルツエルのスーツケースはおれの足元に置かれている。捕獲をするのには邪魔だからといっておれにおしつけることはないだろうよ。

メルツエルは既にペラップをボールから出して、自分の体の周り

で羽ばたかせていた。

アスルのコダックも外に出ていて、両手で頭を押さえながら上目づかいでアスルを見上げている。

おれの膝より少し上のあたりまで背が伸びている草むらに先に入ったのはメルツエルだ。彼女の頭上にまとわりつくようにペラップが色とりどりの羽根でもって羽ばたいている。

「ノブオさん、ちょっと聞いていいですかあ？」

こちらを振り向かずにメルツエルが問いをふっかけてきた。

「なんだ？」

「ここのあたりで捕まえられるポケモンって、どんな種類がいました？」

「アサナン種とかノコッチ種とか、後は……ラルトス種とスポミー種だったか。この四種は確かに生息しているぞ」

「よしっ、それならラルトスはいただきっすねえ。ほら、アスルも来てよ！」

メルツエルの言葉でようやくポケモンの捕獲に前向きになれたらしいアスルは、しかし足を動かさせないらしい。

無理もない。頭では分かっているもやれないってのはよくあることだ。

「ごめん、いま行く。さあコダック、一緒に行こう」

無言でコダックはアスルの顔を見つめ、露払いをするかのようにアスルの前を歩いていく。こいつもアスルを大事に思ってるんだな。さて、どうするかな。もしものことがあつたら困るし、おれのポケモンを数匹用意するか。ここにはやたら強い奴はいないはずだから、どいつを出しても問題はな

「音楽サイコー！」

メルツエルのペラップがそんなフレーズを叫んだ。

たぶんこれはおしゃべりという名を冠した技だ。回路動力源から得たエネルギーでもって、覚えた言葉を介して音波攻撃をかますのだ。

ペラップが照準を合わせたのは、おれの視界からでは何も見えない草むらの一部分だ。その証拠に草むらの一部分が一度ひしゃげる。「えっ？ いまペラップが音楽最高って」

「そんなのいいから！ 早く草むらを出るよ！」
ペラップが自分から攻撃を仕掛けたということは、何かしらの敵意を持った存在がいた可能性が高い。

一メートルも草むらに入っていない二人は自分のポケモンにボールの赤い回収光を当ててから草原に退避する。踵を返してからもう一度お互いのポケモンを出し、草むらでかさがさと音を立てる存在に注意を払う。

「ねえノブオ、こっちにくるよ!？」

「わざわざおれたたちの視界不良でアドバンテージを握るってのを放棄してくれたんだ。ありがたく思っておこうぜ」

「そんなのじゃなくて、ねえ！」

アスルの叫びと、コダツクの自慢のみずでっぽうが草むらの始まりを強引にひしゃげたのは殆ど同時だった。

それから間もなく草むらから躍り出たのはラルトスとスポミーだ。スポミーはみずでっぽうの飛沫を浴びたらしく、くるぶしより少し高い程度にとても小さな身体 前掛けを想起させる緑と黄緑の体色と模様が特徴だ に太陽の光を輝かせている。

一方、メルツェルのペラップと相対しているのはラルトス スポミーよりは少し背が高い白い身体をし、緑色の頭部と前後に生えた赤い角と、身体にくっついていて薄い表皮が裾あまりのロングスカートのめいて見えるのが特徴だ だ。

野生ポケモン相手にダブルバトル、いいやこれじゃマルチバトルか。危なくなったらおれが助けてやればいいが、ここは二人に任せよう。

「躊躇うなよ。攻撃して弱らせないとこいつらボールに入ってくれねえからな」

「ペラップ、前の敵におしゃべり！」

「全身緑の敵にたいあたりよ！」

二人の返事は技の指示で始まった。いちいち返事を返す余裕なんて誰だってないわな。

ペラップは再び音楽最高のフレーズを叫び、不可視の音波攻撃をラルトスに向けて繰り出す。

唐突な攻撃故か、ラルトスは悲鳴を上げて草むらの一歩手前まで吹き飛ぶ。

しかし戦闘意欲は失っていないようで、緑の頭部に隠れた赤い瞳を細くしてペラップに向けて両腕を伸ばしたのが見える。

「いつけえ！」とアスルが大声を立てる。スポミーの小さな体に白い光を帯びたコダツクのたいあたりは響くだろう。

だが、スポミーもカウンター気味にしびれごなをばら撒いたようだ。コダツクの周りに黄色の霧みたいなのがぶかぶか浮かんでやがる。

空から悲鳴が聞こえた。恐らくはラルトスのねんりきがペラップに作用したに違いない。

勢いよくペラップが地面に叩きつけられるが、攻撃を仕掛けたラルトスは先の一撃でろくに動けないようだ。

視線を右に移せば、ぶるぶる震えるコダツクの傍らに倒れるスポミーも同じくらいに弱ったのが見える。これならいける！

「今つすよね!?!」

「そうだ！ アスルもボールを投げておけ！」

おれの言葉を半分も聞かないメルツェルはボールをラルトスにぶつけ、アスルは投球が苦手なのか小走りで距離を詰めながらスポミーにボールをぶつける。

それぞれのボールはそれぞれの捕獲対象に当たり、赤い回収光が捕獲対象の二匹を閉じ込める。

ボールに閉じ込められたポケモンが抵抗してボールを揺らしているのと、そよ風が草を揺らす音をのぞけば、おれ達はこれまでにないほどに押し黙っていた。少し離れたアスルの心臓の音が聞こえる。

そんな気さえ起きてしまう。

しばらく抵抗している様子を見せた二つのボールは、捕獲を完了した事を知らせるように動きを止めた。

アスルとメルツェルはお互いを見つめ、黄色い声を上げつつ抱擁を交わす。

「やったよメルツェル、私達、ちゃんと捕獲できた！」

「そうだね！ アスルのコダックも、私のペラップも凄かった！」
興奮さめ止まぬ様子を見せる二人。びりびり震えているコダックは自分の近くに飛んできたペラップに向けて小さな跳躍を続けている。

あ、こけた。コダックは身体がしびれちまつてるんだから無理はない。だからといってペラップが面白そうに鳴き声をあげなくなっていたいだろうに。

「よし。捕獲したモンスターボールを回収しようぜ」

二人はおれに笑顔を向けてから自分のポケモンをボールに仕舞い、捕獲したポケモンを収めたボールを手にとって小さくする。

「この子の居場所、ね」

ぼそりとアスルの声が聞こえる。いつものトーンの声。いつものアスルが帰ってきている。

「ん、アスルどうしたのー？」

「やっぱり抵抗したでしょ？ ほら、ボールを投げて閉じ込めた時に。やっぱりこの子にもメルツェルが捕まえた子にも居場所ってあるんだわ。でも……」

アスルは両腕を青空に向けて突き出し、大きく息を吸って。

「私はこの子に不自由させない！ 今は嫌われても仕方がないわ。でも、いつかきつと、出来れば近いうちに仲良くなる！」

「おっ、その意気よ！ あたしもラルトスと仲良くなるぞっ！」
二人して楽しそうに笑いながら大声を出し合ってる。

きつとこれは十割が二人の思い抱く所ではないはずだ。だが

「宣誓したところで悪いが、早いところここの草原を東に抜けないと、夕方までにヨスガシティに着かないぞ。さっさと行こうぜ」

二人が嬉しそうな声を出して了解の意を示してくれたあたり、おれが気にかけても意味はない。

これから先、アスルが野生ポケモンの捕獲について思い悩むことはないだろう。捕獲の先にある共存や仲間意識を形成することに目を向けてくれたのだから。

よし、ヨスガシティに着いたらメルツェルになにかおごってやろう。俺が答えたんじゃアスルをどん引きさせちまったかもしれないねえし。うーん、これからもこの旅に付き合ってくれねえかな……

第九話 提示 律動を愛でる少女は陰を纏う

ようやくたどり着いたヨスガシティは、夕焼けのどこか物悲しい赤みのかかった黄土色に染まっている。

高さ十階程度はあろうビル群の一面はすっかりと夕日の色に染まり、改めて今日が終わることを確かめさせてくれた。

今晩は雨が降るかもしれない。陰りを見せる大きな雲の塊が地平線の彼方から風に乗ってこちらにやってきている。

右手に大きな噴水を中央に据えた公園を見据えながら歩いていると、メルツエルがアスルの肩を軽く叩いてにっと笑った。

「ねえアスル、この街ってなんだか綺麗だと思わない？」

「えっ？ うーん、確かにそうかもね。なんというか、清掃がしっかりしている気がする」

言われてみれば、この街のどこにもゴミの類がない。この街の住人全てがきれいな好きなのだろうか。

「凄いいよね。この街の北の方にポケモンコンテスト会場があるんだけど知ってる？」

「知らなかったわ。でも、それってヨスガシティがきれいだったことと何か関係があるの？」

「大アリだよ！ コンテストはポケモンに華麗に演技をさせる競技だから、コンテスト会場がある街が汚かったらアレじゃん！」

興奮気味にまくしたてるメルツエル。ははあ、こいつファンか。
「アスルはコンテストって観たことある？」

首を横に振るアスルに、メルツエルは落胆した表情を見せる。まるで、もつたないなあ、なんて言いたげに。

「そうだ。アスルはしばらくヨスガシティにいるんでしょ？」

「うーん……ねえノブオ。どのくらいここにいられるかな。ノブオの事情もあるのよね」

なるほど、そういうことか。おれはナギサシティまでたどり着けばそれで問題はないし、先を急ぐつもりもない。

「四日間だな。その間にスポミーと仲良くしたり、メルツエルと一緒にコンテストでも観たりしたらいい」

視線をメルツエルの方に移す。右手をこちらに突き出し、親指を上に向けていた。気の利いた言葉が言えてよかったぜ。

「わかった。それじゃあメルツエル、四日間はここにすることにするわ」

「そう？ それじゃ四日間しか一緒にいられないんだあ」
「なんだって？」

「ああ、ここにおじいちゃんの家があるから。だからあたし、一週間くらいいいようかなって思ってた。それに調べたいこともあるしね」

「うんうん。しばらく休むのも大事よね」

「だから、今日はここで。明日の八時に迎えに行くから！ おやすみっ！」

メルツエルはおれ達の進む方向から外れていく。待て、ちょっと聞きたいことがあるんだ。

「おい、メルツエル！」

「なんすかあ？」

「八時にあの噴水公園で待ち合せよう。話しておきたいことがある」
「噴水公園、八時っすね。分かりましたよー！」

右手でスーツケースの取っ手を持ち、左手で大きく手を振るメルツエルの姿は、横に伸びる住宅街の方面に消えていった。

「さ、ポケセンに行こうぜ。早いとこ部屋をとっちゃまおう」
「そうね。でもノブオ、メルツエルと何を話したいの？」

アスルに聞かれたくないからわざわざこんな事をしたんだよ
そう返す訳にはいかないから、おれは別にとだけ言ってはぐらかすことにした。

追及の手は伸びてこない。アスルには興味がないのか、それとも怒っているのか、おれには分からなかった。

ポケセンの宿泊施設の部屋は確保できた。

アスルはおれと別れる際におやすみと言っていたから、たぶん疲れ切っていたのだろう。

もしかしたらおれを気遣ってくれたのかもしれない。声には出さず、ありがとうございますと呼びかけることにした。

おれはいつもの服装（シャツとジーンズ。今日のシャツの色は黒だ）で、旅行用バッグの中に仕舞ってある小さな肩かけバッグを持って外に出る。

バッグには財布を仕舞っておいた。メルツエルを呼び出したのは、あの時アスルを説得してくれてありがとうと言ったためである。ジューズの一本くらい奢ってやらねば。

フレンドリイショップに入り、サイコソーダを二つ購入する。

大抵の街にあつて幅広い商品を取り扱うフレンドリイショップは天地がひっくりかえっても存続するんじゃないか。そんなことを考えながら、おれは夜のヨスガシティを歩く。

短い等間隔で設置された街灯が、石畳に落ちるおれの影を二つ三つと増やしていく。昼にはお目にかかれない

フレンドリイショップのマーク（白いナイロンをバックに黒線のモンスターボール。開閉スイッチにFの字がある）がプリントされた袋を揺らさないように歩き、おれは公園にたどり着く。

バックライト付きの背の高い時計台に目をやる。短針は8の一手前に、長針は12を示そうとしていた。言いだしっぺが遅れちゃあシャレにならない。ギリギリ間に合つてよかった。

夜中だからか、公園に人気は感じられない。こういう場所には居場所を求める野生ポケモンが数匹いるのが相場だが、それらの姿は見当たらない。電灯だって結構な数が設置されているにもかかわら

ず、だ。

無害なゴースの一匹でもそこらを漂ってくつろいでいるかと思っ
たが、まあいい。

動力を止められ死んでいる噴水の近くに設置されたベンチに座る。
背もたれの無いものだが、不便さは感じない。

時計台が八時を少し過ぎた時間を示したあとで、メルツエルがわ
びを入れながらこちらにやってきた。

気にしなくていいと返し、おれはメルツエルの様子を見る。

おれ達と別れたきりのままの、灰色のTシャツにホットパンツの
出で立ちでメルツエルはおれの隣に座るが、その動きがどうもよそ
よそしい。

初めておれと顔を合わせたような いや、その時だつてとても
明るかつたじゃないか。これをメルツエルと呼ぶのはかなりの抵抗
がある。

「おい、何か嫌なことがあったか？ お爺さんと喧嘩でもしたか？」

「えっ？ いいや、そんなことはないっすよ」

こいつも嘘をつくのがとことん苦手らしい。顔が正直なことを話
してしまっている。

「まあいいや。誰にだつて言いたくねえことはあるよな」

「それはそうなんすけど……あれ、その袋は？」

「おお、メルツエルにサイコソーダをやるうと思つてな。あの時の
お礼だよ、一応な」

ナイロン袋からサイコソーダのビンを取り出す。

「あの時つて？」

「アスルを説得してくれただろ。ポケモンを捕まえたくないとか言
つてた時だよ」

「全然気にしなくてもよかつたっすよ」

つっても口は正直なんだな。躊躇いなくおれからビンをとって
きやつた。

「なあ、頼みがある。おれとアスルの旅についてきてくれないか？」
結局のところ、おれは礼と依頼を伝えたいがためにメルツェルと待ち合わせをした。

断りはしないだろう。旅をするのに友人の一人や二人は伴っていった方がアスルの心の面は落ち着くはずだ。

「いいつすよ」

「そっか、助かるよ」

おれの顔に自然と笑みが浮かぶのが分かる。メルツェルも笑っていた。困り顔で。

「ノブオさんのお話は終わりつすか？」

「ああ、これだけだ。悪かったな、急に呼び出したりして」

「いやいや、なんでもないつすよこんなの。でも、気になることがあって」

低いトーン。うつむきながら小さな声で尋ねるメルツェル。

「ノブオさんって、三年前に悪い意味で有名だったミヤモト・ノブオなんですか？」

おれは驚かなかった。こういう問いがメルツェルの口から発せられる予感の前々から抱いていたから。

第十話 衝突 黒い雲に隠れた月は涙を流す

「確かにおれはミヤモト・ノブオだ。お前の言うトレーナーと同じ人間だよ」

メルツエルがこんな質問をするのは、何となくだが分かっていた。た。

おれが名乗った初対面の時も、アスルとの会話の話題がおれのことと変わった時も、メルツエルはおれを疑っていたはずだ。表情に表れていたじゃないか。

それに情報を掴むのは容易なはずだ。ある程度外の情報を遮断された森の宿のオーナーだっておれのことを知っていた。なら、この街に住むメルツエルがおれのことを知ろうとして出来ない道理がない。インターネットって便利な代物もあるしな。

「やっぱり、そうなんですか」

「だったらどうした。文句の一つでもつけてみるか？」

「はい。出来れば、アスルと一緒にいるのをやめてくれませんか」

怯えが混ざった真剣な面持ちでゆっくり呼びかけられる。怒る気なんて全く湧いちゃいねえのに。

「言いたいことは分かるよ。評判の悪い人間と一緒にいても何の得にもならねえよな」

「それに、アスルはアナトリアでポケモンのことを広めようって頑張ってます。あたしはそれを応援したい」

まあ、まっとうな人間なら誰だってそう言うだろうな。

「アスルからトレーナーとしての経験を多く積むためにノブオさんと一緒に旅をしていることを聞きました。でも……」

「おれみたいな評判の悪い奴がいればアスルにも迷惑がかかるって言いたいんだろ？ 言いたいことははっきり言おうぜ」

メルツエルがはっとした様子でおれを見つめる。

「木の実が沢山入った箱の中に腐った木の実を入れたら、状態の良

い木の実もどんどん腐っていくそうです」

「結構言っじゃねえか」

「あたしは……あたしは、ノブオさんが言われるほどひどい人じゃないって思ってます。でも、他の人がそう思うとは限らない」

そこで言葉が途切れる。明るい性格のメルツエルだって誰かをけなす言葉を言うのは辛いだろう。いや、明るい性格なればこそかもしれない。

メルツエルが今のおれをよく見てくれたのは嬉しい。が、アスルのそばを離れる訳にはいかねえ。

「お前の言いたいことはよく分かるよ。でも、それは出来ねえ相談だ」

しっかりとメルツエルの目を見て言ってやる。おれの矛盾した言葉にメルツエルは少なからず動揺を見せる。感情が、戸惑いが、表情から見えた。

「アスルはおれを必要としているし、おれもアスルが必要なんだ」
「えっ？」

「おれにはどうしてもやりたいことがある。そのためには良い意味で大きく名前を売らなきゃ駄目なんだ」

メルツエルが息をのむ。おれの言いたいことを分かってくれたらしい。

「アナトリアのトレーナーに大きく貢献した人間って肩書きが欲しいのさ、おれは」

「だったらノブオさんは、それだけのためにアスルと一緒にいるんですか？」

「最初はな。でも、いまはそれだけじゃないさ。言葉にしづらいが、それだけじゃない」

「……もしかしたらノブオさん、アスルと友達になりたいんじゃないですか？」

あ？

「アスルは自分の目標のために頑張ってるし、ポケモンを捕まえる

時に躊躇った優しさも持っている。だからあたしは、この子とはずつと一緒にはいられないかもしれないけど、隣にいたいって思いました。ノブオさんもそうなんじゃないですか？」

「そうだな。それが近いかもしれない」

呟くように言っていると、メルツエルはばつの悪そうな顔を浮かべた。

自分と同じような思いを持っているおれを相手にアスルとは手を切れと言ったのだ、そんな顔をして不思議ではない。

「そうだ、いい考えがある」

メルツエルを見つめていたら一つのアイデアが閃いた。あまりいいものじゃあないと思うが。

「おれがアスルにおれのことを教えるよ。おれ達がアスルを無視して勝手に話を進めてもアレだろ？」

目と口を大きく開いてメルツエルはおれを見つめ、静かに手を打つ。

「いっすね、それ」

「ヨスガシティにいる間にアスルとは話をつける。アスルがおれと一緒にいたくないって言えば黙って消えるさ」

「本当は、あたし達三人で旅が出来たらいいんですけどね。そうだ、三年前のノブオさんはどうしてトレーナーとして問題のあるところ」

「ぼつりと上から何かが落ちた。」

息もつかせぬ間に、何かはたくさん地面に叩きつけられていく。

雨だ。あの雲が成長してこっちにやってきたのか。

「その話はまた後にしよう。傘持ってねえしな」

「そうっすね。おやすみっす」

メルツエルはそう言つと両手をコダックのように頭の上に乗せつつ、軽い足取りで公園を後にした。

さて、おれも戻らねえと。もしかしたらアスルが心配しているかもしれないねえしな。

駆け足で公園を出て、北の方面にあるポケモンセンターを息を弾ませて目指す。

雨足が激しくなってきた。コダツクのポーズで雨粒を防ぐのだった意味がない。

街灯に照らされる雨粒が映える夜のヨスガシティをポケセン目指してかけていくと、前方にフレンドリイショップが見える。先にサイソーダを買った所だ。

行きと同じルートを通っているからここに出くわすのはおかしくないんだが、おれの目を引いたのはビニール傘を差したアスルがフレンドリイショップの前で誰かと話していることだった。

店の窓から洩れる照明のお陰で、アスルと話をしている人物が男であるのが分かる。黒の七分に黒のスラックス。あれは誰だ？

「おーい」

おれは二人に呼び掛けながら近づいていく。

「あつ、やっぱり傘持ってなかった。ほら、これノブオの分ね」

アスルは手に持っていたもう一つのビニール傘をおれに手渡す。傘を差しながら、アスルと話していた男の方を見やる。

瞬間、おれの全身に衝撃が走った。心臓の動きが早まった。目が血走っていくのが分かった。

大きな目に整った鼻と唇。雨にぬれているウェーブのかかった金髪。あの時のあいつだ。おれを、おれを理不尽な目に遭わせた元凶だ。

ざわざわと、おれの全身が粟立つような感覚が走る。ビビるな。前を、前を向け。

「……お前、アキラか」

「おう？ 君はもしかして、ミヤモト・ノブオなのかい？」

愉快そうに笑うアキラ。後ろからアスルが知り合いなの？ と問いかけてくるが無視してやる。そんな生易しいものじゃないし説明が面倒くさい。

「屑は屑なりに元気そうだねえ」

「く、くずう？」

アスルが呆れたような声を出す。お前はいきなり何を言っているんだと言わんばかりに。

心に沸々と湧きあがる怒りが満ちてくる。三年前はこの黒い塊をあたりかまわずぶちまけていた。自分が楽になるために。

今はそれが正しくないことを知っている。おれは両手に力を入れて口を開くことにした。

「どうしてお前がそこにいる」

「僕かい？ 僕はライトニング社の警備部門に入社したんだよ。今はパトロールの最中だから、失礼させてもらうよ」

「パトロール？ お前が？」

「そうだよ。君のような屑が街の人々に危害を及ぼさないようにね」

アキラは踵を返すとそのまま行ってしまった。ライトニング社。

どこかで聞いたような……

「ねえ、今のは知り合い？」

「そうだな。一番顔を合わせたくない奴なんだけどな」

「ひどいよね。ノブオのことを屑呼ばわりするなんて」

「まあな。さ、ポケセンに戻るうぜ」

生返事だった。アキラはアキラなりにおれを屑呼ばわりする理由がある。

それも含めて、今のうちにおれの過去を明かそうかと思ったが、雨足がさらに強くなってきやがった。

アスルが何かを言うが、あまりよくは聞き取れない。ビニール傘だって役目を果たしているとは言い難い。

走るぞ！ おれはそれだけを叫んで地面を蹴る。アスルもおれの

後ろをついて走る。ポケセンまでは近い。

第十一話 開幕 カーテンを彩るもの

アスルにおれの過去を話すとメルツェルと約束して翌日、おれは一人でヨスガシティをぶらついていた。

清潔なポケセンの食堂で朝食を共にしたアスルは、あの場に現れたメルツェルと二言三言のやりとりを交わし、二人で街の観光に繰り出していった。

おれは二人と一緒に動くのを辞退した。

気を紛らわせるために散歩に繰り出し、噴水公園へと足を伸ばす。夜の公園とは違い、太陽が顔を見せるこの場所に似つかわしい様相が見て取れる。

無邪気にはしゃぐ子供達と、恐らくは彼らのポケモン達が追いかけてここに興じている。

これを穏やかに見守り、ついでに立ち話をしながら楽しそうにしている大人達。

そこに白シャツに灰色のスラックス、肩には旅行用バッグを提げたおれがベンチに座って紛れ込む。正面数メートル先には衰える様子を見せない噴水が稼働しており、あたりに飛沫を散らしている。

ここでぼうっとしていてただで楽になれる。噴き出し、すぐに地面に落ちる水の流れを目で追っていくのも楽しい。

久しぶりに一人になった。今日は休日だ、たまにはこういう時があっただっていい。

でも、今日の晩にはアスルに話をしないと。あまり愉快な話じゃあないが、どんな筋道を立てて話すか考えよう。

ため息をついて空を仰ぐ。昨夜の大雨の後だからか、一片の雲もない青空の中に太陽が光を躍らせている。もう昼が近いのが太陽を見ればよく分かる。

暇だ。いや、そんなことは分か分かり切っていた。そうでなければわざわざフレンドリッシュョップで新聞とサイコーダー一本を買わない。

買ったものはバッグの中に入れてある。新聞でも読んで、その後でまたぶらぶらしよ

「ノブオー！ どうしてここにいるの!？」

ご機嫌な声が後ろから聞こえる。振り返るまでもなく、声の主はアスルだと分かる。

身体を左にひねると、アナトリアの民族衣装　大きく厚い、絨毯模様をトレースしたような布地を使った、身体の線を隠すゆつたりとしたものだ　を身につけているアスルが笑顔交じりに手を振ってやってくるのが見えた。

おっ、いつもは白色の布を頭に巻いているのに、今日は淡い青色だ。他にどんな色の布をストックしているんだろう。

「散歩の休憩だ。メルツェルはどうした？」

「近くにいますよ。呼ぶ？」

「いいよ。これから二人でどこに行くか決めてるか？」

「コンテスト会場だよ。昼から大会があるんだって」

アスルは指を差して目的地がどこにあるかを教えてくれた。知ってるからいいんだけどな。

「楽しんで来いよ」

笑顔（作り笑いを意識したからか、表情筋がぎこちない動きになった）でおれはアスルを見送ってやる。

コンテストの大会か。新聞の広告にあるかもしれない。

そんな考えを巡らせつつ、バッグの中から新聞を取り出す。

買う時に一面を飾った記事の見出し　ライトニング社、クログガネシテイ復興に大きく助力　だけは見ていた。おれは両手に新聞を持って広げ、一面記事を黙読する。

ライトニング社は数年前に立ちあげられた電力会社だ。ソノオタ

ウンの東方に位置する発電所のいくつかは、あの会社の所有物だったはずだ。

記事で初めて知ったが、ライトニング社は警備会社としての一面も備えており、ソノオタウンの治安維持に一役買っているらしい。

ソノオタウンを中心に活動を続けるライトニング社は、バリバリ団を名乗る暴力集団によって破壊されたクロガネ炭鉱や博物館の復興を全面的に応援することのこと。

そのための資金提供や警備部隊の派遣なども既に行われている。社長による社会貢献に見せかけた自社のアピールととらえる人間も少なからずいるだろうが、記事が示す支援の規模はとても大きい。

それに、通常営業として遠くの街の警備もやってくれるようだ。そうでなければ、アキラがヨスガシティにいる理由が分からん。

この街の代表がライトニング社に依頼し、警備の人間が派遣されたアキラはその中の一人だった。こう考えると筋が通る。

奇特定の企業もあるもんだなと物思いにふけりながら、新聞を裏返して番組欄を見る。おれの目当てはこの面の下にある広告欄だ。

「三日でベテラントレーナーになれる方法」

「魔の海峡の秘密を暴く」

「ポケモンと真剣に向き合う秘訣」

本屋に行ってもこんな本は買わない。この広告欄に圧迫された印象のある、それでもそれなりのスペースを確保した広告欄に探したかったものはあった。

「ポケモンコンテスト・エキシビション 会場：ヨスガシティ、ポケモンコンテストスタジアム 入場料：子供1000円、大人1500円」

他にも簡潔に情報が並び、白黒ながらもきれいに枠を飾るレイアウトが、読み手の注意を引くようにできている。

エキシビションは正午からやるようだ。厳密に言えばアスルの言う大会ではない。

出場する人間とポケモン達はあの世界では名前の売れたものばかりのようだから、彼らの演技を見るだけで価値はあるのかもしい。

それに、この街のポケモンジムのジムリーダーを務めるメリッサも出場するようだ。紫の髪を四つにまとめる奇抜な髪形は今でも忘れていない。

目線を新聞から時計台に移す。あと十分で正午になるようだ。暇だし、おれも行ってみようか。

新聞をバッグに戻し、入れ替わりにサイコソーダのビンを取り出してフタを開け、口をつけながら立ちあがる。

立ち飲みはしちやいけないだよーなんて青い半ズボンに赤いTシャツの男の子がからかってくるが、大人になったらやっつていいんだぜと適当にあしらっておく。

それにあの子供の興味は別のところに向いたようだ。噴水のあたりに空から何かが落ちてきて、それをとりに向かったらしい。

子供が噴水の水たまりに足を突っ込み、急いで退避する。

全身を水にぬらした彼が手に持っていたのは一枚の黒い羽根であった。それも、小さいながらも真珠のようにきらきらと輝く珠がくつついている。

ふと空を見上げる。きれいな青空をバックに、割と低い高度をヤミカラスが間の抜けた高い鳴き声をあげつつ、一人の人物の肩に止まる。

その人物の姿を見れば、身体の細さからして女性らしいことは分かった。

上下を黒のスーツ（下はスカートじゃなくてスラックスだ！）で身を包んでいる。どこの面接に行くんだよと突っ込みたくなる、公園では浮いた格好だ。

女性は黒い羽根を拾った子供をしばらく見つめ、思い出したように歩きだした。

そうだ、おれもそろそろコンテスト会場に行かないと。

ポケセンが左手に見える大通りをしばらく行くと、左手にポケモンコンテスト会場が見える。

背の高いコンクリート（に加工をして黄金色の石らしく見せている）の外壁が円を作り、蓋を閉じるように薄緑色のドームが乗せられている。

その前には石畳の広場が広がっている。そこで有名な歌手がコンサートをやったとしても広さの面では問題がないと思えるくらいの大きさだ。これを囲うように、近くにあるふれあい広場の森が位置している。

前方のポケモン会場からは微かに歓声が響いている。かなり盛り上がっているらしい。

広場で穏やかな時間を過ごすべく集まった人間とポケモンの姿も見える。その中には、公園で見かけた黒スーツの女性も。

この人もコンテスト会場に用があるか、それともゆつくりするために立ち寄ったかのどちらかだろう。

そんなおれの予想は外れた。突如、黒スーツの女性の周りに四人の人間と一匹の黒いポケモンが現れたのだ。

あのポケモンはミオの図書館にて資料で見たことがある。てんたいポケモン、ゴチルゼルだ。

丸い頭部と左右に生えている複数の触覚は、包み紙に包まれたキヤンディを連想させる。ピンク色の顔面と手を持ち、身体には白いリボンの形をしたものがあるが、リボンは触覚だ。

現れた四人の人間も、黒スーツの女性やゴチルゼルと同じように、カジュアルな服装ながらもその色は黒を基調にしている。ご丁寧に黒い布を使って覆面をしている。

一気に怪しさを増したこの集団を見た人々は困惑した様子を見せ

る。それに加えて謎の集団も動きを見せない。

おれは静かにマニユーラとビードルをボールから出す。奴らが愉快なパフォーマンス集団だって捨てられないが、そんな優しいものじゃないはずだ。

広場にピリピリと緊張した空気が走っていく。誰も動かない。おれも動かない。ただただ、コンテスト会場から時折歓声上がるだけだ。

こいつらの目的は何だ？　ここで愉快的パフォーマンスをしたいなら好きだけやればいいじゃないか。ナイフ投げの大道芸なら、おれが頭目的のリングを乗せて立ってやってもいいんだぞ。

そんな冗談すら通じなさそうな連中だ。無言で自分の手持ちのポケモンを出している。

ハガネール、ボスゴドラ、ボーマンダにガブリアス、そしてゴチルゼルか。こいつらも穏やかなことをおっぱじめようって雰囲気もない。

おれが唾を飲み込んだ瞬間、後ろの方で轟音が鳴り響く。振り返ると黒い煙が公園のところから上がっているのが見えた。

公園で爆発。爆弾に火がついたというよりは、何かポケモンの技が炸裂して爆発音がしたというのが正しい。でも、ただのポケモンバトルでああまでなるはずがない。

そこまで考えついて、おれは広場に響く悲鳴を聞く。広場に向かって向き直ると、公園の爆発を合図としたようにあの集団のポケモン達が広場で暴れ回っていた。

ボスゴドラが口から白銀の光線を放ち、ボーマンダも口から火炎を放ってあたりのものをぶち壊し始めた。

爆音とともに石畳が焼けたりはじけ飛び、ベンチが灰になり、広場にいた人々は自分のポケモンと共に我先にと逃げ出していく。

相手は強力なポケモンだ。それが凶暴に暴れ回っているのだから、おれだってこの危険な場所から逃げ出したい。

危険からのがれるために、おれも広場を囲う森に姿を潜ませる。
マニョーラとビーダルもおれの後ろにくっついていてる。

身体が震える。理不尽に展開された破壊活動のせいで、おれの鼓動が否応なしに高まっていく。

ひとしきりの破壊活動が終わった後に女の声が集団から聞こえる。
「さあ、次はコンテスト会場を襲うわよ。全員、ありったけのポケモンを出して襲いなさい」

ラジャ、と短い返答をした四人のカジュアル黒ずくめ集団は残りのポケモンを外に出す。

ビーダルのようにそこらの野生にいるようなポケモンから、ガブリアスのようなあまり目にしないポケモンまでもが、集団を囲うように二十四匹が現れた。

見るものを圧倒させる光景だ。おれだってこんな危険な状況から逃げ出したい。

でも、コンテスト会場にはアスルとメルツェルがいる。何も知らない二人をこんな理不尽な目に遭わせて傷つける訳にはいかない。

奴らは全員コンテスト会場を見ている。おれがこの場に残っていることに気付いていない。

身体の震えが止まる。恐れを、勇気が塗りつぶしていく。

「あなたはここで待機なさい。ヒーロー気取りの甘ちゃんがやってきたら容赦なくぶちのめしなさい」

どうやらあの黒スーツ女はこの集団のリーダーらしい。一人を残してそう言った後、残りの三人を伴い先陣を切ってコンテスト会場に走り込んで行った。

この広場に残された黒カジュアルが一人になるのを待ち、おれは森から飛び出す。

「誰だ！」

黒塗りのデニム地の服に黒いジーンズを着た少年が脅しをかけるように喉を震わせる。彼の後ろにはカイリューとドンファンが凄みを利かせるように立っていた。

「コンテスト会場にはおれの連れがいるんでね。会場をぶち壊すだのなんだの、そういうのは勘弁してくれねえか」

軽口をたたかねえと恐怖にのまれそうになる。勇気を出して奴らに立ち向かうためには自分らしさも必要だ。

「カイリユーははいこうせん、ドンファンはつのでつく攻撃をあのトレーナーにぶつける！」

即座におれは右に駆け出し、はいこうせんの発射音が聞こえると同時に飛びこみ前転をする。

「ごう、とおれの背筋を何者が舐め上げる感覚が走った。自分で自分をほめてやりてえ。なんとつて殺されずに済むからな。」

だが、ドンファンのつのでつくが本命だったらしい。はいこうせんを避けさせてこっちで殺しにかかったか！

「ビーダル、いかりのまえばでドンファンを止めるッ！」

おれの隣にいたビーダルは前歯を光り輝くほどに白くしてドンファンにつきたてようとしたが、ドンファンの急ストップで寸前のところで回避されてしまった。

「さがれビーダル！ マニニューラも来い！」

おれの召集で二匹がおれの前にやってくる。さあ、早いとここいつらをぶっ飛ばしてコンテスト会場に向かうぞ！

「ここは通さん。そういう命令だ」

「知ってるよ。けどなクソガキ、おれ達を相手にしたのは間違いだつたな」

第十二話 突破 シンオウのトレーナー、危機に立ち向かう

黒づくめの集団がコンテスト会場へと駆けていく。奴らは会場前の広場で練り広げた破壊活動と同じことをするに違いない。

会場にはアスルとメルツエルがいる。中にいる警備の連中が怪しい奴ら（ポケモンをそろそろ連れ歩く黒づくめの集団だ！）をシャットアウトするだろうが、荷が重いかもしれねえ。

なら、おれが会場の中に行つて、あいつらを助けねえと！

「中にお友達がいるから助けるのか？ ヒーロー気取りは命を落とすぜ」

挑発のつもりか、黒塗りのデニム地の服と黒いジーンズ、そして黒い布で顔を覆う少年が嘲る調子でふっかけてくる。

「うるせえ、さつさとどかねえと痛い目見るぞ」

おれの前で臨戦態勢に入ったマニニューラとビーダルが一瞬だけおれを見る。

その瞳に怯えは映っていない。この場の全てを任せようとする意志しか見受けられなかった。

分かったよ。おれはジムバッジを七つ持つてるトレーナーだ。こんな状況なんて切り抜けて見せる。

「マニニューラ、カイリニューラにれいとうパンチ。ビーダルはいつものアレだ」

相対する黒づくめのカジユアル野郎に聞こえないように小声で指示を出す。

すぐにマニニューラは両手に氷を集めて姿勢を低くする。何も無い場所から氷を作り出すのも回路のお陰だ。

ビーダルは一つ頷き、目を瞑って姿勢を低くする。よし、これなら何を仕掛けるかは相手は分からねえぞ。

「カイリニューラ、マニニューラに流星群！ ドンファンはタイプEだ！」
やっぱり指示の内容を伏せやがったか。

そりゃそうだ、大事な指示は暗号のようにして取り決めておく
てのはバツジを何枚かもつてりゃ当り前のことだ。

カイリユーが両手を空に向けて突き出して表情を歪ませる。りゅ
うせいぐんを使うとは、こいつも中々に育てられたポケモンらしい。
ガラ空きのカイリユーのどてつ腹に氷の拳を叩きこむべくマニユ
ーラは地を蹴り、瞬時に吸いつくようにカイリユーの懐に入る。

マニユーラのれいとうパンチがカイリユーの腹部に突き立つ。タ
イプ相性を顧みれば大ダメージは間違いない。カイリユーの大きく
開いた目と口、そして悲痛な叫びが証明している。

「くそつ、そこからりゅうせいぐんだ！」

空から飛来する都合十個に及ぶ極小の岩石がマニユーラにぶち当
たった音で何も聞こえない。

おれは左手に持ったボールでマニユーラを戻すべく岩が崩れた場
所に回収光を打ち込み、陽炎めいて姿をゆらゆらさせるビーダルを
見る。

ビーダルに言っていたいつものアレとはかげぶんしんの指示だ。おれ
のビーダルが持つ特性はたんじゅん。能力の変化が起きた時の効果
が普通のポケモンよりも大きい。

その証拠に、かげぶんしんを二回重ねることによって自身の姿を
分身めいて相手に見せる現象がおれのビーダルに起きている。おれ
にも三匹いるビーダルのうちどれが本物か分からない。

「影分身がどうしたってえーっ！ ハツハアー打ち破れ！」

ドンファンは短く跳躍し、衝撃で石畳を噴き上げるほどの着地を
する。

やはりじしんか。カイリユーは満身創痍の体をおして十数メートル
の飛行を始めて難を逃れていた。

じしんは地下に回路動力源を感じする力を発し、感知後に地中か
ら力を解放、攻撃する技だ。その威力は高く、ろくに対策をしてい
なければ受け切ったとしてもダメージは大きい。

ドンファンが着地、じしんを仕掛けてから一つ間をおいて。一匹

のビーダルが石畳の爆発とともに宙を舞い、消えた。

ビーダルの分身は単なる外見上のダミーではない。分身一つ一つに回路動力源の影が内包されているのだ。

「なにくそお！」

「よし、なみのりで奴らを仕留めるぞ！」

ビーダルは短く頷き、目を瞑って再び姿勢を低くした。同じタイミングで分身たちも地に伏せる姿勢をとる。

「カイリユー、続けてりゅうせいぐん！ ドンファンは全力で地震をかませ！」

黒ずくめの少年の指示が飛ぶが、ある程度の距離をとった二つのビーダルの像から本物を探すのは容易ではないはずだ。

指示を受けたカイリユーが再び上空から極小の岩石が都合十個は降り注ぎ、二つのビーダルの像を石畳もろとも吹き飛ばして消滅させた。

ああなれば本物のビーダルにもダメージは通る。石畳が飛び、白煙が立ち昇ってビーダルの姿は見えないが、まだやれるはずだ。

「ビーダル、いけるか!？」

おれの呼び掛けにぐるぐると鳴き声が上がって返ってくると同時に、突如立ち昇った水の柱が白煙を晴らす。

高く上がった水の柱はやがて空中で巨大で平らな水の塊となり、カイリユーとドンファンに向かって慈悲もなく落ちていく。これを回避する手段などない。

水塊はあまりにも巨大で、これが降り注いでいる間は相手側の様子を伺えない。カイリユーとドンファンは地に沈んだか、相手のトレーナーはまだやる気なのか。こんなことも分からない。

ビーダルのなみのり攻撃が止んだ直後、おれはビーダルに短くねぎらいの言葉をかけつつ、右手のボールでビーダルに赤い回収光を打ち込む。

両手に握るボールを小さくしてベルトに吸着させ、大ダメージにより気絶したびしょ濡れのカイリユーとドンファンの間で横たわる

少年を見る。こいつの全身も水で濡れてないところはなかった。

気絶してはいないが、意識は朦朧としているようだ。小さなうめき声が静寂に包まれる広場ではよく聞こえる。

「恨みはねえが眠ってる！」

おれは少年の元に駆け寄り、顔面に右ストレートを叩きこむ。

右手に確かに殴った感覚が走り、少年はぐわっとだけ残して完全に気絶した。

念のために少年のカイリユーとドンファンをボールに回収し、彼のベルトについている小さなモンスターボールも回収する。

計六つの小さなボールを、おれはふれあい広場の森の茂みへと投げた。こうしておけば意識を取り戻しても何もできないだろう。

こんなことをしたおれがまるで悪党のようだと思いつながら、これはコンテスト会場を守るため、ひいてはアスルとメルツエルを助けるために仕方がないと言い聞かせた。

コンテスト会場にまだ異変はない。だが、早く駆け付けねばなにが起こるか分からない。

「待ってるよアスル、メルツエル！ 無事でいてくれ」

おれの叫びを途切れさせたのは、コンテスト会場のドームが割れた耳に痛い金属音だった。あの薄緑色のドームはガラスも使っていないらしい。

いや、ドームをぶち壊したということは、演技中の会場内で奴らが暴れ回ってるってことか！？ 警備の連中は何をやってたんだよ、あっさり突破されてるじゃねえか！

「警備といえど……あのクソ野郎はどうしたんだよ、会社の命令がなきゃこっちに来ねえってのかよ！」

昨日偶然に出会ったアキラに悪態をつきながら、おれは全速力でコンテスト会場へと駆けだした。

第十三話 破壊快楽論 歓声のない幕切れ

たて続けに何か壊れる音と悲鳴が響き渡るコンテスト会場のエントランスに、おれは息を切らしながら飛び込んで行く。

息を整えながら辺りを見回す。近くに黒ずくめの連中がいたらまずい。

センサーもガラスも死んだ五つの自動ドアの横には何かを飾っていたらしい台座がある。

こういうところにポケモンの石像を置いてあるのがお決まりだが、台座の上にそんなものはない。ただあるのは、台座の周りに散らばった大きな石の塊だけだ。

きれいに磨かれたコンクリートの床の上には、天井代わりのドームを構成していた建材が床を砕いて沈黙している。

あの黒ずくめの集団の侵入を抑えられなかった警備員たちは、彼らのポケモンと思しきガーディヤらワンリキーとともに意識を失っている。血を流した様子もなく、死んでいるようではない。

おれは三つあるコンテスト会場のドームへの出入り口を見る。

大きな扉は無残に破壊されて消え失せており、今になって大勢の人々が悲鳴を上げつつ出入り口から湧きでてくる。

混乱した人の流れに飲まれないようにおれは動き、アスルとメルツェルの名を大声で叫ぶ。

だが、逃げ惑う人々があげる、頭に響き身体を引き裂くような悲鳴のせいでおれの声すらも耳に入らない。

アスルとメルツェルの無事を確認して、二人を連れて逃げられたらと考えていたが、この見通しは甘かったようだ。

このおびただしい人の流れの中に二人がいればいいのだが、もしかしたら奴らが暴れ回っているらしきドームの中に取り残されているかもしれない。

しばらくの間は人の流れが途切れることはないだろう。おれは歯噛みしながらこれを見届け、途切れると同時にドームへの出入り口を目指して駆け出した。

ドームの中では、やはり黒づくめの連中がいかついポケモンやかわいらしいポケモンに指示を出し、壁や床などところ構わず破壊させている。

四人のカジュアル黒づくめはドームの外壁を囲うように用意された、かつて観客席だった場所に立っている。観客席に囲われているのももちろん、ポケモンが演技をするフィールドだ。

そこにアスルト、両脚の脛から血を流し横たわるメルツエルがいる。

二人の近くには、黒スーツの女と白色のどでかいドレスに身を包んだ紫髪の女がいた。間違いない。あれはこの街のジムリーダー、メリッサだ。

メリッサはフワライドを外に出し、黒スーツはゴチルゼルを外に出している。メリッサはきつと、ここを破壊している連中を蹴散らすとしたに違いない。

しかし、メリッサの動きを黒スーツが防いでいる、らしい。なら、アスルトとメルツエルはどうしてそこに？

「アスルト！ メルツエル！ こっちに来い！！」

おれは二人に呼び掛けながらビーダルとエテボースをボールから出す。ここも壁が崩れたりポケモンの技がたてる音で満たされてうるさいが、おれの叫びは二人に聞こえたようだった。

「だめだよノブオ！ メルツエルが怪我をしてるの！」

どうやらメルツエルの怪我は見かけ以上に酷いらしい。もしかしたら他にも怪我をしているところがあるのかもしれない。

アスルトとメルツエルも先の人の流れと同じように避難しようとした。が、メルツエルが破壊活動に巻き込まれてしまった。こんなところか。

おれの目的は黒づくめの連中を潰すことじゃなく、アスルとメルツェルの救出だ。

二人が完全にメリツサと黒スーツの戦闘に巻き込まれない内に、素早くここから脱出しなれば！

「ビーダル、エテボース。協力してあの怪我してる女の子をこっちに連れてきてくれ」

短く二匹は返答し、観覧席を進んで演技フィールドへと近づく。観覧席と演技フィールドの垣根はさほど深くはなく、より近くで演技を観られるようになっていた。

それ故に怪我をしたメルツェルはあそこに転がり落ちてしまったのかもしれない。

アスルはメルツェルを助けようとしたが、メリツサと黒スーツの女がそこで戦闘を始めてしまい、観客席のところまで破壊活動も起きているからうかつに動けないのだろう。おれは演技フィールドに近づく二匹の背中を見ながら考えていた。

そこでおれはある疑問を抱いた。黒づくめの四人のカジュアル共はどうしてビーダルとエテボースを攻撃しない？

もっというなら、奴らはこの襲撃に来ているはずだ。なら、アスルとメルツェルを攻撃してもよいはずなのだが、そうするそぶりさえ見せない。

それに、奴らのポケモン共が楽しんでものをぶっ壊してる。笑ってリーフストームを壁に打ちこむロズレイド、無我夢中になって拳を持って床を砕きまくるカイリキー。なん、なんなんだ、こいつら。案の定、ビーダルとエテボースは一切の妨害を受けることなくメルツェルをおれがいる場所まで運んでくる。この様子を見て安心したのか、アスルも一緒についてきていた。

その一方で、演技フィールドの上でフワライドがゴチルゼルに黒紫の巨大な球を発射、直撃をもらったゴチルゼルが吹き飛び、ゆっくりと起き上がるのが見えた。

どうやらメルツェルは弱いながらも意識はあるようだ。アスルは

顔に傷を作ってしまった、目に涙を湛えてメルツェルとおれを交互に見ている。こんな状況だ、泣くなつてという方が無理だ。

おれはビーダルとエテボースをボールに戻しつつ、おれを見つめるアスルに呼び掛ける。

「二人でメルツェルの肩を担いで外に出よう。急ぐぞ」

頷き返すアスルはメルツェルの右肩を担ぐ。おれは左肩を担ぐことにし、急いでこの場を後にした。

荒れ果てたコンテスト会場前広場に逃げ延びたおれ達はメルツェルを床に降ろした。

両の脛の傷の他に、背中にも大きな打撲痕が見える。応急手当はおれ達では出来ない。ならば早く病院に連れて行かねば。

おれはギャロップを収めたモンスターボールを手に取って中身を外に出す。

「走らず、しかし急いでこの女の子を病院に連れて行ってくれ」
ギャロップは喉を鳴らすように高い鳴き声を上げて答える。

おれとアスルで協力してメルツェルの身体をギャロップの背につぶせにし、ギャロップにおれについてくるように言う。

「ちよつと待って！」

何のつもりか、アスルはおれに静止の声をかけてきた。

「なんだ!？」

「まだ中にはメリッサさんがいるのよ、放っておくなんてできないわ！」

そんなの知ったこっちゃねえよ　間違いなく、二年前までのおれならそのセリフを口にしただろう。

今はアスルの言葉に心を揺さぶられている。おれはそういうのを専門に動く仕事の人間じゃないが、コンテスト会場の破壊を止めねばという思いはある。

「じゃあねえ、分かった。病院はポケセンの横の白い建物だ、頼んだぜ」

アスルの肩にぼんと手を置き、会場に向けて駆け出していく。
果たしておれとメリツサの二人で五人もの人間を、それも破壊に
興じている奴らを止められるだろうか　迷うな。やるしかない。

再度コンテスト会場のドーム内に足を踏み入れる。出入り口の所
にまで瓦礫が散らばっていて、こけそうになった。

黒スーツの女とメリツサはいい勝負をしているらしい。黒スーツ
の女はギャロップを、メリツサはゲンガーを繰り返して戦っている。
四人の黒カジュアル共も位置を変えてポケモン達に破壊の指示を
出している。

壁には穴があき、床はさらに抉られて低くなり、ドーム天井は全
壊もいところだ。

おれは大きく息を吸う。ここで必要なのは、奴らの注意を向ける
ことだ！

「……どらああああーっ！！！」

喉が張り裂けそうだ。おれは右手を喉元にあてがい、静かに息を
する。

思惑通り、全ての音が止んだ。壁が崩れる音も、床が崩れる音も、
演技フィールドでのポケモンバトルの音も、何も聞こえない。

沈黙が流れる。このあとおれは、何を言えればいい？

「アナタ……さっきもここにきましたね？」

独特のイントネーションの女の声。これはメリツサのものだ。

これには答えず、おれは黒づくめの連中に言っただけ。かつて、
自分のポケモンを震え上がらせた怒りの表情を浮かべながら。

「おいお前ら。もういいんじゃないか？　もう十分楽しんだらうよ」

「アナタ、一体何を言っただけ」

「もう気は済んだらうが。お縄にかけられねえ内に出てった方が
いいぜ」

四人の黒カジュアル共がおれに敵意の視線を向ける。純白のドレスに身を包んでいるメリツサは少々困惑した様子を見せる中、黒スーツの女だけが笑っていた。

「坊や、最高じゃない！ あはは、てつきり『やめるお前ら』なんて言うかと思っただのに『もう十分楽しんだろうよ』って言われるとは思わなかったわ！」

「さっさと出て行けっつてのは共通しているがな。足の遅いライトニング社の警備部隊だつてそろそろこっちに来るだろ」

「気にかけてくれるのね。それとも、まともによりあつても勝ち目がないつて分かつているのかしら」

「お前らをとつ捕まえて社会貢献でもしようと思っただが、おれは馬鹿じゃねえのさ」

黒スーツの女のおれを覗きこむ。視線を外そうと思つても出来ない。

おれは彼女を睨む。心の中にある怯えを悟られないように。きつく、強く。

「……さーて、その坊やの言うことを聞いときましょう。捕まるのは嫌ですものねー」

ぱんぱんと手を打ち、四人の部下に呼び掛ける黒スーツの女。上の人間が言うことは絶対なのか、おれに敵意の視線を向けていた奴らはポケモンを仕舞って出入り口から出ていく。

と同時にエントランスホールから四人分の悲鳴が上がった。

まさか、ライトニング社の警備部隊が警察の連中がこっちにやってきたとでもいうのか？ にしちゃタイミングが良すぎるうがよくそつたれ、早く来いっつてんだ！

後ろから一人の人間が走ってくる足音。正面に注意を払いながら後ろを向くと、白いスラックスに空色のシャツという出で立ちの少年がいた。アキラだ。

「ライトニング社の者だ。そこまでだ、大人しくして投降しなさい。てめえら、どこで油売ってやがった！」

アキラはパンくずでも見るような目でおれを見つめる。こいつにおれの睨みも怒鳴りも一切効いていない。

「君は黙っていてくれないか。さ、どうする？」

「選択肢はもつと増やしておくど人生楽しくなるわよ、警備少年」

黒スーツの女は右手に持つボールでギャロップに赤い回収光を撃ちこみ回収、左手のボールを空に掲げる。

「シルバー！ さつさとんずらくくわよ！」

「っ！ アナタは逃がさないデスヨ！」

黒スーツの女のボールからはムクホークが現れ、メリツサの指パツチンを合図にゲンガーが自分の身体の前で黒紫色の球体を作り始める。

アキラが血相を変えて演技フィールドへと駆け付け、メリツサのゲンガーが攻撃をしかけるが、黒スーツの女はムクホークの脚に捕まってドームの天井から脱出してしまった。

「……くそっ、あの犯罪者め！！」

「オウ、逃げられてしまいましたネー」

頭に手をやるメリツサ。口調やマイペースな性格がああ仕草から良く分かる。

一方アキラは、観客席の階段を上がりながら額に青筋を立てる様子を見せながら無線で連絡をしていた。

「……了解。ポケモンコンテスト会場近辺の巡回にあたります……破壊快樂論者共が……」

おれの前に立って連絡を切るアキラは、全壊したドームの天井に向けて吐き捨てる。

「また仕事か。ご苦労なことだ」

「無能な部隊長命令さ。彼が指揮を執っていなければ、奴ら全員を抑えて警察に引き渡せたと思うよ。で、君は？」

「あん？」

「どうしてここにいるのかと聞いているんだよ、屑が」

怒り醒め止まぬ様子で問い詰めるアキラ。

こいつの顔を見るとどうしても襟首を掴んで前後に揺らしたくなる。が、それをぐつとこらえ、おれはアキラを睨み返しながら言うてやる。

「連れがここにいた。昨日でめえも見た女の子だよ」

「まさか、助けに来たというのかい？ 屑にしてはとても殊勝な心がけじゃないか」

「ほめてくれるってか、ありがとよ。お陰さまで胸くそ悪い気分だしばらく睨みあい、アキラはため息をついてこの場を去った。

奴の背中が見えなくなるまでおれは睨み続け、表情の緊張を解くとともに舌打ちをする。

「オウ、これはなんでしようネー」

背後からメリツサの声がする。独特のイントネーションと落ち着いた音のある響きの声が否応なくおれのこわばった心をほぐしていく。

「はかいとは、かいらくをうみだす、こついでである？ 字が汚いデスネ、にしても何のことでしょうネー」

メリツサは一枚のメモ紙を手に持ち、その内容を呟いたらしい。

破壊とは快樂を生み出す行為である。頭の中で復唱し、ついさっきアキラが言っていた言葉を思い出す。

破壊快樂論者。ミオの図書館でこれを取り扱った本があった気がする。

明日、あの人に尋ねてみよう。あの人には朝早くじゃないと暇な時間を作れないのは知っている。今日は早く眠っておこう

第十四話 ヨスガシティ滞在三日目 楽しみの前に蒙を啓く

ヨスガシティが襲撃を受けたのはポケモンコンテスト会場だけではなかった。

おれが新聞を読んでいた噴水公園も、この街に拠点を構えるポケモンだいきクラブなる団体の建物も破壊の限りを尽くされていた。捕縛された黒ずくめの連中（彼らは自らをバリバリ団と名乗っていた）が言うには、ヨスガシティの上空に三匹のヤミカラスを飛ばせていたのだという。

三匹はそれぞれ真珠に似せた発信機を持っており、これを無作為にばら撒いた。コンテスト会場以外の襲撃された場所は無作為に選ばれたのだ。

今回現れたバリバリ団は、純粹に破壊を楽しんでいたらしい。破壊活動に巻き込まれた人はともかく、彼らから人やポケモンに危害を加えることはなかったという。

いつもとは趣を異にする白いドレスを着たメリッサとおれは、あの時コンテスト会場のドーム内に居合わせたというだけで警察からの取り調べを受けた。

仕方がないと言えば仕方がないが、おれはともかくとしてメリッサは自分がバリバリ団の活動に一枚噛んでいると思われたのが腹立たしかったのだろう。おれだってそうだ。

取り調べが終わって警察署から出ようとすると、アスルがエントランスホールに用意された黒い椅子に座っていた。

出入り口の自動ドアのガラス越しにきれいな夕焼けが見える。いままでおれを待っていてくれたらしいが、アスルは空に融け込んだ夕日に夢中になっているみたいだ。

「よっ」

「あっ、終わったんだ！」

笑顔で立ちあがっておれの前に駆けてくるアスル。絨毯のような柄は違う種類だが、身体のラインを隠す程にゆったりしたベージュ色の服と同色のロングスカートといった出で立ちは変わらない。

「メルツェルの様子はどうなんだ？」

「怪我の方は大丈夫。意識もちゃんとあるし、明日には退院できると言われたわ」

アスルは出入り口の重いドアを開けて取っ手を持ち、おれが外に出してから手を離れた。

「うーん、やっぱりノブオに警察署って似合うかもしれない」

「ん、何の話だ？」

「だって、ノブオって元がちょっと怖い顔をしてるんだもん」

にこにこしながら言うことじゃねえだろ、それ。

「……勝手に言ってる、くくっ」

だめだ、笑いをこらえられなかった。ホント、こいつおもしろえなあ。

「ねえノブオ。明日、退院祝いでどこかに行こうよ」

「おう。じゃ、言いだしっぺの法則でお前が幹事をやってくれ」

大げさに驚いて動きを止めるアスル。漫画みたいな動きしなくたっていいのに。

「なんでノブオがやってくれないの？」

「午前中は用事があるからさ。ああ、ポケセンの中にガイドマップくらいはあるから。じゃ、頑張ってくれよ」

「んーもう、分かったわ。ばっちり計画を立ててやるんだから」

それからおれとアスルは、ポケセンの食堂で適当に夕食を済ませてからお互いの部屋の前で別れた。

アスルは自分の部屋に入る前、正午に噴水公園で待ち合わせるようにと言ってきた。なるほど、既に計画を練り始めたらしい。

感心しつつ、おれがあてがわれた部屋に入って最初に始めたこと。それはベッドに身を沈めることだ。

眠りに落ちる前に確認した時刻は20時ちょうどを示していた。そんな時間に寝たからか、太陽が昇る前に目覚めてしまう。

いや、これでいい。時刻は5時を迎えようとしている。あの人なら既に出かける支度を始めた頃だろう。

白の制服に身を包んだ清掃員がせつせとエントランスホールの床にモップをかけるなか、白シャツと灰色のスラックスに着替えたおれは壁一面に備え付けられた端末に向けて歩く。

テレビ電話によるやり取りを可能とする計六つの液晶モニタに接続された端末のうち、右から二つ目のものを選んで用意されている丸型の椅子に座る。

シャツのポケットに仕舞っていたトレーナーカードを手にもち、端末のカードリーダーに通す。沈黙を守っていたモニタからぷうんと音がして、カードリーダーからおれのカードが排出された。

この端末はトレーナーカードなどの身分証明証を認証させてからタッチパネルモニタの操作が出来る仕組みになっている。面倒くさいと言えばそれまでだが、こんな造りになっているのだから仕方がない。

「電話帳の……よし、スタンバイアイコンはついているな」

おれはタッチパネルの操作を進め、お目当ての人物に向けて呼び出しをかける。

とうるるるる。

とうるるるる。

とうるるるる。

「……ノブオかね。どうした、こんな時間に」

「こんな時間しか暇を作れない貴方もどうかと思いますよ、ナナカマド博士。おはようございます」

そう。おれが話をしたかった相手はナナカマド博士だ。こんな時間だが、寝起きではない証拠に整頓された部屋を背景に白衣に身を

通している。

一度後ろを振り返る。話をしている相手はポケモンの進化についての研究の権威だ。一介のポケモントレーナーが話をしていい相手ではない。誰であれ、こんな場面を見られる訳にはいかない。

「うむ。……今はどこにいるか、聞かせてくれたまえ」

「ヨスガシテイです」

「ああ、昨日は大変だったろう」

元から少ないしわを刻んだ強面で通ったナナカマド博士だが、その顔がだんだん険しくなる。

もしも誰かがこれを見たら心臓に触られたような感覚を覚えるだろうが、おれはもう慣れた。それに、怖い顔をしているからって表情がその通りの意味を持つとは限らない。

「……うむ、用件は手短に頼む」

「破壊快樂論って聞いたことは？」

「ポケモン学の分野からズレているが、耳に入れたことはある」

液晶モニタ上で難しい顔をしたまま、ナナカマド博士は鋭い調子で口を動かす。そんなのだからお仲間の研究員にビビられるんだ。

ただでさえ怖い顔してるつてのに。

「クロガネとヨスガを襲った連中が破壊快樂論者らしいんです。それで、どんな内容だったかを知りたくて」

「私の友人にそれについて書き著した人物がいる。ケンジ・コバヤシで図書館を探せば、彼の本が見つかるはずだ」

「ケンジ・コバヤシですね。分かりました、ありがとうございます」

数秒頭を下げてから顔を上げ、通話終了のボタンに指を伸ばそうとして

「ノブオ、最近の調子はどうだ。お前も、お前のポケモンも」

「え？」

「今は仲良くやっているのかどうか、聞かせたまえ」

あいかわらず怖い顔をしてこちらを見つめるナナカマド博士。だが、その表情が意味するところをおれは知っている。

「昔とは違いますよ、今は」

「……うむ。嘘つきの目ではないな」

「ありがとうございます。近いうちに顔を出しますので」

「まだ指を動かすでない」

スピーカーから聞こえた言葉には抑止力の欠片もない。だが、おれの身体はぴたりと止まる。

「……いや、詮無きことだ。止めておこう」

一拍おいて、博士の姿と彼の部屋がモニタから消えた。

おれは物心ついてから旅に出るまで、あの部屋をこの目で見ていた。ナナカマド博士に対する淡い憧憬と、アキラと彼につるんでいた奴らへの憎悪を抱きながら。

そのあたりの話をアスルにしなければならぬ。それも、ヨスガシテイを発つ前に。それにメルツェルとの約束でもあるしな。

彼女は今日の10時に退院する予定だとアスルから聞かされたことを思い出す。そういや、退院のお祝いもやるんだったよな。正午に噴水公園か。楽しみだ。

その前に行かなきゃいけないところがある。ヨスガシテイの南にある図書館だ。

おれは小さな肩掛けバッグを携え、見るも無残に破壊された噴水公園の横を通って、独特な外観を持つ目的地の前に立つ。

大きさの違う円柱を下から大きい順に三つ重ねたような外観をしている。

その色合いからバウムクーヘンというお菓子を連想させるからか、出入り口のドアの前にある看板にはバウムクーヘンの絵が描かれていた。

図書館に入ったら、最初にコンピュータを使って本を探すつもりでいた。「著者名：ケンジ・コバヤシ」で検索をかければ一発で出るはずだ。

実際、おれの思惑はあたった。液晶モニタ上に、分類ナンバーと

共に書籍「破壊快樂論 あなたも秘める危険な領域」の画像が表示された。

どす黒い赤をバックに白文字のきちんとしたフォントでタイトルが描かれている。きちんとした学者が書いた本らしい雰囲気はある。分類番号と本の外観を頭に入れ、おれはお目当ての棚を探して図書館内をうろつく。

昨日のこともあつてか、外に人があまり出歩いていないのと同じように館内もがらんとしていた。

建物が小さいこともあつて寂しさは感じないが、もう少し人気は欲しいところだ。

三分も経たない内におれの右手は赤黒い本を手にしてた。それなりの厚みがあり、ばらばらと紙をめくると総ページ数は243であるのが分かった。

まだ時刻は11時にもなっていない。今のうちに少しだけ読み進めてしまおう。

第十五話 休息 甘いものを口に含ませて

人間、ポケモンを問わずに存在するものがある。愛情や友情、信頼 そんな素晴らしいものもあるし、同時に醜いものも持ち合わせている。破壊衝動だ。

生きとし生けるものはみな、破壊欲求と破壊衝動を持ち合わせている。

通常、社会に生きる人間はこれを抑制しており、それが故にこの世界は未法めいてはいないのだ。

ポケモンもまた同じで、競技としてのポケモンバトルにこれのけ口を見いだしていることが多い。

ポケモンを使役する立場にあるトレーナーもまた、戦略や指示を頭の中で巡らせることで破壊衝動を晴らしていることが多い。

故に、世界の平和は保たれている。少なくとも、表面上は。

ヨスガシティの図書館で借りた、ケンジ・コバヤシが書き著した「破壊快樂論 あなたも秘める危険な領域」の前書きを暗唱してみる。

言いたいことは分かる。怒りを抱かない人間などいないし、もつというなら何かを壊したいと思わない人間などいない。

いや、アスルだけは自ら進んで何かを壊したいと思わないイレギユラーかもしれない。そんなことを考えつつ、待ち合わせ場所の噴水公園を目指して歩く。

朝に同じ道を通ったが、こんな大通りでも人氣が少ない。やはり、先日のバリバリ団襲撃事件が尾を引いているようだ。

石畳の一枚もめくれておらず、なにか嫌な予感がするでもないというのに。

思わずため息をついてしまった。外にるのが灰色の作業着を着て修復作業にあたる人間と、破壊された場所を興味津々といった様子で見守る野次馬しかいないというのは、やっぱり寂しいものだ。「どうしてこんなきれいな場所を……バリバリ団とかって人たち、次に会ったら許さないんだから！」

野次馬達の中で、金色の短髪の頭の上にスポミーを乗せた女の子が右脚で地面を強く踏んでいた。正義感の強い子らしい。

その子は腕と脚を隠すほどに裾が長く、透き通った青空を思わせる色合いのワンピースを着ている。白のローファーも良いセンスだと思えた。

「おーっ、言うねえ。それじゃあたしは怪我の分のお返ししちゃうかなっ！」

ワンピース子の隣には、黒の二ソックスにデニム地のホットパンツと白いTシャツといった出で立ちの、黒髪が背のあたりまで伸びた女の子が立っていた。

彼女も白の靴を履いているが、あれはウォーキングシューズだ。活発そうな印象と程よくマッチしてい

「病み上がりの女の子の台詞には聞こえないなあ〜」

「なによ、アスルだっておっかないこと言ってたわよー」

なに？　じゃあ、この子たちは……

「おーい、アスル！　メルツェル！」

大声で呼びかけてみたら、あの二人は素早くこちらを振り返ってきた。やっぱりか。

「あっ、来た来た！」

「ちわーっす。用事はもう終わったんすか？」

「ああ。そんな大したことじゃない。本を借りてきただけだからお互いに歩み寄って言葉を交わし、おれは驚愕した。

メルツェルの右隣にいるアスルの印象が全然違う。

いつもはアナトリアの民族衣装を着ているのに、今日は淡い青のロングワンピースだ。それに、いつもは隠れていた身体のラインが

ある程度分かってしまつて、なんだか恥ずかしくなつた。

森の宿でメルツエルが叫んだことは本当だったんだ。いや、全く肌の露出がないのにどうしておれが恥ずかしがらなきゃならない！

「あれ、ノブオさん、アスルのどこ見て照れてるんですか？」

「は、はあ！？」

「顔に出る人なんすねえ。ちよつと意外かも」

メルツエルがからかうように笑う。アスルも恥ずかしそうに小さく笑うから、おれは踵を返して二人を見ないことにした。こうでもしないと調子が狂つちまう。

「それよりアスル幹事！ 退院パーティーの予定を教えてください」

「うん。ポケモンだいすきクラブの近くにあるレストランでお昼食べに行くよ」

女の子のチョイスするレストランというと、恐らくはがつりしたものは食べられないだろう。でもいいか、今日はそんな調子じゃない。

「うーん、楽しみねっ」

「よしわかつた、それじゃあ行こうぜ」

「ノブオさん、なんで主賓のあたしより声が楽しそうなんすかあ」

メルツエルがちよつぱり不満そうな声を上げる。いや、ちよつど腹も減つてたから良い話を聞いたなつて思っただけだつて。

メルツエルを先頭に、おれとアスルが彼女の後ろをついていく形でヨスガシテイを歩いていく。いまだにアスルの頭の上にスポミーが乗つかっているが、彼女なりの狙いがあるのだろう。

街中でも人気は少なく、平穩そのものの景色の中に圧倒的暴力の痕跡が残されていた。

ポケモンだいすきクラブとかいう団体の建物が建てられていた場所は、今では更地も同然の状態だ。周囲にも破壊活動の影響は出ており、近隣の建物の壁が抉れていたり消えていたり、悲惨な光景はおれの眼を捕らえて離さない。

見ているだけで陰惨な気分になるが、おれが笑えているのは隣で話を続けるアスルのお陰だ。

「このワンピースを選んでくれたのはメルツェルなんだけど、それまでは『アスルは胸元バーンってでてるピンクの服着た方がいいよ！』って言い出したんだから！」

「おいおい、それじゃまるで変態親父のセクハラじゃねーか」

「ノブオさんひどいなあ。あたしはアスルをもっと魅力的にしてあげたいと思ってるんすよ！ いつも色気も何もない服ばかり着て、これじゃいけないって思いませんか？」

「思わねえよ」

「思わないよ」

あ、ハモうちまった。

「ちよっ、なんでそんなところで息合わせるの？ あははっ、おかしくて笑いがとまらっ、へへっ！」

「笑いすぎだつて。ほらほら、そろそろレストランに着くよ。店員さんに変な顔されてもいいの？」

「だめだめ。折角のあたしのパーティーが台無しになっちゃう」

急に凜とした表情を浮かべてこちらを見るメルツェル。だけどまだ口元がびくびくしてる。

視線を横に移すと、木目の床に簡単な木枠で囲いを作っている、そんな広めのバルコニーを備えた建物があった。

清潔感のある木製の建物だ。小さな鈴を取り付けた質素なドア。バルコニーに接続する窓ガラスもきちん磨かれている。アスルはなかなかいいところを選んだようだ。

黒い制服を着た恭しい糸目のウェイターは、丁寧な接客態度で店に入ったおれ達を席へと案内した。

ゆっくりとした口調でメニュー表を差しだし、御用の際にはお申し付け下さいませ、との言葉と三つの水入りコップをのこして恭しく去っていく。

メルツエルが最初にメニュー表に目を通す。厚めの紙に写真を添えたメニューの紹介が添えられているようだ。

「おっ？ このお店はお菓子しか置いてないの？」

「うん。甘いものは好きかなって思ったんだけど、どう？」

メルツエルはメニュー表を木目のテーブルの上に置き、アスルに向けてサムズアップのサインを出す。

「それじゃ、三号のチョコレートホールケーキに決まりっ」

「私はチョコレートパフェにする。ノブオはどうするの？」

「同じのでもいいよ。選ぶのは面倒くさい」

おれにはお菓子の細かい違いなんて分からん。チョコパフェがあるならそれでいい。

アスルはウェイターを呼ぶべく声を張り上げ、やってきたウェイターに注文を告げる。

注文を聞きながらメモを走らせていたウェイターはアスルの口が閉じてから一拍おき、ご会計の際にお持ち下さいと領収証を置いて恭しく持ち場へと去っていった。

品物がやってくるまでアスルとメルツエルは話をするつもりらしい。おれも会話に混ざろうかと思っただが、ガールズトークに首を突っ込むのは野暮というものだ。大人しくあたりを見回すことにする。店内には観葉植物がぼつぼつと置かれており、二匹一組のロゼリアが巡回するように歩いている。ロゼリアのお陰で店内にはアロマ系の良い香りが漂っているようだ。

アスルはロゼリアのペアを見て、頭の上のスボミーを両手に持って胸の高さに持っていく。

「ねえ、いつかロゼリアになれるように頑張ろうねっ」

当のスボミーは鳴き声の一つも返さない、しかし、アスルはこれでも関係はよくなったと語り出す。

「きのうなんて私がスボミーに触ろうとしたら逃げちゃったんだから」

確かに良い関係を、それも思っていたより早く築き上げているよ

うだ。

「まあ、地道に頑張れよ」

「うん。それでね」

話の矛先がメルツェルに戻ったところで、おれは一つだけ気になっていた場所に目を向ける。

店の真ん中のテーブルに金髪の女性が嬉々としてチョコミントアイスクリームを食している。……あの人、どこかで見たような気がする。背中しか見えないから、誰だか分からない。

雑誌を取つてくると二人に断りを入れてから席を立ち、気になる女性の横を通る。

「はーっ、ここいいわあ。リスト入りに決定ねー」

その声におれの足は金縛りにあったように動けなくなってしまう。あの時とは色は違うが灰色のロングコートに、きれいな川の流れるような長い金髪。それにあの声。

「……あら、なにか？」

「ああ、なんでも」

おれの全感覚が鐘をうち鳴らしている。おれが背を向け、顔すら見ようとしないこの女性は、間違いなくおれの恩人だ。

「いや、訂正させてほしい」

「えっ？」

脚に力を入れると金縛りが解けた。この人と顔を合わせるのほども辛いが、いつかはお話がしたいとは思っていた。

右脚を軸にゆっくりバツクターン。眼も鼻も輪郭も、全てがシャープで端正な顔立ちの女性の目を見て、おれはお辞儀をする。

「お久しぶりです、シロナさん。ミヤモト・ノブオです」

「ミヤモト・ノブオ……ああ、久しぶり！」

ここ、シンオウ地方のポケモンリーグのチャンピオンであり、二年前のあの日におれのターニングポイントを作ってくれたシロナさん。まさか、こんな場所で再会できるとは思っていなかった。

「どう？ あれからポケモン達とは良い感じでやってるの？」

「おかげさまで。あの節は本当に、ありがとうございました」

深くお辞儀をする。この人にはいくら頭を下げてもらっても下げきれねえ。あの時に出会わなければ、今のおれは絶対に存在し得ない。恩人の中の恩人だ。

「そんな大げさよ。それより、君に話があるの。時間貰っていいかな」

アスルとメルツェルを見る。二人はとても楽しそうに話を続けていた。

「喜んで。それで、お話というのは？」

シロナさんの向かいのソファアに座りながら尋ねる。

チヨココメントアイスクリームを銀のスプーンで一口だけ口に入れ、幸せそうな顔を浮かべながらシロナさんは続ける。

「きのう、バリバリ団とかいう変な人たちがこの街を襲ったとかいうじゃない」

「ええ」

「それでリーグ協会の方で、景気づけにポケモンバトル大会を開きましようってことになったの。コンテスト会場前の広場を会場として使う予定で、大会告知が明日の朝だったかな。あつ、オフレコでお願いね」

「勿論です。それで　ん、アスル？」

おれの左に空色ロングワンピースを着たアスルがにこにこして立っている。頭の上ではスポミーがゆっくり回っていた。

「ねえ、私たちのチヨコパフェ来たよ」

「わかった。すみませんが、これで失礼します」

シロナさんにお辞儀をして席を立つ。アスルは先に自分のテーブルへと戻っていった。

「そっか。そうそう、メリッサさんね、『ノブオという白シャツの男の子に助けてもらいましたが、あの時にちゃんとお礼できなかつたのがもどかしいデース』だって。今朝の会議が終わった後、あたしにそんなことを教えてくれたんだ」

からからと笑うシロナさん。こんなおれにも、そんな表情を向けるだけの価値はあるってことか？

「それと、ちゃんと反省出来たみたいね」

「えっ？」

「ポケモンに優しく出来ない人間が、人間に優しく出来るわけがないもの。さっきのアスルって女の子、君を見てにこにこしていたわ。そういうものなのだろうか。だけど、おれはまだ奴らに対する憎しみを捨て切れていない。あの時おれはシロナさんに全ての過去を喋ったのだから、この程度のことを見抜かれているだろう。」

「二年前に話してくれた君の夢、ちゃんとした形で叶えられたらいいね。応援してる」

「それ、本気で言ってるんですか？」

「大真面目に言ってるわよ。君が私を倒すの、待ってるから」

やはりからからと笑うシロナさん。その笑いにはおれに対する嘲りも侮りも含まれていない。あるのは見る者に勇気と元気を与えてくれる力だ。

「近いうちに、必ず」

「期待して待つてるわ。それじゃ、またね」

笑顔で小さく手を振ってくれるシロナさん。おれもお辞儀をしてアスル達のテーブルへと戻る。

「ねえノブオ、さっきの人って誰？」

椅子に座るが早いのか、アスルが柄が細く長いスプーンでチョコレートパフェを一口すくいながらこちらを見る。

シロナさんのことは言わない方が良かったろう。明日に発表される大会のこともあるし、なによりシンオウのチャンピオンがこんな所にいると知れ渡ったら大変なことになる。

「知り合いだよ、知り合い」

「へえ、詳しく教えてよ」

詳しく、ねえ。

「近いうちに必ず話すよ。それよりも今は楽しく食事としゃれこも

うぜ」

おれもスプーンを手にパフェのバニラアイスクリームと生クリームをすくい、口に運ぶ。はーっ、美味い。シロナさんがリスト入り
が云々と言っていたのも頷ける。

第十六話 大会前日 準備が十分でないと本番で実力を発揮できない

メルツェルの退院祝いは夜まで続く。これは彼女の祖父が認めてくれたつてのに依るところが多い。

主賓が足に怪我していたこともあり、外を歩き続けることは出来ない。もっぱら屋内で何かして遊んだり、街のベンチに座って休憩がてら談笑などをして、良い雰囲気で時間を過ごせていた。

シメはポケセンのおれの部屋でトランプ遊びに興じることになった。背の小さなポケモンをかわいらしく描いたトランプカード一式をメルツェルが持つていて、最後は皆でババぬきがしたいと彼女が言つと、

「ねえ、ババぬきつてどういう遊びなの？」

青空を思わせる色合いのロングワンピースを着るアスルがおれのベッドの上で足を崩していた。やはり疲れていたか。

メルツェルもおれのベッドの上で座り込んでいる。黒のニーソックスは脛の怪我の痕を隠すためだろうが、デニム地のホットパンツや白のTシャツと合わさり、それ以上にかわいらしさを引き出しているように見えた。

「最初は教えながら通してやろうよ。それでいいっすよね？」

「構わない。最後にジョーカーを持つてたら負けっただけだから、それほど難しくはないぞ」

どこか緊張した、それでいてゆるい笑顔でメルツェルから配られるカードを手取るアスル。

椅子に座つてベッドを向くおれの言葉に軽く頷き、身を乗り出してこちらに手札を見せてきた。おれの手札にもアスルの手札にもジョーカーのヨマワルのカードはない。ジョーカーはメルツェルが持つている。あ、やっぱりメルツェルが嫌そうな顔をしている

「最初に、同じ数字のカードを二枚とつておれ達で困つてる場に捨

てるんだ」

おれもアスルに手札を見せ、その上で5の数字のカードを二枚抜き取ってベッドの上に置いてみせる。

「それが終わったら順番に隣の人のカードを抜き、逆側の人にカードを抜いてもらえばいい」

「うんうん」

「こつやつてやり取りして、同じ数字のカードがそろえば捨ててく。最初に手札を失くした奴が勝ちで、最後までジョーカーを持ってる奴が負けるんだ」

「つてことはメルツエルが一番負けに近いんだね！」

そんなこと分かっても言うなよ。

「ババぬきは最後まで何があるか分からないからババぬきなんだよ。なめられちゃ困るなあ」

メルツエルは手札の数字でペアのカードを捨て、準備が整ったことをアピールするように手札のカードを扇めて動かしている。強がりなのか余裕の表れなのかは分からない。

「それってポケモンバトルみたい。ババぬきが強くなったら、トレーナーとしての腕も上がるかな」

「それはねえよ。ほいよ、おれも準備終わったぜ」

一理ある言葉だが、大きくは頷けない。最後に何が起きるか分からないのがポケモンバトルの面白いところ。つてのは否定しないが、ババぬきのような運絡みのゲームとは勝手が違う。

結論から言ってしまうば、一回目のババぬきはおれが負けた。

メルツエルが先にあがってしまったて、おれとアスルがジョーカーのヨマワルをとりかえっこし続けるはめになり、結果としてアスルが先に二枚のカードを捨てたのである。

苦笑いを浮かべながらベッドの上を集められたカード全てを手に取り、整えてからシャッフルをしてやる。

「もう一度やるうぜ。アスル、いま何時？」

「えーっと、もう十二時になるよ」

アスルは壁がけ時計を指さす。

十二時か。シロナさんが言っていた予定通りならば、そろそろア
ナウンスが来るはずだ。

「悪いけどテレビつけてくれないか」

「いいよー」

軽い調子でアスルは頷き、近くに置いていたりモコンに手を伸ば
す。

ちょうど選局していたチャンネルがニュース番組をやっており、
机の向こうに立つ薄い桜色のスーツを着た女性アナウンサーが「次
のニュースはこちらです」と視聴者に告げる。

画面がスタジオから中継映像に変わる。シロナさんが言っていた
通り、ポケモンコンテスト会場前の広場で会場設営の準備が行われ
ている様子がモニタ上で流れている。

テロップとアナウンサーが、シンオウポケモンリーグ協会がヨス
ガシティ復興支援のためのポケモンバトル大会を二日後に開催する
ことと、本日10時から18時までを大会エントリー期限とするこ
とを告げた。

ほどなくして番組は次のニュースを報道する。先日の襲撃事件で
怪我をした人の退院直後にインタビューした映像が流れていた。

ふと、これを不謹慎だとする声も上がるのではないかと考えてし
まう。

バリバリ団を名乗る暴力組織による凄惨たる破壊活動からしばら
くと経たない内に、景気づけのポケモンバトル大会ときたもんだ。
これに否定的な考えを持つ奴が居てもおかしくはない。そう、アス
ルとメルツェルがこれを喜ぶとは限らない。

どんな顔をしてニュースを見てるんだろう。視線を左に移して二
人を見たが、おれの心配は無用のようだ。

「メルツェル、ノブオ、ポケモンバトル大会だっ！」

「これは絶対出なきゃ！ ノブオさんも出ますよね!？」

「そうだな。そうとなつたらこれでお開きだ」

ベッドの上の二人が不満そうな声を上げる。まあ、分からないでもないが……

「出るからには勝ちたいだろ？」

二人が頷くのを見てから、おれは言葉をまとめるために唸り声を上げ、これをやめた。

「ならおれが指導してやるが、そうなつたらこれ以上の夜更かしなんてできねえぞ」

「じゃあこれでお開きってことっすね。今日は楽しかったっす、ありがとね。お先に失礼しまーす」

メルツェルは軽い動きでベッドから降り、10時にポケセン前で待つてることを楽しそうに告げてさっさ部屋を出て行ってしまった。

「それじゃノブオ、私も寝るね。おやすみ」

ゆっくりとベッドから降りるアスル。おれが返事をするアスルは笑って部屋を出ていった。

早く寝るとは言ったが、おれにはまだやらなきゃいけないことがある。

アスル（と、ついでにメルツェル）のポケモンのトレーニングメニューを考えてやらなきゃいけない。

それと、アスルとメルツェルが捕まえた野生のポケモンのことだが……こんな大きな街ならアレに困ることはないだろう。

「ビデオ観賞会？ ポケモンのトレーニングに付き合ってくれるんじゃないの？」

翌日のポケモンバトル大会についての印刷物を両手に持つアスルが不満そうに言ってきた。昨日とは違って今日はいつも通りのアナトリアの民族衣装だ。こっちの方が見ていて落ち着くな。

「ノブオさん、ホントにきちんとした予定なんですか？」

「そう言うな。こういう前準備が必要なんだよ」

おれは両手にポータブルDVDプレイヤーと、ポケセンの二階にあるポケモンバトルフィールドにおける試合を収録した三つのDVDのパッケージを持っている。流石はポケセン、こういうサービスもすっかりしてる。事前予約で大抵のことはどうにかなるもんだ。

アスルにポケセンのおれの部屋を開けてもらい、手早くDVDプレイヤーを備え付けの液晶テレビに接続する。

深夜に一応の予定をまとめておいてはいる。そのせいで寝不足気味だ。

ヨスガポケモンジムで行われている大会エントリーを済ませたあと、ポケセンのおれの部屋で一本のビデオを観る。そのあとは外に出て特訓だ。改めてベッドの上で脚を崩す二人に教えてやる。

しかし二人は未だに「どうしてビデオを観なければいけないのか」と食い下がってくる。うむむ、こう言ってやれば分かるだろうか？

「アスルはスポミーと、メルツエルはラルトスと観るんだぞ。別にこれ、ビデオを観て何か戦術を学ぼうってわけじゃないんだ」

「それってどういうこと？」

「なあアスル、おれの言いたいことが分からないか？」

アスルはボールから出したスポミーを頭に乗せて頷く。まあ、分からなくてもいい。このビデオを観るのは人間ではなくポケモンだ。「よし、メルツエルもラルトスを出したな」

「ノブオさん、あたしもビデオを観る理由って分からないです」

「んー、このビデオを観る目的は、ポケモンに技の名前と行動を結び付けてもらうことにあるんだ」

膝の上でラルトスに乗せるメルツエルはポンと手をうつ。しかしアスルはコダックのように首をかしげていた。

「そうだな…… スポミーはしびれごなって技を使えるんだが、いまアスルがこれを指示してもそいつは言うことを聞いてくれると思うか？」

「ううん。だって、私のスポミーはしびれごなは使えるかもしれないけど、指示は理解できない。そっか、そういうことね！」

瞳を輝かせて言うほどのことでもねえんだがなあ。まあ、趣旨を理解してくれたようでありがたい。

天井に取り付けられたカメラで撮影された映像と音声のみが液晶テレビから流れている。

アスルとメルツェルはバッジを多く持つトレーナー同士によるハイレベルな戦いを期待していたようだが、おれが用意してもらったのは二人と同じ程度の実力に近い人たちの戦いだ。

深夜の注文で「スポミーとラルトスが映っているものをお願いします」とはお願いしていたが、都合よくスポミー対ラルトスの構図が観られるとは思っていなかった。

その他にもスポミーとラルトスが戦う試合が収録されているようだ。アスルが「今のがやどりぎのタネだよ」などというのを、おれは窓際の椅子に座って「破壊快楽論」を読みながら聞く。

「ねー、スポミーはちゃんと技覚えられたもんね。はい、しびれごな！　なんてねー」

「おっ。いまのがねんりきっていうんだ。ああ駄目だって今は技を使っちゃダメ！」

「ねねねえ、あたたまのううええでしびれごなつかうのやめてて」

二人の様子がおかしいので見てみると、アスルの頭の上でスポミーがねじれたつぼみから黄色の粉を噴き出し、メルツェルのラルトスがひとりでに浮いてそこから辺を漂っていた。

急いでマニョーラを外に出してスポミーを黙らせるように指示し、おれはテレビの前を漂うラルトスをしっかりと両手で捕まえた。

アスルは身体を震わせつつ、氷漬けになってしまったスポミーを見て震えている手で口を押さえている。

すまんとわびを入れながらラルトスをメルツェルに返し、アスル

が震える手でモンスターボールを手にするのを横取りして赤い回収光を氷漬けのスボミーに撃ちこみ、中に仕舞う。

「あああ、ありがたいがとうとう」

「……メルツエル、二人でアスルの肩を担いでエントランスホールまで行くぞ」

アスルの身体の痺れが取れたのは、モンスターボールに仕舞われたスボミーの治療が終わってからしばらくしてからだった。

それからスボミーを軽く叱ったアスルははつとした表情を浮かべる。何かあったかと尋ねると、

「私、スボミーにきちんとした指示の出し方を教えてないわ」

「ああ、そういえばそうだな。なら、外の特訓の時にきちんと教えてやればいい」

アスルは頭が良いかもしれない。言語センスに長けている以外に彼女は気付きが良いかもしれない。きっと、ビデオの件は頭がうまく回らなかったのだろう。

そうこうしながらポケセンを出て、ヨスガシティの西側に位置する207番道路に出るためにこの街のゲートへと向かう。

もう時間は正午を過ぎている。肩がけバッグにはフレンドリッシュヨップで買った塩おにぎりと袋詰めポケモンフーズを入れている。昼飯で困ることはない。

薄緑色の作業着を着た連中とタイプも大きさもてんでばらばらのポケモンたちが噴水公園の修復にあたっていているのを横目に、おれ達は歩き続ける。

まっすぐ行くと図書館へ通じる十字路を右に曲がると、一人のハンチング帽を被った中年男性が道行く人々に何かを配っているのが見えた。

やたらでかい灰色のリュックを背負っているが、ありやなんだ？

どうやらティッシュ配りってわけじゃないようだが

「あ」

「アスル、どうした？」

「明日の大会の参加条件に『参加者はポケモンを三匹手持ちに入れること』だって」

おれに大会のルールだの何だのの概要を記した印刷物を突きつけるアスル。こいつ馬鹿だ。

「あたしは家にもう一匹ポケモンがいるからいいけど……アスル、ちよつとまずいんじゃない？」

「うー、大会本部だって問題があるよ。きちんと参加者のチェックをしたらこんなことにはなあー」

不機嫌そうにため息をつくアスル。うむむ、こんな時にポケモンブリーダーがいればいいんだが。ある程度の強さまでポケモンを育てて誰かに売るってこともやってるはずだし。

「じゃあ、野生ポケモンをもう一匹捕まえる？」

「んー、メルツェルの言うとおり、それしかないかなあ」

そんな会話を続けながらおれ達はゲートに向けて歩きだす。

やはりハンチング帽の、しわの入った人の良さそうな顔をした中年男性　黒の七分にどこにでも売ってそうなジーンズ姿だ　が両手に数枚の厚い紙を持ちながらこちらにやってきた。

「どうも、よろしくお願いしまーす」

害のなさそうな笑みを浮かべる男性が差し出した名刺をおれが三つ取り、アスルとメルツェルに渡す。

ハヤシ・コウジ。カントー地方マサラタウンにある「ポケモンのためのレクリエーション施設『ポケモン広場』」の施設長。ポケモンブリーダー。小さな名刺にこれだけの情報がぎっしり詰まっている。へえーとアスルが呟くように言い、ねえねえと続ける。

「おじさん、ポケモンブリーダーなの？」

「そうだよ。その名刺の建物の宣伝に来てるんだけど、ブリーダーとしての商売も出来る準備はしてるよ」

なるほど、でかいリュックはそのためにあるってわけか。

「それじゃあポケモン一匹売ってもらえないか。この子が明日の大会に出るんだが、一匹足りなくて困ってる」

「えっ？ ポケモンブリーダーってポケモンを売ったりするの？ それって犯罪行為にならない？」

アスルは周りの人間の顔を見比べながらうろたえている。コウジは怒るんじゃないかなんて思ったが、おれの予想は間違っていたどころか笑ってやがる。

「ブリーダーになるにはきついつい試験とかパスしなきゃならないのさ。違法ポケモンハンターと同じにしてもらったら困るなあ」

「う、ごめんなさいっ」

「まあまあ気にしない気にしない。それよりお嬢さん、手持ちのポケモンの種名を言ってくれるかな。オススメのポケモンを選ぶのに必要なんだ」

アスルはすぐに返事をして、コウジはあごに手をやり考え込む仕事草をとる。

「ノブオさん、お金の方は大丈夫なんですかね」

「こつこのなら相場は一万円と決まってはいる。アスルが払えないならおれがかわり」

「いやいや、シンオウに宣伝に来てから初めてのお客さんだからね。サービスするよ」

人の良さそうな笑みを絶やさずにリュックの中に手を突っ込むコウジはそんなことを言う。

「え？ それってタダってこと？」

「そうそう。タダでほら、ヤミカラスをプレゼント」

コウジはリュックの中から抜き取ったモンスターボールをアスルに差し出した。なるほど、このチョイスは良いかもしれない。

スポミーはどくとくさの両タイプを有するポケモンだ。それ故に弱点は多いが、ヤミカラスのタイプはあくどひこつである。うまい具合にカバーできるってわけだ。

「もう指示の初期化は終わらせているからね。覚えている技のことは持たせているお手紙を読めば分かるようになってるよ」

「ありがとう！ でも、指示の初期化ってなに？」

ポケモンが指示と技の名を結び付ける作業で、それをやるのにビデオを見てたんだよ。おれはアスルに簡潔に伝え、アスルはどうやら納得してくれたようだ。

「おっ、兄ちゃん博識だなあ。きっと俺よりもポケモンバトルは上手いんだろ？」

「かもですけど、おれはあなたと比べたら劣る所が沢山あります」

「照れるねえ。ま、兄ちゃんにお嬢ちゃん達。明日の大会はしっかりやれよ！」

コウジはおれ達の肩を少し強めに叩いてから上機嫌で街の方へと歩を進めていった。

「ねえノブオ、あのひと良い人だったね」

「でも商売は下手そうですよー。そう思わないっすか？」

「どちらの意見にも賛成だ。さ、特訓に向かうぞ」

第十七話 瞳に輝きを アナトリアのトレーナー、友と対峙する

曇天の下、ヨスガシティのポロポロに壊されたポケモンコンテスト会場前の広場でポケモンバトル大会が催されている。

参加者を無作為に並べたトーナメント表は円形の広場の外周に四つある掲示板に張り出され、掲示板の後ろにはA、B、C、Dと四つに分けられたグループの参加者の人間がじっと待機していた。

彼らとバトルフィールドの間には観客席が用意されているが、パイプ椅子の数が足りず立ち見をする客も多い。予想以上に盛況している様子を、おれはDブロックの参加者控え区画で眺めていた。

1つのブロックにつき8人の参加者が割り振られており、実力差を考慮するなどの配慮は一切ない。正しくは、お祭り気分を楽しむための大会だからそんな配慮がいらぬ。

参加者控え区画にはそこそこ大きなモニタが用意されているから、分厚い観客席の層で試合の様子が見えなくてもモニタを見て俯瞰視点で把握出来る。

それにしても、これだけ大勢いると歓声や応援がある種の騒音になっってしまうている。少し黙っつけ。

今はCブロックの試合が始まるころだ。ちょうどモニタ上ではアスルとメルツェルが相対している。よりによってあの二人がぶつかるか。

アスルはやはりいつもの服装が落ち着くのか、唐草模様のゆったりとしたアナトリアの民族衣装を着ている。頭には白い布をゆったりと巻きつけている。

メルツェルもデニム地のホットパンツに黒のニソックスと黒のTシャツ。いつもと変わらない格好だった。

「どうも、審判兼司会実況のマエダです。赤コーナーの一風変わった服装の選手と青コーナーの快活そうな選手が舞台の中央で握手を

交わりました。笑顔の握手は見ていて気持ちがいいですねー」

マイクで増幅されたマエダと名乗る男（健忘症なのか、試合が始まることに自己紹介をしている）の声が、観客席の騒音を塗りつぶすように聞こえた。

モニタ上に映し出されるアスルとメルツェルは互いに踵を返してバトルフィールドの端まで歩き、勢いよく振り返る。二人の手には格納状態から放出準備状態へと形を大きくしたモンスターボールが握られている。

「両選手ボールを両手で構え……同時に投げる！ 赤コーナーはヤミカラス、青コーナーはウソハチだ！」

すぐにモニタ上の二人の口と身体に動きが見られ、その直後に二匹のポケモン共に動きを見せる。

先日、中年ポケモンブリーダーのコウジから譲り受けたヤミカラスは、羽ばたいて稼いでいた高度を捨ててウソハチへと急接近する。

黒い体毛と羽に包まれた小さな身体が一条の曲線を描き、その横両端が穏やかな青色を帯びて敵に迫る一方で、ウソハチは盆栽めいた身体から伸びる小さな脚を地面に埋めていた。

「ヤミカラス、つばさでうつつ攻撃です！ ああつと吹き飛ぶウソハチ、カウンター気味に地面から石畳を引き抜いてヤミカラスに当たあー！」

あれは通常攻撃じゃない。いわおとしという立派なポケモンの技の一つだ。

昔は小さな岩を投げつける攻撃なんて認識をされていたらしいが、これはポケモン自身の体内で構築された回路を岩に接続して破壊力を向上させたそれをぶつける技だ。現にただの石畳がヤミカラスに命中した途端に爆発してやがる。

「あーつとヤミカラス墜落！ ふらふら立ち上がるが力が入っていない！ ウソハチも当たり所が悪かったか、痛みを隠し切れていません！ 解説のシミズさん、この流れをどう分析しますか？」

「初手でヤミカラスを戻さなかった赤の判断は良いと思います。青

の初手がいわおとしてであるのは今となつてですがはつきりしている
ので、赤の二番目のポケモンに狙い撃ちすることは出来たでしょう」
「なるほど」

「ただ、ヤミカラスですからね。両者がどこまで育てられているか
は分かりませんが、ウソハチの物理防御能力は高いです。ヤミカラ
スには不得手な相手であることには変わりません」

「しかし、赤コーナーの選手もヤミカラスも諦めていないようです。
この勝負は目が離せませんね！」

そうですねえ、と実況のシミズと呼ばれた低い女性の声が続く。
多くの人間がヤミカラス対ウソハチのカードを見ればウソハチに
軍配が上がるだろうと見当をつけるだろう。おれだつてそうする。

ただ、モニタ上のメルツェルに余裕は見られない。それはそうだ
おれもどうしてあんなヤミカラスの個体をコウジはアスルに譲つた
のかと気になつて仕方がない。

昨日の特訓のなかでアスルに言つてやつた言葉を思い出す。

ヤミカラス及びドンカラスを物理攻撃に特化させるトレーナーは
多い。そこで意表を突くように訓練を積んだヤミカラスを使えたら
面白そうじゃないか？ それに、きつかけはお前が握っている

あの言葉をアスルは覚えているだろうか？ ついでにおれが続けた

「コウジは経営者には向いてない」という言葉も？

「ヤミカラス、満身創痍の身体をおしてはばたきます。そしてこれ、
赤い目を光らせているうー！？」

実況の驚愕に満ちた叫びと共にウソハチの身体が持ち上がったとい
く。

ウソハチ種に浮遊能力などあるはずもなく、痛そうに何かを叫ん
でいるらしい様子から技をかけられているのは誰でも容易に察しが
つく。

「これはサイコネシスか！？ シミズさん、これは一体どういう
ことでしょう！？」

「赤の選手はヤミカラスに二種の攻撃に特化させていますね。最初

からこれで攻めればよかったです。赤の選手は未熟なのでしよう」

アスルには悪いがそのとおりだ。それに、知らなければウソハチとこれの進化形であるウソツキーのタイプを草であると勘違いする奴だって少なくない。

「青のウソハチだって勝負がついたわけでは――」

「あぁっと！ ヤミカラスが大きく羽ばたくと同時にウソハチが勢い良く地面にたたきつけられたあつ！」

「あぁ、まずいかもありません」

解説が言つたとおり、ウソハチはふるふるえて立ちあがろうとしてそれが出来ないでいた。

「青のウソハチ、戦闘不能ーッ！ 青コーナーの選手はポケモンの交代をして下さい！」

実況の言葉半分にモニタ上のメルツェルはウソハチに赤い回収光を撃ちこみ、これと同時にもう片方の手で二匹目のポケモンを繰り出す。白い光に包まれ、これが霧散する。

「青コーナー、パチリスを繰り―― おお、目にもとまらぬ突進攻撃！ でんこうせっかだぁーっ！！」

パチリスの姿はヤミカラスにぶつかってから確認でき、少し吹き飛ばされたヤミカラスは立ち上がることにすら出来ていない。

「あー、これでヤミカラスもダウンですねー」

「赤コーナー、立ち上がれないヤミカラスをボールに仕舞いまして…… 次に出したポケモンはスボミーだ！」

頬に小さく黄色い電気袋を有し、青の縦縞模様が入った大きな尻尾が特徴の小さなポケモン。これがパチリスだ。

とてもすばしっこく、恐らくはヤミカラスでもこれより速く動いたり回路を構築したりということは出来ないだろう。スボミーを使うならばなおのことであり、後手に回るのは覚悟しなければならぬ。

「シミズさん、これは赤コーナーが不利ではないですか？」

「そうですね。しかし戦略次第で勝敗の行方が分からなくなるのがポケモンバトルの醍醐味です」

「わたしもそう思いま　　おおっと、パチリスが電撃を纏って突撃！　スパークだーっ！」

タイプ相性を顧みればメルツェルの判断は間違っている。だが、スポミーの物理防御能力の低さにつけ込んでの判断だと考えれば辻褄は合う。他に狙いもあるかもしれない。

「スポミー避けられずに赤コーナーの選手の元に吹き飛ばされ、お、吹き飛ばされながら頭のつぼみを開いて黄色い粉を出しています！　しびれごなです！　散布された粉が対処の遅れたパチリスにまわりつきましたーっ！！」

「しびれごな命中しましたねー。麻痺状態となったポケモンは機動力がガタ落ちですし身動きが取れないこともありますから、青コーナーはやりにくいでしょう」

メルツェルのパチリスのスパークも、アスルがスポミーに指示選択したしびれごなも、観客達を湧かせるには十分なようだった。

あまりレベルが高くないポケモンを用いた試合でも、こうして人々に元気を与えることが出来る。これこそがこの大会の狙いだ。どこかで待機しているシロナさんはこの様子を見てきつとにこにこしているに違いない。

「スポミーの身体が緑色に発光し、パチリスの身体から白い光球が現れてスポミーの身体に入っていきます！　青コーナーの選手が指示を出していますが、パチリスは動けないようです！」

「あれはメガドレインですね。スパークで失った体力を敵から吸い上げる。理にかなった選択です」

「一方パチリスは麻痺による身体の痺れで動けないようです！　苦しそうに歯を食いしばってますー！！」

観客席からはスポミーとパチリスの両方を応援する声が響いている。俺の周りにいる控えの選手だって面白そうにモニタを注視している。

この場にいる全員が瞳に輝きを宿している　そう考えると、なんだか良い気分になった。

「しかしパチリスも黙ってやられているばかりではありません！ 青コーナーの懸命な応援と指示でパチリス、メガドレインの攻撃の切れ目を見計らって立ち上がりい！　でんこうせっかでスポミーに突撃いいーっ！」

「ええ。麻痺状態による機動力低下を打破する最善にして唯一の方法ですね」

パチリスのでんこうせっかが本調子でないにしろ、スポミーにダメージを与えていることは確かだ。

しかしスポミーもやられているばかりじゃない。時々動きを止めるパチリスにメガドレインを仕掛けて攻撃と回復を図っている。

「おおお押しつ押されつの大接戦が続いています！　あぁーっ！　三度目のでんこうせっかを仕掛けたパチリスが倒れこんでしまった！　そしてスポミーも身体を横たえています！　引き分けです！」
「お互いに全力を尽くした戦いでしたね。見ているもマエダさんのような熱気が自分の中でも湧きあがりました」

二匹とも相当な負けず嫌いらしい。そうでなければこんな結果にはならないだろう。

アスルもメルツェルも傷つき倒れた互いのパートナーに回収光を撃ちこみ、最後の一匹を収めたボールを手にとって構えた。

次のカードはコダック対ペラップになる。昨日の特訓を見る限りでは両者の実力は拮抗していた。頭が割れそうなくらいの歓声と熱気の中で、実況と解説の二人以上にこのことを確信する。

「赤コーナーはコダック、青コーナーはペラップを繰り出しました。シミズさん、この二匹の勝負で勝敗がわかりますがどう読みますか？」
「分からないですね。トレーナーの判断力とポケモンの実力は拮抗しているようですし、どちらに軍配があがってもおかしくはありません」

だが、先に攻撃を仕掛けるべく動いたのはペラップだ。先手必勝

という言葉がある。先に動き、敵にダメージを与えられれば優位に立てる。

対するコダックは頭を両手に当てて接近する敵を見つめている。あれだつて立派な戦闘態勢なのに間抜けそうに見えるのが惜しい。

「ノオーリズム！！ ノオーライフツ！！！」

この状況でマイクの類を使わずに響き渡る人間の声。いや、モニタを見ればペラッパが近距離でおしゃべりをかましているのが分かった。

「うおおっ！？ これは凄い音量です！ 耳がいた ああっ、コダックが右手を頭から離してペラッパに向きました！ するとペラッパの声が……聞きとれない!?」

「あれはかなしばりですね。ペラッパはしばらくの間得意とするおしゃべりを使えません。それにしても赤の選手とコダックの仲は良好ですね。ダメージを受けながら補助技を仕掛けさせるのは見事です。指示を聞かせないといけないハードルは高いはずですよ」

「なるほど。さあ、コダックはダメージを負いましたがペラッパも大きな障害を抱えています！ ああつとペラッパのくちばしが薄い青に染まる！ これはつつく攻撃だーっ！」

おしゃべりに比べると威力は大きく落ち込む技だが、現状あのペラッパが覚えていそうな技の中ではこれが最善の選択だろう。

アスルの指示を受けたコダックは、ペラッパの攻撃を受けつつ口から高初速のみずでっぽうを繰り出して反撃するはずだ。

「コダックが後ろに跳んで距離を離すがペラッパのくちばしが頭にあたっ、いやなんと攻撃を受けて吹き飛ばされたコダックがみずでっぽうで反撃しています！」

「いまのコダックのアドリブは良いですね。つつくのダメージを僅かでも減らそうとしつつ、攻撃を確実に当てるためのバクステ。将来きつと良いポケモンに育ちます」

落ち着いた解説の声が終わる頃に吹き飛ばされたコダックが石畳を転がり、しかしなかなか立ち上がれない様子を見せる。まさか、

いまの当たり所が悪くて大ダメージを受けてしまったのだろうか。
「コダック、なかなか立ち上がれませんか！ おっと赤コーナーの選
手がモンスターボールを取り出し、回収光を当てました。これは…
…降参です！ 赤コーナー、降参しました！」

「どうもあのコダックは戦闘を続行できるようではありませんでし
たからねー。無理もありません。しかし良い試合を見せて頂きまし
たねえマエダさん」

「そうですねー。今の試合は実況の立場を忘れて興奮しすぎてしま
いましたねえ……両コーナーの選手、ポケモンを仕舞ってバトルフ
ールドの中央で向かいあい、しっかりと握手をしました」

モニタ上でも分かるくらいにアスルとメルツェルは笑っている。
多くの観客達は口笛を吹いたり、歓声を上げてこの試合の終わりを
称えていた。

そう、これがポケモンバトルのあるべき姿だ。全力でぶつかりあ
って、最後は気持ちよく握手をする。決して汚い憎しみにまみれた
誰かの目的を達成するための手段ではない。

おれは笑う。アスルとメルツェルと彼女達のポケモンの健闘を称
えるために、そして自らを嘲るために。

第十八話 決闘 意思と意地の衝突

あつという間に時間が過ぎていく。熱い太陽は西に傾き始め、各ブロックの選手が一人ずつ決勝トーナメントへと進出していった。

もちろん、Dブロック代表としておれもこれに参加した。

どこの会社の面接に行くんだよと突っ込みたくなるような白いスーツに白スカートの少女がAブロック代表だった。これを下すのに手間がかかったことに、今でも心臓がばくばくいつてる。

彼女の手持ちの中で一番驚いたのはジャローダだ。

イツシュ地方にのみ生息するというあれを手持ちに加えているというのでも驚いたが、それ以上によくよく育てられていることに戦慄を覚えてしまった。

ジャローダ種の特徴は並大抵のポケモンよりも素早く動き技を使用する回路を構築するスピードも速いことと、二種の防御能力が高いことが挙げられる。あのトレーナーはそこを重点的に鍛え上げたようだった。

それとあのへびにらみって技が厄介すぎる。

しびれごなと同じで対象を麻痺状態にするのだが、あれとは違って命中率が高い。でんじは並みの命中率こそないが、草タイプの技だから融通が効きやすいのが恐ろしい。

とにかく下手を打っていたら負けてしまっただろう相手だったことは間違いない。

そして今から対戦する相手も全く気が抜けない相手であることのために息をつく。アキラ。おれが憎み、奴もおれを嫌う、逆の意味で気の合う奴だ。

奴はライトニング社の警備部隊で働いていたはずだ。それがどうして白スーツの上下に赤いネクタイなんてアホみたいな恰好をしてここにいる？ この会場もライトニング社の協力で警備されている

のに？

「いよいよ今大会の決勝戦です！ 赤コーナーにはAブロックからタカナシ・アキラ選手が、青コーナーにはDブロックからミヤモト・ノブオ選手がやってきましたあ！！」

観客たちの歓声と口笛に耳を痛めながらバトルフィールドに立つ。実況のマエダの声はここでも聞こえるのか。

これまで激しいポケモンバトルの戦場となったこの広場の石畳はボロボロになっちまってる。復興の手間が増えているが、気にしないことにしよう。おれには関係のないことだ。

「なんでお前がここにいるんだよ。仕事はどーした、仕事は」

「仕事？ 今やっているじゃないか」

「なに言ってるんだお前、頭おかしいんじゃないのか」

「君は屑でもトレーナーとしては一流に限りなく近いというのは認めてるよ。だから有休を取って潰さなくてはね。僕に勝てなければ上なんて目指せないのだから……いや、屑がそんなことを考えるってのがおかしいってことを教えてやるよ」

どうもこいつはおれがトレーナーをやっているのをぶち壊したいらしい。ずっとぶれないスタンス。直立不動の石像。

「うるせえ。下手に髪を染めやがって、似合わねえんだよボケ」

早まる鼓動を左手で抑えつけながらアキラの元に歩み寄る。別に殴ろつってんじゃない。試合の前の握手や挨拶は基本だ。

「青コーナー、ノブオ選手がアキラ選手へすたすた近づああ！ 赤コーナーのアキラ選手が差し出された手を払いのけましたあ！！」

「ってえ、何のつもりだ！？」

「屑に触られたくはない。早く戻りなよ、僕はさっさと終わらせたいんだ」

「……クソ野郎が」

自分でも耳に痛いぐらいの齒軋りをたてて踵を返し、所定の位置に戻る。

「さあ決勝戦が始まるところですがルール変更のお知らせです。今

大会の終了予定時刻から大幅に遅延しているため、大会運営本部は決勝戦で使用するポケモンを一匹のみとするようにとのことでした。

ポケモンを一匹しか出せないってことは……くそっ、どいつを出せばいい？ どいつを出せばアキラを破れる？ 頼むから黙っててくれ、考えがまとまらねえ！

「ルールが急ぎよ変更となった訳ですが、解説のシミズさん、これをどうとらえますか？」

「一対一ルールは至って単純です。出したポケモン次第で決着は簡単につきますからね。エスパータイプとあくタイプのポケモンが戦うとなるとよほどのことが無い限りはあくタイプのポケモンが勝ちます」

「うーん」

「しかし決勝戦ですからね。両選手とも観察眼やポケモンの訓練の徹底は拮抗しているでしょうし、手持ちのポケモンのレベルも同じくらいに高いはずです。タイプ相性や固定観念だけでは終わらない試合が見られるのではないでしょうか」

「なるほど。では試合開始のカウントダウンをさせて頂きます。両選手は一つだけモンスターボールを手に持って下さい」

一つ深呼吸。目を瞑って思考を巡らせる。幼い頃から奴はどのポケモンを使っていた？ おれだったら一番信頼のおける奴を選抜する。きつと奴もそうする。

目を開ける。少々遠く離れた場所でウェーブのかかった金髪を風に揺らしながらアキラは不敵に笑っていた。あいかわらず周りはいづるさ。い。

「頼むぞ。あいつの顔から血の気を引かせてやれ」

腰のベルトからモンスターボールをつまみ取り、放出準備状態に膨らませる。

「両選手がボールを持ちました。それではカウントダウンの後にボールを投げて下さい。スリー、ツー、ワン」

全神経をバトルフィールドに向ける。五感が捉える世界が洗練さ

れて見える、気がした。

「 決勝戦、スタートツ！！」

実況のマエダが言うより先におれの右腕はボールを投げていた。石畳にあたってバウンド、ボールから白い光が溢れ出て、戻ってくるボールをキャッチする。

黒い身体に赤い尾と頭の飾りの対比が印象的な、体長一メートルと少しの小柄なポケモン。これがおれの一番のパートナーのマニユーラだ。

アキラが出したポケモンはルカリオだ。ほぼ人間に近い体型をしてはいるが、青い尾と手の甲と胸に白いトゲを生やし、後頭部を持つ四つの房が風に揺られている。体長はマニユーラより少し高い程度。

「赤コーナーはルカリオ、青コーナーはマニユーラです！ これは青コーナーにとって最悪の状況です！」

「しかし青コーナーの選手もポケモンもこれまでの試合で目覚ましい活躍を続けています。これは要チェックですよ」

アキラが何かを叫ぶのが見え、すぐにルカリオは胸の前で両手をあわせる。もつと意識を尖らせないとこのうるさい環境じゃ何言ってるか分からねえが、十中八九あの技を使うに違いない。

「シャドークロー、レディ」

伸ばす舌きはマニユーラの耳に入ったらしく、赤い尾を右に振って返事を返す。マニユーラの両手にある凶悪なまでに鋭利な爪は白いままだ。

周りにより一層歓声や口笛でうるさくなっている。マニユーラの優れた聴覚が仇になるかもしれないが、あいつの集中力なら問題は無い。

「ルカリオがはどうだんを溜める一方でマニユーラは構えを取ったまま動きません。ああ！ ルカリオの胸の前からはどうだんがシューッ！！」

バスケットボール大の大きさの蒼い光球がスポーツカーも驚くス

ピードでマニニューラめがけて飛んでくる。

「 アクティベート」

マニニューラは赤い尾を左に振りながら前に突っ込んでいく。当たれば一撃で沈んでしまうであろう蒼い光球に。

「マニニューラまさかの自滅行為かあッ!? いや、これは、はどうだんがふつとかき消えましたあ!」

「あれはシャドークローですね。ゴーストタイプのポケモンにかくとうタイプの攻撃は効果がありません。その応用ですが、攻撃の無力化はとても難しいテクニクです。あのマニニューラはかなり鍛えられていますよ」

はどうだんを無力化したマニニューラはゆらゆらと両腕を小さく振りつつ、ルカリオとの距離を歩いて詰めていく。尻尾はまつすぐ。指示待ち状態だ。

「インファイトで迎撃だ! 一気に決めるよ!」

珍しくアキラが大きな声を出して指示を出し、ルカリオの全身から橙色の霧が多く噴き出していく。

「スイッチ、アプローチ」

マニニューラの尻尾が一往復、爪の色が消えた代わりに腕に氷を纏い、ルカリオに向かって全速で走り出す。次の指示を出すまで、さん、にい、いち、

「フローズングラウンド、アクティベート」

「マニニューラが軽く跳躍してれいとうパンチを床に叩きつ ああ

っ! 石畳が凍ってルカリオに伸びていきます!! 氷の床がルカリオの脚を固定! 行動不能においこんだっ!!」

「これはアプリケーションアーツですか。まさかこのレベルのポケモンが使えるとは……驚きました」

構想五日、使用訓練に半年もかけた、シロナさんに挑むための隠し玉。時が来るまでは使いたくはなかったが、こいつには負けられねえ!

「アプリケーションというと、応用技ですね?」

「そうですね！ 多くのトレーナーはポケモンに習得させるのが難しいですし暴力的火力を実現できるものが少ないためにAAは敬遠するのですが、青コーナーのペアはチャレンジャーですね」
AAとは、シンプルかつ強力なポケモンの技を人間が応用を効かせてポケモンに教えこむ技だ。

おれのマニユーラのAAであるフローズングラウンドは対象となる敵一匹の行動を僅かな時間だけ止めるものだ。

AAは慣れてしまえば普通の技を使う感覚で放てるようになるらしいが、それでも使用出来る回数は少ない。一度の戦闘で使えるのは一回程度だ。

「ルカリオが両手の甲の棘を変化させて素早く足元の氷を砕いて自由を取り戻しましたがマニユーラが突っ込む！」

「あれはけたぐりですね。重量がある種が多いはがねタイプのポケモン対策といったところでしょう」

「ああーっ！！ ルカリオ吹き飛ばされました！ マニユーラがれいとうパンチを用意して追い打ちをかけるー！！」

このまま一気に仕留めるよ、マニユーラ！

「しかしルカリオもメタルクローで応戦だ！ 繰り出されるマニユーラのれいとうパンチを爪で防ぎ、隙あらば攻撃する構えです！」

「このルカリオも相当鍛えられています。並みのルカリオではけたぐりを貰えばしばらく動かなくなるものですが、一方的な防戦に陥っておりません。しかしセオリーを崩すという意味ではマニユーラが一枚上手でしょうか」

「しかし妙ですね。この状況ならマニユーラの腕の氷が削げて無くなるはずですが、マニユーラの氷はどんどん膨らんでいます」

ふむうと解説が唸る。もしもこの仕組みを見破られでもしたらアドバンテージを握るのは難しい。頼むから誰も気付くなよ。

「あぁっとルカリオが後ろに飛んで距離をとる！ マニユーラがこれを追いかけ、あぁ！ メタルクローで裂かれて飛ばされました！」

「マニユーラはどんな攻撃を受けても致命的ですからね、ここから赤コーナーの反撃が期待できます」

追撃に素早く大人の握りこぶし大のはどうだんを放つルカリオ。マニユーラはシャドークローでこれを無効化したが、続けざまにルカリオのメタルクローをくらっておれのところまで吹き飛んできた。「やれるか？」

いま必要な言葉はこいつを気にかけることじゃない。マニユーラは小さく頷き返し、震える体をおして立ち上がる。そうだ、まだ倒れるな。おれだってこんな酷なことを言いたくはないんだ。

遠くを見ればアキラが腹を抱えて笑っている。奴からみれば憎い奴らを倒せる一歩手前なのだ、無理はない。

「次で終わらせるぞ。けたぐり、レディ」

マニユーラの姿勢に力が入る。こいつもあのルカリオも体力の限界は近いはずだ。それにこいつには命の珠を持たせている。活動限界もそろそろだ、これで終わらせよう。

「ルカリオ、マニユーラの変幻な攻撃とけたぐりの一発が効いてか見るからに大きなダメージを負っています」

「マニユーラも同じですよ。メタルクローを二度くらっているのに立てているのが不思議なくらいです。どちらも気合でこの試合に臨んでいます」

ルカリオの身体は橙色の霧に覆われている。防御能力を落とす代わりに、すさまじい威力を誇る格闘タイプ依存物理攻撃をかますインファイト状態だ。間違いなく、近づけばやられる。

「いや、マニユーラ。キャンセルアンドスイッチ。アドリブ、ターンオーバー」

こういうピンチの多くはマニユーラが自分で考えて切り抜けてくれた。今のおれに打てる最良の手は、マニユーラのセンスに全てを賭けることだ。ははっ、これじゃトレーナー失格じゃねえか。

「おおっと、ルカリオ駆け出しました!!! マニユーラも立ち向かうように走り出します!!! これはルカリオが勝つかーっ!?!」

衝突までカウントツのところでマニユーラの姿が一瞬だけ見えなくなった。すぐにルカリオの後ろで姿勢を低くしているのが見えて、よく見れば爪が淀んだ黒に染まっている。

一瞬遅れてルカリオの白い体毛の覆われた胴体からしゅつと鮮血が迸る。つじぎりだ、つじぎりがうまいこと当たったんだ。

「いまマニユーラの姿が消えたような……ああ、再び消えました！シミズさん、これは!？」

「つじぎりです。インファイトの構えをとったルカリオを警戒して、敢えてタイプ相性を無視してマニユーラが最も得意とする技を振ったでしょう。それにどうやらけたぐりで攻撃した部位を狙っているようです。ルカリオの顔色が険しいですね」

もう一度つじぎりをかましておれの下に戻ってくるマニユーラ。その顔色はルカリオと同じものように見えた。まさか、あのルカリオも

「ルカリオ、はどうだんだ!！」

やはり短い時間で握りこぶし大の蒼い球体を生み出している。もう少しチャージに時間がかかる技だと認識していたが、これではつきりした。奴も命の珠をルカリオに持たせているのだ!

「マニユーラ、何も抵抗せずにはどうだん直撃!?! 吹き飛び倒れたマニユーラの様子を見て、この試合は赤コーナーの勝ちとします!！」

わつと湧き上がる歓声。拍手。賞賛の嵐。

おれに向けられていないこれらを聞き流しつつ、傷つき倒れたマニユーラを抱える。ああ、頭の怪我から血イ流してるじゃねえか。

マニユーラを仕舞ったおれはバトルフィールドの中央に歩き、既にルカリオをポールに戻したアキラも満足そうに大笑いしながらこちらにやってきた。

「それなりにやったみたいだけど、やはり屑は屑だね。へっへっへへ」

もとよりタイプ相性で馬鹿みたいに差をつけた奴の言葉じゃねえ

だろ。おれはぐつとこらえて右手を差し出す。

「いい試合だった。最後はさすががしく終わらせたい」

「はああ！？　なんで屑と握手しなきゃいけないんだい？　頭大丈夫かなあ？」

こいつの試合に臨む態度は、奴の実力を大きく下回るアスルヤメルツエルに劣る。ポケモンバトルは何かを壊すためにやるんじゃない。何かを生み出すためにやるものはずだ。

いいところで働いてる奴の吐くセリフとは思えない。こいつはおれの両親の事情を理由に屑呼ばわりしているが、その考え方がおかしいということに何故気付かない。

「……てめえは本当に腹が立つ奴だぜ」

踵を返す。これ以上こいつのツラを見ていると殴ってしまいそうだ。

周りをざつと見ると、観客達はおれ達の様子にざわめきを見せているようだ。なんつったってなあ、決勝戦の終わりが穏やかじゃないうつたらアレだろう。

視界の右端で動きが見える。目をやると、まるでモーゼの海割りのように観客層に道が出来上がっていた。

「凄いものを見ちゃったな。お疲れさま！」

突如出来上がった道から現れたのは、黒コートに全身を覆い隠したシロナさんだった。

「さて司会進行させていただきます。優勝者は賞状をシンオウ地方ポケモンリーグチャンピオンであるシロナさんから受け取ることになっておりますが……シロナさん、聞こえますか？」

聞こえますよー、とシロナさんが手に持っていたマイクを使って応答する。賞状なんてどこにも持ってないぞ？

「あの……賞状はどうしましたか」

「名前を書く時にインクをこぼしてしまって、賞状の紙がまっ黒々になっちゃいました。ごめんね」

ぼかんとしてしまった。この人もこういう失敗をするのか。

アキラも驚きと失望を織り交ぜたような表情をしている。無理はないか。

「賞状の代わりと言っちゃなんだけど、あたしに挑戦する権利って
のでどうですか？」

周りがどつとどよめく。ちよつとシロナさん、何言ってるんですか！？

「面白くなりそうですね。それにしましょう！」

マエダの司会進行で一度トーンダウンした観客達に熱気が戻ってくる。よかつたじゃねえかよ、この大会よ。よかつたじゃねえかアキラ。てめえなんてボコボコにされちまえばいい。自分の感情を優先して挨拶や握手も出来ねえ奴なんて

「それじゃあノブ才君、ポケモン一匹選んでくれる？」

ああ？

「あのーシロナさん。優勝したのは赤コーナーのタカナシ・アキラ選手ですが……」

「彼ですか？ 彼とはポケモンバトルしたくないな」

「いやあの、それは」

「誰かを屑呼ばわりするのはいいですよ。でも握手くらいできない人とはポケモンバトルはしたくないですね。あたしにだってそのくらいの権利はあると思うわ」

マエダも観客たちも黙る。すぐに沈黙を破る声を上げたのはアキラだった。

「納得がいきません！ 僕はこいつを下して優勝したんだ、あなたと対戦するのはこの僕だ！」

シロナさんの表情が固まり、おれに腕を伸ばしてきた。右手にはマイクが握られているので、これを預かれということだと解釈してマイクをつまみ上げた。

刹那、シロナさんを包む黒いコートがアキラにずっと迫った。

シロナさんから放たれる言葉に出来ない圧がおれの口を開かせない。「で、君は大犯罪者を両親に持つ人間ならどれだけ罵倒しても許さ

れると思ってるの?」

「そらそうでしょう。その人間は大犯罪者の血をひいてるんだ、現にそいつは」

「ノブオ君は? 何か犯罪でも起こしたの?」

「自分がポケモントレーナーとして成り上がるために自分のポケモンを傷つけることも辞さなかった!」

「そうしてまでも高みを目指そうと思わせたきっかけは? それはあなたじゃないの?」

アキラのびたりと動きが止まった。

いま、二人は相対して話をしている。だけどおれの目にはアキラの存在がシロナさんに圧倒されてどんどん小さくなっていくように見えた。

「もしもあなたが自分が正しいって考えてるなら自省した方がいいわよ。あなたが蔑み罵るノブオ君のようにね」

「僕は間違っではない。そいつは今に……今に大きな反社会的な行動を起こすよ、絶対にね!!!」

アキラはそれだけ言うつと踵を返し、威風堂々の振る舞いで観客席の方へ歩き、その姿を消した。

「あー、えーつと……それではノブオ選手、使用ポケモンを一匹選んでください」

優勝者がいなくなつちまった今、シロナさんに挑戦する権利はおれにあるってわけか。

シロナさんの顔を見る。先までの威圧は夢で逢ったかのように消え失せ、おれに穏やかな笑みを見せている。

「あー、司会の……マエダさんだっけ?」

預かったマイクに声をかけると想像以上に声が広がってびっくりした。あちこちにスピーカーカー置き過ぎじゃねえのか?

「はい、そうですが」

「すみませんが、おれは降ります」

「はいい!?!」

マエダが驚くのと観客席が驚くのは同じタイミングだ。凄いシンクロを見たが、チャンピオンに挑戦できる折角のきっかけを蹴るってのはまあ、まともじゃあないか。

「シロナさん！ おれ達はね、おれとこいつらの力で正式にあなたの前に立ってみせる」

マイクを離してシロナさんに渡す。おれの言いたいことはもう言った。こんなものはもう要らない。

「そっか。それじゃその時を楽しみに待ってるから。またね」

シロナさんはマイクを右手に、もう一方の手を静かに横に振って送り出してくれた。

「あ、あら……じゃあ……準々優勝のお二人とシロナさんでダブルバトルなんて……」

司会に慣れている様子を見せていたマエダが少々混乱しているのを聞きながらおれは頭を下げる。たっぷり三秒間。

それから踵を返して観客席の方へと向かう。今日は疲れた。ポケセンでポケモンの治療を終わらせたなら寝てしまおう。

いや、今日はたぶん眠れない。シロナさんがおれをかばってくれたおかげで、やっとアスルにおれのことを話す決心がついたのだから。

第十九話 回顧 空に月を 口にクッキーを

ポケセンの自分の部屋に戻ると、ドアの前でアスルがビニール袋を持って立っていた。フレンドリイシヨップの袋ということは中にお菓子でも入っているのだろうか。

「決勝戦見たよ！ とても凄かった！」

「負けちゃったし、それにシロナさんへの挑戦権も蹴ってんだ、言うほど凄くねえさ」

それとも別の意味で凄いとでも？ なんて訊いてみようとしたが、アスルにそんなつもりが露ほどもないのは彼女の笑顔で分かる。

「で、どうした？」

「一緒にクッキー食べようかなって。どうかな」

アスルはにこにこしながらドアを軽くノックした。おれは綿パンツのポケットから鍵を取り出してアスルに投げ渡す。おお、ナイスキャッチ。

「オーケイ。後でいいからおれに話をさせてくれよ」

アスルがベッドの上に座ってクッキーをつまみながら話をしたのを、おれは窓際の椅子に座って聞いていた。椅子の近くには小さなテーブルがあり、その上にはもう一つのクッキーの袋が口を開けている。

一番興味深い話は、メルツェルとの試合の後でジムリーダーのメリッサからレリックバツジを貰ったことだった。

しばらく復興作業でポケモンジムの休止をしなくてはならないために、メリッサはポケモンリーグ協会にかけあったのだという。

その結果、メリッサの判断で大会参加者にバツジを譲渡すること認められ、アスルを始めとした多くのトレーナーがこの恩恵にあ

ずかったという話だった。

「ねー。メリッサさんっていい人だよな」

「そうだな、そこまで考えは及ばねえよ、フツーは」

ビニール袋の中に入れていたレリックバッジを手に持ちながら嬉しそうにしているアスルを見て、これからおれが話そうとすることに躊躇いを覚えてしまう。

いや、これはメルツェルとの約束だ。期日は今日だし、話さなくてはならない。

それにおれの理解者だっている。シロナさんはおれの過去を知っているが、ああしておれにまつすぐ向き合ってくれている。もしかしたらアスルも……いや、これは甘い考えだ。

全てはアスルの判断にゆだねられる。この先おれがアスルの隣にいられるかどうかは。

「なあ、ちよつと昔話をしていいか？」

「山に登ったお爺さんがおにぎりを落として転がして駄目にしちゃったお話？」

「違うよ。おれの身の上話っていうか、昔の話っていうか。どうしても聞いてもらわなきゃいけないんだ」

アスルはなんでもないことのように大きく頷いた。きつとこんな事を考えているに違いない。どうしてノブオはそんなに緊張しているの

外が暗くなってきた、東の空からは太陽の代わりに月が昇って来ている。終わりのない天体の追いかっこ。

おれは立ちあがって壁に埋め込まれている部屋の照明のスイッチを押した。

ぱか、と音がすると同時に天井の電球が部屋を照らす。カーテンはまだ閉めなくてもいいか。

すうつと深呼吸。深く息を吐いて椅子に座る。さて、どこから話せばよいものか……

「……おれはマサゴタウンで育ったんだ。両親がいなくてさ、ナナ

カマド博士の厚意で面倒見てもらったんだよ」

「両親がいないって、死んじゃったの？」

「いいや、今も生きているよ。父さんも母さんも札付きの犯罪者でさ、普通の警察じゃ手に負えないから国際警察から指名手配がかかっているんだ。二人組の世界を股にかける怪盗ってやつ」

「ふうん。なんだかっこいいね」

なんてアスルが返すとは思わず、おれは小さく嘖き出してしまった。

「義賊なんて言ってるが、盗みのためには殺しもしてるだろうさ。

おれが二つの時に盗賊活動を始めて……昔のことだから両親の記憶が無くてさ。一番古い記憶はナナカマド博士の研究資料にいたずら書きをして駄目にしちゃって、カミナリ落とされたってことかな」

「ナナカマド博士ってやっぱり怖いの？ テレビで見たことがあるけど、怖そうなお爺さんだなんて感じだった」

「顔は怖いけど中身はそうでもないさ。特に子供には甘いんだよ、あの人」

そうなんだーとアスルは笑う。そうそう、仕事で遠くに行ったら必ずと言っていいほどにお土産を買ってきてくれたんだよな。

「じゃあそしたら？ あの人とはどこで知り合ったの？」

「あの人って誰だよ」

「ほら……ノブオを屑呼ばわりしたあの男の人」

ああ、アキラのことか。

「奴の名前はアキラ。マサゴにあるトレーナーズスクールの同級生で金持ちのボンボンだ。あいつは犯罪者の子供も犯罪者になるって考えていて、あいつがスクール中におれとおれの両親のことを吹聴してまわったんだ」

「だからノブオを屑って呼んでたんだ。それに酷いことをしたのね、ノブオのお父さんとお母さんのことをわざわざ言いふらすなんて……」

「おかげでスクールにいた大勢の子供から疎まれた学校生活を送れ

たよ。おまけにアキラがボンボンだからくつついてるクソガキ共が、奴の差し金でよくおれをいじめていたな」

靴の中に画鋏、おれの机に「盗人の子供は帰れ」「犯罪者は死ぬ、その子供も死ぬ」なんて誹謗が書かれていた（油性のサインペンでだ、クソつたれ）のは日常茶飯事だった。

このことを話すとアスルの顔色が急に悪くなった。こんな話をし
て楽しそうに耳を傾ける奴がいたらそいつの頭はどこか狂っちゃまっ
てる。

「担任の教師のおとがめも無しさ。きつとカネで抱きこまれたんだ
ろうな」

「そんなのおかしいよ。ノブオはやり返したんだよね？」

「いいや」

「どうして？ だってそんな目に遭ってたならやり返せばいいじゃ
ん」

「奴らを殴ってやり返したとしたら『ほうら、犯罪者の子供はこう
なんだ』なんてアキラが吹いてまわるのは目に見えていた。おれは
ずっと耐えていたんだ。いつかこいつらをぶち殺すほど凄いことを
やってやるうって考えながらな」

顔色の悪いアスルの眉間に力が入る。彼女の黒い瞳にはアキラへ
の怒りとおれへの困惑が渦巻いているように見えた。

「四年間でトレーナーズスクールは生徒達に一通りの教育をするん
だ。子供の希望で二年間の追加教育を受けられるんだけど、大多数
の子供はその後で旅に出るから、きついいじめはなくなっただ」

「そうなの……よかつたじゃない」

「よかつたついでに目標も出来たよ。おれは無辜の人間であるはず
なのに、たまたま両親が大犯罪者でたまたまクラスメートに目をつ
けられていじめられたってのはどう考えてもおかしいんだ。筋が通
ってねえ」

「うん」

「だからおれを見下した奴らを思いっきり見返してやることにした

んだ。ポケモンリーグで勝ち上がってチャンピオンを下し、短い間でもいいから絶対者になるしか方法はない」

シンオウのジムバッジを八つ集めるのも大変だが、それだけじゃ奴らを完全に見返したことはない。第一にしてアキラが既にバッジを八つ所有している。少なくともリーダー格であった彼を越える実績を作らなければならない。

そんな話をするとアスルは寂しそうな顔を浮かべていた。足りないものを埋めるかのように彼女はクッキーを袋から一つつまみ、口に入れる。

「それじゃああと少しなんだね。残るバッジは一枚だし、きつとノブオならチャンピオンの……シロナさんだっけ。あの人も倒せるよ」
「簡単そうに言うがなあ。八つ目のバッジをとるってことはジムリーダーの最高のポケモン達を相手するってことなんだ。リーグに挑戦するつたらバッジ八つ持った奴らと戦い、次は四天王つて四人の凄く強い奴らと戦い、最後には今まで戦った奴らを足蹴にするチャンピオンと戦わなきゃいけない。甘くないのさ」

「あー、そんなにきつかったんだ」
「でな、スクールの追加授業を受けて、小さい頃から一緒だったユーラとビツパとポニータを伴って旅に出たんだ。ちょうど三年前、十三歳の時だよ」

私は十二歳だねと相槌をうつアスルはもう一枚クッキーを口に入れた。おれも一枚クッキーをほおぼる。いい具合にバターがしみ込んでいて美味しいのに、これから話すことを考えると一気に不味くなる。

「おれがやるうとしてることはとても厳しいことだったのは当時から分かってはいた。いたんだが、旅に出てから一年で二年間トレーナーとしての活動を止めたんだ」

「どうして？ 今は大丈夫だけどその時に挫折したの？」

「挫折も無いことはないが……深く反省していたのさ。おれが旅をしていた一年の間にやってきたことをな」

アスルのクツキーをとる手が止まった。自分の顔に脂汗が浮くのが分かる。フラッシュバックがあの一年の間で自分のポケモンにふるった暴力を思い起こさせた。

「おれが目指す目標はとてめえも厳しい。ポケモンを育てるのに甘い顔一つすら出来やしねえ。しねえんだが、やりすぎたのさ」

「やりすぎたって?」

「自分のポケモンに暴力を振るっただ。ちょうど、アスルと最初に出会ったあの夜に見かけた奴のようにな」

アスルの目が大きく開き、口はなにかを言おうとしてそれが出来ないでいる。

「おれがやったのは蹴っ飛ばして転がすだなんて甘いもんじゃねえぞ。道具を使って殴ったりなんてよくやってたさ。何度も頭を鉄パイプで思い切り打ちつけたりな」

「どうしてそんなひどいことをしたの!？」

「おれの目標は厳しいって言っただろ。それに旅に出る前に元からいた三匹のポケモンにはうるさいくらいに、厳しくやるがそれでもいいかって尋ねて同意を貰ってたんだ」

「だからってそんなことをしていいわけがないよ! 鉄パイプで殴るなんて、人間だったら死んじゃうわよ!」

「あの時のおれだって分かってた。こんなのは許されることではないってな。でもな、厳しくあたって強くするって他にもおれは暴力を振るっていたと思う」

アスルの刺すような視線が痛い。これは同情してもらおう話ではなく、聞いた人を引かせるか怒らせるかのどちらかにする性質を持っている。だから当然のことなのに、おれはアスルから目を背けてしまった。

「四年ものあいだ、おれは理不尽ないじめや暴力を受けてきたんだ。そののうさはらし……もあつたように思う」

「……」

「そんな旅を続けて一年。自分のポケモンをボロボロにしながらお

れは七つのジムバッジを手に入れ、残る一枚を手に入れるためにナギサシティへと向かっていた。今でもはつきり覚えてる。ちょうどあの時もあんな風に出でいたんだ」

アスルの反応はない。自分の目的のためだけにポケモンに暴力を振るった人間なんて嫌われて当然だ。

「野宿をしようとして準備していると、黒服の上に黒コートを着こんだ金髪の女性が声をかけてきたんだ。黒い変な髪飾りをつけてな」
「えっ。その人、もしかして……」

「シロナさんだ。アスルも昼間に見たと思う。雲の上の人がどうしておれに声をかけてきたのかは分からない。ただ当時、おれの名前は好ましくないトレーナーとして広まっていたんだ。あたり構わずポケモンを怒鳴り散らして暴力を振るっていたんだからな」

「それでシロナさんと何をしたの？」

「君はトレーナーをやめるべきだと、開口一番に言われたよ」

ふうとアスルがため息をつく。思った通りの展開だったのだろうか。

「おれは反発してシロナさんとのポケモンバトルに臨んだ。結果はシロナさんのガブリアス一匹に全滅」

「そんなのつてあるの？」

「おれが証人だ。そのあとでシロナさんはおれにどうしてポケモンに暴力を振るってまで上を目指すのかと尋ねた。アスルに話したのと同じことを喋ると難しい顔を浮かべていたよ。ちょうど、今のアスルみたいにな」

驚いてか、アスルの身体がバウンドするのを横目にクツキーを口に入れる。さく、さく、さく。

「それからシロナさんはおれにこう言ったんだ。今の君じゃどうあがいても八つ目のバッジはとれないし、ポケモンを鍛えたところで君がそのままだとバッジはとれてもその先に進めない、と」

「……」

「だから長い間どこかの街に滞在して力を蓄えなさい。今の君は最

悪だけど、いつかは最高のトレーナーになって目標を達成できるよ……そんな感じのことを言ったんだ。普通さ、笑って自分を倒してみろなんていうチャンピオンがいるか？ いねえだろ？」

「なんか凄い人なんだね」

「シロナさんは笑ってそんなことを言ったんだけど、絶対に自分を越えられないとかそんな含みはなかったんだ。それに、シロナさんはおれの初めての理解者なんだよ。あの出会いが無かったら今のおれは無かった。挫折してボロボロになっちまってたさ」

もう一つクツキーを口に入れる。アスルも同じタイミングでクツキーを頬張っていた。

「ポケモンを鍛えるのに場所は問われないが、トレーナーを鍛える場所となるとあまり無い。あまり無い中にミオシティがあつてな、そこで長いこと滞在することにしたんだ」

「どうしてミオシティなの？ コトブキシティのほうがもつと大きいのに」

「あそこにはシンオウー大きな図書館があるんだ。おれは荒んだ心の回復と普通のトレーナーじゃ持ち合わせない知識を得るために本を読むことにしていて、じゃあミオはおれの反省とポケモンの育成には良い所だなって考えたんだ」

「どのくらいミオシティにいたの？」

「二年だ。その間におれは人間らしい心を取り戻せし、知識も手に入れた。ポケモンもよくよく鍛えられた。使った時間にしちや収穫は有り余るほどつてやつだ」

「それからコトブキのポケモンバトル大会に出て、私と出会ったのね？」

アスルの問いに頷き、おれは立ちあがって部屋のカーテンを閉める。アスルに背を向けたままおれは話を続けることにした。

「……おれはこういう人間だ。メルツェルもおれの悪い評判を知っていてな、アスルのことを考えれば評価の悪いおれが近くにいるべきじゃないって言っていたよ」

「でも今のノブオは違うでしょ？」

「メルツェルも同じことを言っていたよ。昔の悪評と今のおれは結び付かない。だけど一度張られたレッテルはそうそう簡単には外せねえんだ」

深呼吸して息を整えた。踵を返し、アスルの目を見つめて覚悟を決める。

「おれは明日の九時に出発する。待ち合わせ場所はポケセンのエンランスホールだ。今の話を聞いてアスルがおれと一緒にいたくないなら来ないでいい。今まで通り一緒に旅をするってなら時間通りに待ち合わせ場所に来てくれ」

「えっ？」

「こんな話をしてすまないな。だが、おれと旅をしていたらいつかは耳にする話だ」

ぱりぱり、とアルミ袋がたてる音が聞こえた。アスルがクツキーの袋に手をぶつけたのだ。

「ねえノブオ。その返事って今でもいい？」

「今？　ここでか？」

「うん。だってそんなの決まっているじゃない」

そうか。アスルの中では既に答えが出ているのか。

心臓が早鐘を鳴らす。おれの中でアスルに拒否されるのを恐怖するおれが暴れ回っている。汗が止まらない。身体も震えてきた。

「もちろん、ノブオと一緒に旅をする。今まで通り仲良くやろうよ、ね？」

ベッドの上で座るアスルは、笑顔で確かにそう言った。

「一緒に……旅をするって？」

「ノブオが嫌だって言っても私はついてくからね。ノブオが過去にどんな人でも、両親が犯罪者でも、いまの良い人のノブオには何の

「関係も無いじゃん」

「屈託のない笑みを浮かべてアスルはベッドから降り、こちらに歩いて近づいてくる。」

「だから、ノブオが八つ目のバッジを取るまで、よろしくね」

「無邪気に口元をゆるく歪めるアスルを見て、彼女の言葉を聞いて、おれの右目から一粒の涙がこぼれるのが分かった。」

「いきなりあんなことを話されて混乱しているに違いないのに、アスルは自分の考えでこんなことを言ってくれるのだ。」

「なあアスル」

「なあに？」

「そういえばおれ達、友達じゃなかったよな」

「アスルがなにいつてんのーと笑うが、おれとしてはそうはいかない。数日前まではアスルに協力して自分の名をプラスイメージにして売り出そうという浅ましい考えを持っていたのだから。」

「楔にすらならないが、アスルと友達になりたいという思いも持ち合わせている。そのためにもおれは右手を差し出した。」

「握手しようぜ。一緒の旅が終わってもおれ達、ずっと友達だぞ」

「アスルは頷いておれの手を取る。えへへと笑って、」

「あたりまえでしょ。ずっと友達。ずっとずっと友達だよ！」

「遠慮なく握ったおれの手をぶんぶん回してきた。」

「うおっ!？」

「あははっ! それじゃ明日、またね！」

「アスルは軽快な足取りでベッドの上に置いていたクッキーの袋を取り、手を振って部屋を出ていった。」

「ぱたんとドアが閉まってから、ああと声を出したのに気付く。嗚咽だ。嬉しいからって泣くって、どこの思春期の女の子だよ。」

「でもまあ、メルツェルとの約束も果たしたし、明日からも隣にはアスルがいる。泣いちゃっても仕方ないよな、嬉しいんだから。」

登場人物、設定の紹介（前書き）

個人の好みの話になりますが、お話の一番最初に登場人物や設定の紹介をされると、ちょっとアレな感じがします。

人物を描写して読者に紹介するのは本編でやれ、設定は本編で使って描写しろ、といったところですね。何のためのお話なのかと。

シリーズものとかで新規さんのことも考慮して最初にキャラクター紹介というのは分かるんですけどね、それ以外はちょっと違うでしょうよ、と。

今回幕間として登場人物と設定の紹介をさせていただいたのは、一度ここで物語の整理が出来る機会を設けたいと考えたからです。ただただ、それだけです。

登場人物、設定の紹介

ミヤモト・ノブオ

主人公。16歳。ジムバッジを七つ持ち、ジムリーダーの本気と相対出来る実力を持つポケモンと、それらに指示を出すに足る能力を持つ。つり目で、少々近寄りづらい雰囲気がある。

冷静で落ち着きがあるが、自分の不利益になりそうなものは極力避ける姿勢を見せ、自分が得しそうなことに関しては積極的に動く、ある意味で人間らしい人物。とはいえ、口は悪いが悪い人ではない。それを裏付けるかのように、トレーナーとしての強さを身につけたいと述べるアスルと旅をしたり、バリバリ団に敵対する行動をとったりした。

両親は世界的盗賊であり、それを取り上げられたせいで子供時代から陰湿な嫌がらせやいじめを受け、性格や思想がねじれてしまった。

それ故、三年前の旅立ちから二年前までは自分のポケモンに対する暴行や、相手のトレーナーに対する罵倒などで有名なポケモントレーナーとして知られていたが、シンオウポケモンリーグのチャンピオン、シロナのおかげで反省するきっかけが生まれた。

アスル・ギユネシ

もう一人の主人公。ヒロイン。15歳。アナトリア地方出身のポケモントレーナー。ノブオからトレーナーとして強くなる術を学ぶべ

く共に旅をしている。

明るく元気な女の子。感情表現が豊かでしばしば周りの注目を浴びる。いつもはゆったりとしたアナトリアの服を着て身体のラインが分からないが、同性を相手にすげえ身体と言わしめるプロポーションの持ち主。

シンオウにてポケモントレーナーとして学び、ポケモンに関する制度が無いアナトリアに貢献する目的を持つ。が、本人はポケモンと楽しくやることに大きな喜びを感じている様子。

高い言語センスを有するが、ポケモントレーナーとしての腕前や観察眼はまだまだ未発達。しかしポケモンに好かれる雰囲気が出ており、持ち前の明るさが光ってポケモンとの絆はよく深められている。

メルツエル

15歳の少女。背中まで伸びる黒髪とファッション雑誌の読者モデルに抜擢されそうな容姿（ノブオ談）を持ち、アスルとは別のベクトルの明るさを見せる。アスルの身体にすげえといったのは彼女。

メルツエルは本名ではなく、トレーナーとしての登録名。メトロノームの特許を取得したヨハン・ネポムク・メルツエルに由来する。また、彼女は足でリズムをとるのが癖になるほど好む。

肌の露出が大きい服を好むが、その性格はしつかりした真面目者。悪評がついてまわるノブオがアスルと一緒にいるのは止めた方がいいとノブオに発言するほどの行動力の高さも併せ持つ。

アスルと同じく駆け出しトレーナーであるが、大の相棒であるペラップとは良好な関係が築けている。

タカナシ・アキラ

16歳の少年。ジムバッジを八つ持ち、電力会社ライトニングの警備部門にて仕事をしている。

6歳頃からノブオに陰湿な嫌がらせやいじめを加えた張本人。彼には彼なりのそうした理由があるが、実際それはノブオが述べるとおり理由抜きに理不尽なものだった。

犯罪者の血縁関係にある者が嫌い、彼らにならなにしてほしいという特異な思想を抱いているだけで、それ以外の性格などは穏やかで変なところはない。

回路

ポケモンが技を行使する際に構築される存在。ポケモン研究が進んでいるにも関わらず、これの目視をしたケースはない。

回路動力源

ポケモンが回路を構築するエネルギーを生み出す存在。全てのポケモンがこれを有し、これを有していればポケモンであるとの定義付けも成されているが、回路と同様にどのような形をしているかは不明。

また、補助技とは対照の動力源に干渉するものであることが確認されている。例えば「あまえる」は対象の心を惑わせる行動をとるものではなく、そのふるまいによって回路干渉因子を発生させ、対象の物理攻撃能力を大きく減退させるのである。

フラッタ

全てのポケモンジムに設置されている機械装置。簡潔に言えばポケモンの能力を減退させる装置である。

これによってジムリーダーは挑戦者が所有するバッジ枚数などから挑戦者の力量を判断し、手持ちのポケモンの能力調整を行う。

また、フラッタによりジムリーダーが用意しなければならないポケモンの総数が大きく減少するといったコストダウンに貢献している面もある。

AA (Application Arts)

間違っても緑色の大爆発を起こすものや、文字と記号のみで描かれた絵のことではない。あくまでも「アプリケーションアート」であ

る。

ポケモンが使用する技を人間が応用を利かせ、これを教え込むことで習得させた技を指す。メタ的なことと言ってしまえば、いわゆるオリジナル技である。

しかし暴力的な火力を実現させるAAは殆どなく、作中でノブオがマニユーラに指示した「フローズングラウンド」のように敵の行動を阻害するAAや、特定の能力だけを極限まで下げるAAなどが多く存在する。

バリバリ団

どれだけの規模を持つ組織か、本拠地はどこか、幹部は誰か組織形態はどうなっているのか、などの実態が明らかになっていない暴力破壊集団。

シンオウ地方でのみ破壊活動を行い、これまでにクログネ、ヨスガを襲撃、大損害を与えた。破壊が快楽を生み、快楽はよいものであると説く破壊快樂論を踏まえて行動している節がある。

第二十話 旅路の途中で 二人旅、209番道路

ぼん、ぼんと雨粒がビニール傘を叩く。少し前を歩くアスルはどこか嬉しそうに道を歩く。わざわざ小さな水たまりを選んでジャンプするなんてどこの微笑ましい子供だよ。

ヨスガシティで行われたポケモンバトル大会の翌日、いま歩いているルートは209番道路からズイタウンへ行き、そのまま北上して210番道路から東に分岐する215番道路に進み、トバリシティへ到達するものだ。

街の復興の手伝いをするのだと言ってヨスガシティに残ったメルツエルは、昨日に退院祝いの時の続きと言ってアスルに似合う服を何着か贈ってくれた。やっぱり良い子だ。

その後でおれが約束通りアスルに自分の過去を話したこと、アスルがおれと旅を続けることを話すと、よかつたじゃないすかあなんて言ってくれた。やっぱり良い子だ。

メルツエルがヨスガ復興にどれだけ協力するのは分からないが、彼女にだってやりたいことはあるだろうからいつまでもヨスガにいるつもりはないはずだ。

そう考えたおれは今歩いているルートのことを昨日の内に彼女に教えてあげた。出来れば三人で旅がしたいからなあ。

上からばらばらとビニール傘を叩く音が消えた。腕時計を見ると18時を少し回っている。沈み始めた太陽の橙色は曇天に遮られて僅かしか見えない。

半袖より少し袖が切り落とされ、脚も脛の半分までが隠れている爽やかな青色のワンピースを着たアスルは雨があがったことを喜ん

でいるらしい。たただびニール傘をぶんぶん回している。

「おいおい、危ないからやめとけて」

「ああごめん。ずーっと雨が降ってたのがおわたたから嬉しくってくるくるとまわってアスルは立ち止まる。目を回したか？」

「そうだ、その服ってメルツェルの退院パーティの時に着ていたよな？ 裾とかどうしたんだ？」

「昨日メルツェルに切ってもらったの。こっちの方がもつとかわいく見えるよって。あとは頭の布も取った方がいいよって教えてもらったわ」

なるほど、今日のアスルは何か足りてないなと思ったたらそれが。

「それで……どう見えるかな」

「なにが」

「ほら、この服とか、髪とか。どう？」

160センチくらいの身長に男が思わずびっくりする身体つき。

短いながらもストレートの金髪と快晴を思わせる青色のワンピースの裾がふわふわと微風になびいている。

「いいと思う。似合ってるよ」

「ありがとー。私もずっとあの服を着るのはどうかなって思ってたんだ」

「あれもいいと思うんだけどな。アスルはあれ着てた方が落ち着いているんじゃないかって思ってたんだけど」

「んー、あまり肌を見せなくなかったんだ。軽い人だって思われるのが嫌だったの」

ほほう。

「メルツェルと出会えてよかったって思う。あの子は結構肌を露出してたけど、しっかりしていたもの」

「そーだな。で、ちよつとだけなら見せてみようかなと思ったわけだ」

「うん。それにほら、自分でいうのも私ってアレじゃない？」

「まあアレだな。うん」

「それでじろじろ見られるのもやだなって思ってたんだけど、勇気出して一步踏み出してみよっかなとも思ったの。近くにいるノブオなら見せてもいいかなって思ったしね」

嬉しいやら照れるやら。そうかいと軽く返してやる。

この辺りは川がいくつか流れていて野宿するには困らないが、ここで野宿するなら結構いい場所がある。

おれが生まれるよりも前にボランティアが作り、現在も整備が行き届いている場所が川沿いにある。雑草や何やらが全て除去され、直に寝袋で寝ても大丈夫なようになってはいるはずだ。

その場所のことをアスルに話してやると嬉しそうに口元を歪ませた。

「他の人も一緒にいるんだよね」

「まあな。でも、雨が降るから外出を控えてつてことで、あまりいないかもしれない」

「それでもいいよ。その人とお友達になれたらいいなあ」

ふふつと例の場所を待ち遠しそうにして笑う。おれもつられて笑いながら小さな木製の橋を渡った。足元のすぐそばから強く水が流れる音が聞こえた。

そういえばさっきの橋がこの道路では最後の橋だったような。記憶が正しければ、この川を北上した所に例の場所があるはずなのだが

「あつ、ノブオの言った場所つてこれじゃない？」

アスルが指差した金属製の看板には「209番道路休憩所、川沿いを北に500m先」と雨粒に濡れながら記されている。二年も経てばいろんなものが便利になるな。

看板を見かけてから十分と少しが立って、ようやく例の場所にたどり着いた。川から少し離れた場所に草が刈られて砂が敷き詰められている。

さつきまで降っていたような雨が砂地を濡らし、多くの人間やポケモンが踏み固めることによって固い砂地がここにあるというわけだ。

先客は一人。お上品にテントなんて構えているあたりをみると、育ちの良い人間なのかもしれない。

「いいなー。あの緑のテントってどのくらいで買えるんだろう」

「白抜きのモンスターボールのイラストがあるってことはフレンドリイショップで買ったんだろうけど、それでも高いと思う。買えるとしてもテントって持ち運びが難しいからオススメはしない」

それよりも荷物を置こうぜと呼びかけながら座りこむ。アスルは横倒しにしたスーツケースの上に腰かけていた。おれもスーツケースにすればよかった。

「とりあえず焚き火をしよう。その森に木の枝を取りに行くからそこで待っていてくれ」

尻についた砂を叩いて落としながら、背中にアスルの送り出しの声を受けて森へ向かう。

歩きながらマニョーラを外に出した。こいつには森で拾う木の枝を一緒に持ってもらったり、いざという時に守ってもらおう。その旨を伝えると上機嫌に喉を震わせた。

五分と経たない内におれとマニョーラは両腕にそれなりの大きさの枝を抱えて戻ってきた。アスルは自分のスーツケースから寝袋を出し終えてその上に脚を崩して座っている。近くには彼女の白い靴が置いてあった。

「ただいま。眠いのか？」

「うん……ちよっとね」

あくびをするアスル。休憩をはさんでいたとはいえ、やっぱりつらいもののはつらいのだ。

「ちよつと待つてる、今からこいつに火をつける。マニユーラ、適当な場所にそれを降ろしてくれ」

すぐにマニユーラはアスルから少し離れた場所に持っていた木の枝をばらばらと置いてくれた。おれもその場所に木の枝を置き、マニユーラに礼を言つてからボールに仕舞う。

「次はギャロップに火をつけてもらうの？」

「それもいいかもしれないけど、そういうのはちよつと嫌いなんだよ」

ふうんとアスルが言うのを聞きつつ、自分の肩がけバッグからマツチ一箱と固形燃料の小さな缶を取り出した。

「それで火をつけるの？」

「そうそう。この缶が燃料で、こいつを枝の小山の下に置いてマツチ一本火事の元と警告する箱から一本のマツチを取り出し、箱の側面を使つて火をつけて木の枝の山に突っ込ませる。」

「こうしてやれば火はつく。ただな、さっきまで雨が降つてたから枝が湿つてるんだよ」

「そしたら火がつかないじゃない」

「こればかりはどうにかなるもんじゃないなあ。ビーダル！」
腰のベルトからボールを取り出してビーダルを外に出してやる。

「この枝の山に息を吹きかけてくれ。ちゃんと焚き火にするんだぞ」

快く了承したのか、機嫌がよさそうに鳴き声を上げたビーダルはすぐに枝の山に息を吹きこんでいた。

「焚き火はビーダルに任せるとして……アスルはしばらく寝てていいよ」

「ほんとう？　ならお言葉に甘えようかな。でも寝て治るものかなあ」

「どっか具合でも悪いのか？　また風邪ひいたりしたか？」

「ううん、脚がだるいの。途中で休憩とってもらったけど、今日は結構歩いたから」

スーツケースを足元に動かしたアスルは寝袋に入ろうとする。

「揉んでやるうか」

「え？」

「だるいんだつたら足の裏でもふくらはぎでも揉んでやるよ」

寝袋に片足突っ込んだアスルがこつちを見つめる。眠たそうで疲れている印象がある顔が次第に明るくなった。

「ありがとう！　じゃあ足の裏を揉んでもらおうかな」

アスルは寝袋とスーツケースを枝の山の近くに移し、寝袋の上で仰向けになって両足をスーツケースの上に置いた。

おれもアスルの足先の向こう側に座り、先に右足から揉んでやることとする。

「あー、そこいいなあ。そこもいいなあ」

どうやら足全体に負荷がかかっていたらしい。まんべんなく揉んでやった方がよさそうだ。

隣ではビーダルが嬉しそうな声を上げる。様子を見てみると、木の枝の山から煙が出ていた。

「あと少しだな。このまま頼んだぜ」

「どうしたの？」

「焚き火がもう少して出来上がりそうだ。しばらく温まってゆっくり休めばいい」

「ありがとうね。あー、そこ気持ちいいなあ」

いつもよりふにゃふにゃした声を上げるアスル。旅をする上で疲れをためるといふのは割と危ないことだ。三年前に旅を始めた頃のおれも全身のマッサージを欠かしていなかった。そうしないと次の日に身体が痛くて大変なのだ。

もう片方の足を揉んでやってから数分、すーすーとアスルが寝息をたて始めた。既に焚き火もぱちぱちと音をたてて赤くなっている。

ビーダルに予備の枝を取りに行かせた時にはすっかりあたりは暗くなっていた。黒く見える雲のせいで月明かりすらない。光源となるのは焚き火の炎だけだ。

おれはギャロップを収めているモンスターボールを取り出し、中身を解放する。ビーダルが帰る時に迷わないようにするためにはもっと大きな光源が必要だ。

「ビーダルが戻ってくるまで立つてくれねえか」

ギャロップは眠るアスルを横目に小さく高い鳴き声で返事をし、暇を弄ぶように前脚で砂の地面を小さく掘り始めた。

それにしても、だ。テントの中にいるはずの人間はこちらに向かって挨拶をしねえ。

それだけならまだいい。不審なのは防音加工なんてされていないはずのテントの中から何の音も聞こえないことだ。まさか中に死体があるわけじゃないよな？

時刻は19時ちょうど。おれのバッグから缶詰をいくつか出す。こいつを温めてから中身を開けるとクリームシチューがこんばんはって代物だ。

おれとアスルと二人のポケモンの分を用意し、ついでにもう一缶出しておく。こういうのはやりたくないが、あのテントの人間の分も用意してやるう。

立ち上がり、そっとテントに近づいて様子を見ることにした。

テントのジッパを開けて中を見ると、黒いシートの上に毛布を被った人間が横たわっている。様子を見れば、ただ眠っているだけのようだ。

「……あー、どちらさんで？」

「何も音が聞こえなかったから大丈夫かなと思ったんだが、すまない、起こしてしまった」

もそもぞと毛布の中で動く人間は声や雰囲気からして男だ。

「謝らんでもいいですわ。目覚まし時計がそろそろ」

じりりりり！　じりりりり！　とテントの中がやかましくなる。

突然のことだからびっくりして少し飛び上がってしまった。

「ね？ あいや、驚かせてしまいました」

「いや、別に……騒がしくて悪かった」

「いやいや。そうそう、わたくしも用があるのでね、一緒に外に出ましようや」

のっそり毛布から出てきた男のシルエットは細かった。どうも背格好や雰囲気からしておれよりもかなり年上らしい。

後ろに下がって男がテントを出られるようにしてやると、すっと線の細い男が顔を出した。ひげを少し生やしたたれ目のお兄さん。

下は灰色のスラックス、上は黒の七分袖。

「わたくしの名前はセイイチってもんです。しがな画家をやっております」

「おれの名前はノブオだ。あ……初めましてセイイチさん、よかつたらあとであの焚き火で温まりませんか」

セイイチさんの用とは焚き火をやるための木の枝を取りに行くことだった。既に焚き火があることを知ると、そこで温まってよいかと腰の低い態度で尋ねてきた。

おれには断る理由はないし、むしろ誘っていた。気がかりだったのはアスルの意見だったが、目を覚ました彼女は人が多ければ多いほどいいよねと了承した。

セイイチさんは柔らかな声で礼を言っであぐらをかき、両手をかざして暖をとっている。夏とはいえ夜になれば少しは寒くなる。

焚き火の周りには缶詰が並べておいていた。そろそろいい具合だろ。

「セイイチさんも一緒にどうですか」

「わたくしがご一緒してもいいんです？ いやあ、ありがとうございます」

どうもこの人とは話しづらいな。腰が低いのは悪いことじゃないが、年下相手にもこの調子を崩さないってのはちょっとなあ。

そんなことを思いながらおれは全てのモンスターボールからポケモンを出し、缶詰を開けてやってから渡してやる。アスルもおれに倣ってコダックとスポミーに缶詰を与えていた。

「ノブオ君のポケモンはマニユーラとギャロップとビーダル、あとはムクホークとエテボースとフローゼルかい。バッジは何枚持っているんだい？」

「七枚です。セイイチさんはトレーナーをやっていた時は何枚持っていたんですか？」

「実はね、ポケモンジムに挑戦した事が無いんだ。だからバッジなんてないんだよ」

珍しい人だなと思った。年齢は20を過ぎているはずなのに、その間にジムリーダーと戦わなかったとは。

「わたくしのパートナーはドダイトスだけだね。背中に乗ったりして一緒にいるだけでも楽しいですよ」

「それ分かる気がする。一緒に歩いたりポケモンバトルをしたりする時に近くにポケモンがいてくれると楽しいよねー」

にこにこしながらスプーンで缶詰スープを口に入れるアスル。セイイチさんも嬉しそうに頷いていた。

「わたくしはトレーナーには向いていないんです。トロくさくて、ドダイトスも誰かと戦うのは苦手なので、似た者同士気楽にやっていくんですよ」

「ドダイトスって背中の中甲羅に大きな木を生やしたポケモンだよね」「そうそう。身体が大きくてね、よく甲羅の上で昼寝をするのがわたくし達にとって一番気持ちいい時間なんです。それにしてもアスルさん、アナトリア出身でしたっけ」

二口目を口に入れるアスルはこくりと頷く。隣ではコダックがくちばしを直にスプーンにつけ、スポミーはスプーンが冷めるのを待っていた。

「こちらの言葉をすらすら言えるので、髪を染めた娘さんなのかな
と思いました」

「ありがとう。そうだ、セイイチさんって画家なんだよね。川の絵
を描きに来たの？」

「そうです。でも予報には無かった雨が降ったり画材の不備があつ
たりして、ふて寝していたんです」

このタイミングでふて寝って言わないでくれ、笑つちまう。既に
アスルはおかしそうに笑っているし。

「ところで二人はどちらへ？」

「トバリシテイです。あそこのジムリーダーに用があるんですよ
「なるほど……では、アスルさんが挑戦するのですか」

どうして分かったと言わんばかりの表情をアスルは浮かべている。
おれも口が半開きになっているのに気付いた。

「あいや、雰囲気で分かりましたよ。わたくしもトバリに用があり
ます。というより、あそこに住んでいるんですよ」

「それじゃ一緒に行こうよ。どう？」

おれはすぐに頷く。旅をする上での障害になることではないし、
判断はセイイチさんにゆだねられている。

「いいんですか？ お邪魔になりませんか？」

「ただ歩くだけですから。こっちは多く休憩をとるので、セイイチ
さんの方が足を引つ張られる感じがするかもしれませんよ」

「いえいえ、お誘いくださいあってありがとうございます。一人よりは
二人、二人よりはたくさん、ですからね」

セイイチさんは落ち着いた笑みを浮かべてスプーンを口に運ぶ。
アスルも食事を終えたコダツクの手をとって嬉しそうにしている。

喉にスープを流しこんだおれも笑っていた。表情筋は自然に動い
ていた。

第二十一話 反省 アナトリアのトレーナー、舞い上がる

昨日の弱い雨と陰鬱な曇天とはうって変わって、今日はからからと晴れた日になった。

今朝、セイイチさんのテントを借りてアナトリアの服に着替えたアスルは一時間に一度の休憩をとりながら元気に歩いていった。

セイイチさんはアスルを気遣ってドダイトスの背に乗ることを提案してくれたが、アスルはそれを断っていた。みんなで移動と休憩をしなければ楽しくないというのだ。

どういう理屈だよとおれは思ったが、おれが彼女の立場でも遠慮して断っていただろう。自分だけ楽な思いをするというのはどうも気が引ける。

「きつとドダイトスもアスルさんを背中に乗せてみたいと思つていますよ。彼女は人を背中に乗せるのが好きなんです」

セイイチさんは再びアスルにアプローチをかける。背中に人を乗せるのってラプラスくらいしか思い浮かばないんだが、ドダイトスの背中か。おれも乗ってみてえなあ。

「んー、分かった。それじゃあ次の休憩時間まで乗せてー」
「分かりましたよ。それっ」

白の七分袖の服に隠れていて分からなかったが、灰色のスラックスに巻いたベルトにモンスターボールがくっついていたらしい。

セイイチさんはモンスターボールを大きくして軽く投げ、少し離れた場所にドダイトスを外に出した。

接地する四つの脚から背中に背負う大型の甲羅から生える一本の樹までの高さは２メートルを超え、重量も相当にあるのが歩く様子でよく分かる。甲羅から生えるいくつかの棘は鋭さを失っており、セイイチさんがそこに手入れをしたのは明らかだった。

「わあ、すっごく大きい！」

「ドダイトス、このアスルさんを背中に乗せて一緒に歩こう」

セイイチさんの呼び掛けにドダイトスは僅かに頷き、アスルを数秒見つめてから首をくいつと上げる動作をした。

「それじゃ、おじゃまします!」

アスルは甲羅に手をかけてよじ登り、樹に掴まって姿勢を確保してから膝を折って座る。彼女の両手は樹に添えられていた。

「やっぱり様になりますね、異国の少女がドダイトスの背に……うん、それでは行きましょうか」

セイイチさんがドダイトスに手招きの仕草をして歩きだすと、直立不動を守っていたドダイトスはセイイチの歩くペースに合わせて追従する。

どすんどすと地響きに近い音をたててゆっくり前進するドダイトス。アスルはいちいち楽しそうにリアクションをとっている。こういう旅も悪くはないなと思った。

ズイタウンに到着したのは日没前だった。

この町にもポケモンセンターはあるからおれとアスルの宿は確保できていたが、セイイチはどこで一夜を明かすのかは知らない。

「そつえばセイイチさん、今日の宿はどうするんですか?」

「この町のポケモン育て屋さんに泊めてもらうつもりです」

育て屋さん? とアスルが首をかしげて復唱する。おれが教えてあげようとするど、

「老夫婦のブリーダーさんが経営しているお店です。ポケモンを預けて強くしてもらおうですよ」

おれがぱつと頭に思い浮かべていたテキストよりも簡潔な言葉をセイイチさんは喋っていた。

「それで商売しているんだ」

「ええ。わたくしはよく絵を描きにお邪魔していますから、仲良くさせてもらってます」

「絵っておじいさんとおばあさんの？」

「それもありますが、メインは預けられたポケモン達の絵ですね。ときどきポケモンを預けていたトレーナーさんたちに彼らのポケモンの絵を売ったりしています」

そこでアスルの動きが止まって一度頷く。なにを考えているのかな。

「ねえノブオ、私も預け屋さんに行ってみてもいいかな」

なんだ、そんなことか。

「いいけど、先に荷物を置いてからにしておいた方がいいんじゃないか？」

「うん。それじゃセイイチさん、あとで預け屋に行くね」

セイイチさんは小さくお辞儀してからおれ達に背を向けて西の方へと向かっていく。逆光が眩しいからおれは目を背けてしまった。

なんとなく、嫌な予感はしていた。ポケセン受付で宿泊棟の鍵をもらったアスルは部屋に入ってすぐに廊下に出てきたのだ。

唯一の荷物であるスーツケースを置き、楽しそうに外出する様子はとても微笑ましかったが……まあアレだ。予感的中してしまった。

アスルの目の下にくまが出来てしまっている。きっと彼女は沢山の他人のポケモンと触れ合って、それで興奮が冷めずに眠れなくなっただらう。

事実アスルの眼窩にくまが出来ているし、唐草模様のようなアトリアのゆつたりした服に身を包んだアスルの足取りはどこかふらふらしていた。

スラックスに白シャツがおれの服装だが誰かにつまませたい服装じゃあない。アスルが白シャツをつまもうとするのをいなしながらおれは彼女に言っただけだった。

「アスル、昨日は楽しかったろうが、きちんと眠っておかないからこうなるんだ」

「うん……後悔してるし反省してるよ、うん」

「分かっているならそれでいい。いいんだが……おい、おい？」

足取りが重くなった。アスルがおれのシャツの裾を掴んだまま眠ってしまい、それを引きずる格好になっちまっている。

少々無茶のある姿勢だが、それでもアスルはすーすーと寝息を立てて静かに眠っていた。

「こうなったのもわたくしの責任ですね。ノブオ君、申し訳ない」

「いえ……しかしどうすっかな。叩き起こしても二の舞だし」

進行方向にドスンと大きな鉄槌を土の地面に叩きつけたような音がした。振り返ると収縮していく白い光に包まれたドダイトスがいた。恐らくは、セイイチさんの。

「ドダイトス、今日は一日散歩しよう。背中にアスルさんに乗せてだけど、構わないかい？」

セイイチさんの穏やかな呼びかけにドダイトスは甲羅に生やした樹を僅かに揺らして返事をした。

「よかった、彼女は了承してくれました」

「そつだ、寝ているから危なっかしいし、おれも一緒に乗せてくれないか」

おれの問いかけにセイイチさんは構わないかいとドダイトスに中継し、同じ仕草の返事が返ってきた。おれはドダイトスに礼を言うからアスルの身体を甲羅の上に乗せ、その次におれがドダイトスの甲羅の上に乗る。

ここから見る景色は、まるで自分が巨人になったかのような錯覚を引き起こさせた。世界が少しだけ縮んで見える。

ドダイトスが僅かに巨体を揺らして前に進む。背中に二人も人を乗せているからか、窮屈な思いをしているような足取りだったが、脚から身体に、身体から甲羅に、そして甲羅からおれの身体に伝わる振動はひどくおれの五感を揺さぶる。

ドダイトスの一歩が大きく自分を揺らしているのに、アスルは目を覚ます気配を見せない。ひどく疲れるほどに育て屋ではしゃいでいたのかなと思うと、左の口角がにと上がるのが止められなかった。

第二十二話 贈り物 トバリシティ到着 絵筆を持つ者との再接触

ズイタウンを発ってから三日。昨日の内に目的地であるトバリシティには到着していて、セイイチさんはこの街にある自分の住まいに戻っていた。

おれもアスルもポケセンの宿泊棟で一夜を過ごしている。自室の壁がけ時計を見てみると、長針と短針が0時を少し過ぎているのを教えてくれていた。

おれたちは三日間セイイチさんと一緒にトバリシティへの旅をしていた。

その間にセイイチさんにはおれとアスルの旅の目的を話している。おれはこの地方のポケモンリーグのチャンピオンになること、アスルはポケモンの制度を学んでアナトリアに持ち帰ること。

どちらもぶつ飛んだ目的だが、セイイチさんは馬鹿にすることなくおれたちを応援してくれた。年下相手に敬語で話すちょっと変わった人だが、根は良い人なのだと確信した。

さて、予定を立てねばならない。寝て起きて朝食をとったらアスルのポケモンの特訓に入らなければいけないし、彼女自身もこの街の観光をしたい気持ちもあるだろう。

それにセイイチさんもアスルに見せたいものがあると言っていた。待ち合わせ場所と時間の指定もある。今日の正午、トバリデパート前だ。

午前中は軽く訓練させよう。その後でセイイチさんとの待ち合わせに行つて、それから特訓を再開すれば よし、予定は決まった。寝よう。

アスルを出迎えるため、白シャツにベージュ色の綿パンツを穿いたおれはアスルの部屋の前に立つ。

右手には小さなバッグ。この中には財布やトレーナーカードが入っていて、なにか物を買ってもこのなかに仕舞えるだけのスペースを確保している。

「アスル、そろそろいくぞー」

こんこんと軽くノックをしながらドアの向こうにいるはずのアスルに呼び掛ける。すぐには「いと返事が聞こえてドアが開く。今日のアスルは青い絨毯模様が目立つベージュ色のアナトリアの民族衣装を着ていた。

「お待たせ。今日はA Aを教え込んだっけ」

「全然違うって。今日やるのは対かくとうタイプポケモンの対策だな」

そっかーとアスルが返し、服の裾の内側から三つのモンスターボールをとりだす。放出準備形態ではなく、小さな形をしていた。

「このジムリーダー、かくとうタイプのポケモンを使ってくるんだっけ」

「そうそう。たしかスモって名前の女の子で……アスルと同じくらい歳のじゃなかったかな」

おれはこのジムリーダーのことをよく知らない。確かにおれはトバリジムのバッジであるコボルを所有してはいるが、当時のジムリーダーは十代前半の少女ではなかった。

名前は忘れてしまったが、すらりとした線の男だったように思う。年齢はセイイチさんよりもちょっと上あたりの。

あとでセイイチさんに聞いてみるかと考えながらエントランスホールを抜けて外に出ると、トバリシティはコトブキに劣らないほど

の都会ぶりを見せつけてきた。

灰色の高層ビルが縦長の看板を引つ提げて横に並んでいる。そのせいで折角の青空が狭まって見えていたのが少しだけ惜しい。

おれ達の目的地はここではない。隕石高原の近くに大きな広場が目的地で、二年前の記憶の通りであればそこでは多くのポケモントレーナーがポケモンの特訓をさせていたはずだ。

アスルに目的地のことを話して一緒に歩いて向かっていくと、ねえねえとアスルが話しかけてきた。

「何の特訓をするつもりなの？」

「とりあえず技を使わせて本来の調子を取り戻させる。ここんとこるアスルのポケモンは戦ってなかったら？」

「そうだね。それで、AAってあるじゃない。あれってバツジ何枚とつた頃から覚えさせるべきなのかな」

「あんなのわざわざ覚えさせようなんて考えない方がいい。間違っても超高攻撃力の技を覚えさせられるなんて認識は持つな」

分かってるよとふてくされたようにアスルは言い、三つのモンスターボールを真剣な面持ちで見つめていた。

「みんなを強くしたいって思ってるだけなのにね。ノブオったらなんというか……嫌な感じで言ってくるよねー」

「事実を言っているだけだ。AAはどーんずこーんばこーんってやって敵をねじ伏せるものじゃない。前におれ見たのでは……ほのお技で地面を熱して敵の動きに制限をかけるやつがあつたな。あまりにも熱くてびよんびよん跳ねるんだ」

「なんか地味だね。ほのお技のAAなら相手をごおおーって焼き尽くすような技とかじゃないの？」

「それならかえんほうしゃで間にあつてる。いつかはアスルもポケモンにAAを覚えさせてもいいけど、かなり時間がかかるし思っていたような効果が出ないこともあるからおすすめは出来ねえな」

自分が出るからってーとアスルが後ろで文句を言うが、それが真意でないことは声の調子を聞けば分かった。

街を行き交う人々がすれ違ふアスルを見たりするのを横目に、おれも自分のポケモンを動かせようと考える。思えば、数日身体を動かさなかつたせいで楽に勝てる相手にも苦戦した、ということがあった。

この街のジムリーダー、スモモが繰り出してくるポケモンはかくとうタイプが主体だ。ついでに、かくとうタイプを有する複合タイプのポケモンの運用も得意としている。

バッジ二枚、手持ちポケモンは三匹のアスルならばフラッタをかけたポケモン三匹を出してくるだろう。ポケセンにあったパンフレットにスモモが所有するポケモンの種は記載されているので、どれを出してくるかのある程度の予想はつく。恐らくはアサナン、ゴリキー、ルカリオの三種だろう。

アスルは手持ちのポケモンは　コダック、スポミー、ヤミカラス。タイプ相性だけで考えれば多少の有利はつけられるが、ジムリーダーとそのフラッタをかけられたポケモンが相手ならば油断など到底できるものではない。

「ヤミカラスはノブオのビーダルにつばさでうつ攻撃よ！」

「攻撃はかわせ。隙を見つけて反撃だ」

アスルのポケモンの特訓は三匹目のポケモンに移行していた。飛ばたいて高度を稼ぐヤミカラスがビーダルに迫って澄んだ空色を叩きこむ。が、ビーダルは顔を僅かに歪めただけだ。いつもは間抜けのような顔をしているのに真剣そのものの顔つきをしている。

前の二匹にもビーダルに向けて技を放たせ、ビーダルの判断で隙を見つけ次第反撃させた。これが特訓の内容だ。

ビーダルの白く輝く前歯、いかりのまえばをすんでのところかわしたヤミカラスは垂直方向に距離をとる。その隙にビーダルはかげぶんしんを発動して自身の虚像を四つ作り出し、虚像と共に動いて本物を分からなくさせた。

「ううっ……ヤミカラス、手当たり次第にサイキネシス！」

羽ばたくヤミカラスの目が赤く光り、滞空する敵に向けていかりのまえばをレディして飛びかかるビードル達に不思議な力のベクトルが働いた。虚像が霞をぶわっとかき消すように吹き飛んで焼失、しかし一匹だけ残った本物がヤミカラスの右の翼に前歯を食いこませる。

悲鳴を上げながらヤミカラスが墜落、追いつきかけようとしてビードルが駆け寄って前脚でヤミカラスの体を押さえこんだ。

「よし、ここまで。もういいぞ、離してやれ」

おれの言うことを聞いたビードルは飛び下がっていつもの間抜けそうな顔色に戻る。拘束を解かれたヤミカラスは一息つくように高く鳴き、アスルが手に持つボールに仕舞われていった。

おれもビードルを仕舞うと、アスルが軽くお辞儀をしてこちらに歩み寄ってくる。彼女は笑顔で、

「ノブオありがとう！ さっ、早くポケセンに行こう！」

そう言うなりおれの手をとって小走りですを運ぶ。引つ張られながら芝生が綺麗な広場の時計塔を見る。上にアナログ、下にデジタルの時計が埋め込まれた塔は11時が過ぎたのを示していた。

ポケセンでポケモンの治療を済ませたおれ達はトバリデパート前広場のベンチに座っていた。

街は多くの人々が行き交い、雑踏と喧騒がこの場を満たしている。セイイチさんはここを待ち合わせ場所にしたが、果たしておれ達を見つけれらるだろ

「ああノブオ君、アスルさん。こんにちは」

なるほど、アスルの珍しい恰好を目印代わりにしたのか。自分分は会った時と変わらない七分袖にストラックスの出で立ちで、人ごみに紛れるようにして。いや、それが悪いとは言わないし良いとも言わないが。

「こんにちはー」

「こんにちは。で、どこに行くんですか？」

「お二人をわたくしの家に招待したくて。あ、お時間の方は取らせません。三十分もあれば」

「セイイチさんのお家！？ そこって色んな絵があるの!？」

アスルが目キラキラさせながらセイイチさんに問う。そんなにがつつくなよ。

「ありますよ。それに……いえ、とりあえず参りましょう。デパートの近くのアパートに住んでいるので、歩いて五分とかかりませんよ」

という言葉に偽りはなかった。三分ほど西に歩いた所にしっかりと作りの二階建てのアパートが見え、セイイチさんが一階にある一番右の部屋が自分のものであると紹介してくれた。

セイイチさんが鍵を開けておれ達を中に入れる。1DKの、一人暮らしにはちょうどいい部屋だ。日当たりが悪いからか創作の都合上か、赤いカーテンが閉め切られて電球のみで部屋の照明を得ている。

寝室兼アトリエとでも呼ぶべき部屋を覗いてみる。薄暗いそこには小さなベッドと木製イーゼルがよく目立つ。イーゼルにはなにかの絵のキャンパスが乗せられていた。

「お二人は昼食は済ませられましたか？」

「いえ、まだですが……」

「それならちょうどよかった、クリームシチューをつくっていたんです。一緒に食べましょう」

セイイチさんがキッチンのガスコンロの上にある鍋を指さすと、アスルが嬉々とした声を上げてダイニングのテーブルの前に座りこんだ。

おれも礼を言ってクリーム色の薄いマットの上に座り、差し出されたスープが注がれた深皿とスプーンを見て頬がほころぶのを自覚

する。

「ありがとうございます。いただきます」

「いただきますーす！ おおっつあっつい！」

「はは、アスルさん、そんなに急がなくても食事は逃げたりしません」

セイイチさんは屈託なく笑い、しかし少し急いでシチューを食べているように見えた。

十分後にはアスルが最後に食事を終えていた。先程からセイイチさんは自分の部屋に入ってしばらくは中に入らないで下さいと言ったきり、なにか物音をたてることなくじっとしているらしい。

「ごちそうさまでした！ あれ、セイイチさんは？」

「なんか自分の部屋にこもっちゃってる。なにかの用意をしているみた」

スパーンと引き戸が勢いよく開き、次に見たのは左手に黒い魔法の帽子と右手にデジタルカメラを持ったセイイチさんの姿だった。

「いですね。それ、なんですか？」

「アスルさんはポケモンの勉強のためにアナトリアからわざわざ来て下さったのですから、応援のしるしになにかプレゼントを差し上げようと思ひまして。もちろん、ノブオ君の分もありますよ」

言いながらセイイチさんはアスルの傍に立ってしゃがみ、魔法の帽子をアスルの金髪の上にそっとのせた。一気に異文化の集合体になった彼女は、しかしそれでいて不自然さの類を感じさせない。

セイイチさんは一つ頷き、それから一歩下がってアスルを被写体にデジタルカメラでシャッターを切る。

「ああ、やっぱり似合います。見てみますか？」

「……わあ、ちょっとかわいいかも！」

デジタルカメラの液晶画面を覗き込むアスルは嬉しそうに魔法の帽子をとって身体の前に持っていき、

「これくれるの？」

「そのつもりでお渡ししました。ここまで喜ぶとは思わなかったですが、どうぞお持ち帰りください。あと、これも」

セイイチさんはアスルに見せていたデジカメを渡した。

「差し上げます。折角遠いアナトリアからシンオウまで来てくれたのに、シンオウの世界を収めないという手はないでしょう」

「これもくれるの？ やったー！」

アスルは小躍りしようとして、ここがアパートであることを思い出したかのようにはっとして足を止める。その分彼女の表情から光があふれんばかりの笑みがこぼれた。

「ノブオ君にも同じデジカメを差し上げます。なにか恰好の好い服もプレゼント出来ればと思ったのですが……」

「いえ、ありがとうございます。でもこんなにもらっていいんですか？」

「もちろんです。ちょうど、わたくしにとって意味を失うものでしたし……誰かが喜ぶ顔を見たいなと思ひまして」

あはは、とセイイチさんは少し恥ずかしそうに頬を赤らめながらこちらを見て微笑んでいる。おれよりも年上であるはずの彼は、年下の無垢な少年のように見えた。

それからセイイチさんは自分の部屋に戻り、イーゼルを両手に持ってこちらへと戻ってくる。イーゼルにのせられたキャンパスには一点の油絵が乗せられていた。

セイイチさんはその油絵をおれ達に見えるようにイーゼルを置く。一目でモデルがアスルだと分かった。油絵の中の少女はベージュ色に絨毯模様のゆったりした、アナトリアの民族衣装を着ていたからだ。

日光がさんさんと降り注ぐ森の大樹にアスルが背中を預けてお昼寝していて、その周りを固めるようにヤミカラスとスポミー、そしてコダックが横になって目をつむっている。

「これって私たちだ！」

「タイトルは『アナトリアのトレーナーと彼女の仲間たち』と仮に

定めています。アスルさん、デジカメの使い方は分かりますか？」

「ううん、ぜんぜん」

「それならこの絵を撮影してみてください。そうそう、このボタンを押して」

それにしても緻密に描かれた油絵だ。芸術方面には明るくないが、これを描ききる時間は相当なものだろう。昨日の夕方に別れたきり、セイイチさんは今までこれを描き続けていたのだろうか。

「そうそう、そうです。簡単でしょう？」

「うん！ これで気になるところの写真をとってみる！」

魔女帽を被ったアスルは両手にデジカメを持って楽しそうにしている。これでセイイチさんの用事も終わ

「ああ、ノブオ君にもこの絵を撮影してもらいます」

そういうなりセイイチさんはキャンパスを「ひっくり返した」。

通常、キャンパスの裏側にもう一枚の絵があるというのはあまり考えられない。しかしおれが見ているのは「両面に油絵が描かれている」キャンパスのようだ。

高台で一人の少年が絵を見る者に背中を向けて堂々と立っている。少年が見据えているのは太陽で、そのせいで少年のシルエットは黒く描かれていて、彼の仲間であるらしい六匹のポケモンもまた黒く描かれている。

高台の下にある都会を思わせる建物の集合体に電灯は灯っていないことから、この場面が日の出を描いているのが分かる。日の出を見つめる少年と、マニユラ、ビードル、フローゼル、エテボース、ギャロップ、ムクホーク。こいつらのモデルは、

「タイトルは『発芽を待つ者たち』としています。さあ、どうぞ」

まるで、おれとおれのポケモンたちのようだ。いや、そうなのだ。セイイチさんから手渡されたデジカメを操作する。画面の中に赤く染まる太陽が印象的な絵を入れ、シャッターを切るべく、指が震えているのを自覚しながらボタンを押した。

かしゃつと無機質なシャッター音。データがメモリカードに記録され、おれはデジカメをおろしてもう一度「発芽を待つ者たち」を見る。

「……ノブオ君？」

「あつ、いえ……ありがとうございます」

おれは深くお辞儀をする。セイイチさんもアスルもなにも言わない。目頭が熱くなるが、おれはどうにかそれを打ち消し、顔をあげた。

アスルとセイイチさんが暖かい笑顔でおれを見つめている。それがとても嬉しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1755v/>

Seed 発芽の物語

2011年11月7日12時00分発行